積極的に悪いことをしたとは思へなかつた。それで居て、何となく氣が濟まなかつた。何となく心の底が邪しいのであつた。

從つて二人は、出來る丈、龍太郎のことを考へまいとした。龍太郎の龍の字も、彼等の頭から斥けようとした。そのために、二人は學生時代の想出話をすることさへ不便だつた。昔のことを話し出すと、直でも龍太郎のことが、彼等の頭の中に浮んで來るからである。二人は樂しい寢物語にも夕の食卓を挾んでの樂しい會話にも、ときどき突然心が傷き、心が痛み始めることが多かつた。龍太郎の三字は、彼等の心の痣であり、心の傷であつた。

が、然し人間の心を創つた神に祝福あれ。二人の心の痣は、彼等の心を驚ましめ吃が、然し彼等の心のお互に對する愛を、燃す薪として役立つた。二人は、お互にその心の傷を、撫で合はうとして、これまでの如何なる一組の男女が、愛し合つたにも、劣らない位に、烈しく愛し合つた。敵國外患なき國は、遂に亡ぶと云と諺がある。龍太郎と云ふ外患があるために、二人の愛は烈々として不斷に燃え狂つた。その裡に、夢のやうに三月經ち四月經ち、半年經つてしまふ。が、その間二人の心の痣である龍太郎は何うして居たがちう。

その三（冷き鐵）

郷里に於て、失戀の一年を、どんなに苦しみ拔いたかは分らない。その翌年、五月の半に、龍太郎は卒業試驗を受くるべく上京した。上京しても、彼は教室へ顏を出さなかつた。友人の誰とも顏を合はさなかつた。が、上野の不忍の池の畔で、ふと龍太郎に廻り合つた友人の一人は、龍太郎とは知りながらも餘りに烈しい變り方のために、暫ちくの間は、「河井君！」と云ふ聲が、何うしても口に出なかつた。

一番著しく變つたのは、その眼であつた。彼の眼はやや神經質であつた。が、それでも優しい青春の光が宿つて居た。が、現在の彼の眸は、凄じいまでに冷たかつた。それは、冷たい鋼鐵の如く、蒼く殺氣を湛へて居る。それは狂人の眼に近かつた。殺人犯の眼に近かつた。惡魔の眼に近かつた。ただ、それ等と違つて居る點は、その殺氣を裏付て居る名狀しがたい人間的な悲みの色だつた。

前から、瘠がただつたが、それが一入瘠せ、肩のあたりが痛々しくさへ見えた。そして、蒼白い

頬を、剃刀を長く當てない薄髯が、掩うて居た。

「やあ！　河井君ぢやないか。」

龍太郎の友人は立ち止まつて、聲をかけた。

「やあ！」

龍太郎は、不意に呼びかけられても、少しも駭かなかつた。その心臓が化石したやうに、冷然と言葉を返した丈だつた。

「君！　もう病氣はいいのかい！」

「うむ！」

龍太郎は、冷たく肯く丈だつた。

「一年棒に振つて、氣の毒だつたな。」

「うむ！」

龍太郎の鐵のやうな表情は、凍つたやうに動かない。

「今度は、健康に注意して、しつかりやつて呉れたまへ。」

「うむ！」

龍太郎の返事は、冷たくなつて行くばかりだつた。

友人は、張合抜けがしてしまふ。そしていい加減に挨拶して分れてしまふ。龍太郎は、夢遊病者のやうに、フラフラとして、蒼茫として暮れて行く上野の森の方へ歩み去る。

下宿に在つても、彼は机に向つたまま、茫然として、一日を過してしまふ。去年の火の出るやうな勉強振は、彼の何處にも見られない。成績に對する野心は、彼の頭から、煙の如く飛び去つてしまつて居た。

彼は興味もなく感激もなく、蠟を嚙むやうな氣持で試驗を受けた。が、然し彼の明晰な頭腦と記憶とは、包むに由なかつた。彼は、何等の勉強もしないで、三番と云ふ好成績を占めた。

その年の法學士に對する需要は、素破らしい勢だつた。殊に、十番以内の秀才に對しては、各會社銀行から、引張凧の有様だつた。龍太郎に對しては、龍太郎の學者肌の天分を尊重して居る民法の遠山博士や商法の古賀博士が、大學に殘つて呉れては何うかと云ふ交渉が、再三あつた。大學に殘ると云ふことは、教授になり博士となることを意味して居た。それは間違のない未來だつた。が

他の卒業生であつたら、一も二もなく承諾することを、龍太郎は首を横に振つた。それに次いで、三井物産から口がかかつた。が、龍太郎はそれをも、何の惜氣もなく斷つてしまつた。大藏省の次官を務めて居る岡崎氏は、龍太郎の父と知己であつたために、大藏省へ來ては、何うかと云ふ個人的の交渉があつた。が、龍太郎は、その凡てを斷つて、司法官試補になつた。

司法官、それは冷たい職業だつた。それは、終身官の保證は、あるにしても、其處に輝くやうな榮達はない。希望に輝き、野心に燃えて居る秀才は、決して此の道を撰ばない。然るに龍太郎は、光榮に導く凡ての他の道を嫌つて、一個の司法官となつた。彼は、冷めたくなつた自分の心に、此の冷たい職業が、一番適して居ると思つたのであらうか。

龍太郎の知人達は、龍太郎が司法官試補になつたことを知つて、駭くものが多かつた。が、龍太郎は、何等か信ずる所があるやうに、此の冷めたく鐵のやうに堅い職業に、冷めたくいそしんで居るのだつた。

彼は、一人の老女と小女とを使つて、上野櫻木町に家を持つた。故郷の父と母とは、龍太郎が卒業すると、直ぐ降るやうな緣談を傳へて來た。懸換のない一人息子の龍太郎に、早く嫁を持たして

初孫の顏を見たいと云ふことが、父母の烈しい希望だつた。

が、龍太郎は、さうした緣談に、ハガキ一つの返事さへしなかつた。卒業した翌年になると、母が堪りかねて、緣談を勸めるために、上京した。母のトランクの中には名古屋市の某實業家の娘だとか、伊勢の豪農の娘だとか、某貴族院議員の娘だとか、第一流の某銀行家の娘などと候補者の寫眞が、五六葉もは入つて居た。が、龍太郎はそれらに、一瞥さへ與へなかつた。龍太郎の優しい母親は、最後には到頭泣き出した。

「お前は、何時の間に、そんなに親不孝におなりだえ！　小さいときから、私の云ふことは、何でも聽いて呉れるお前が、この年になつて、そんな無理を云はうとは思はなかつた。相手が、氣に入らないと云ふのなら、いくらでも別なのを探すから、何もお前が、望んで居た駒井さんのお嬢さんが、外へ行つたからと云つて、あの方よりも以上の娘さんを探せば幾何でもあるのだから。」

靜子の名前が出ると、龍太郎は肝を甞めたやうに、不快な氣持になるのだつた。

「阿母さんが、どんなに仰つしやつて　僕はいやです。」

母の心が、分らない龍太郎ではなかつたが、騎虎の勢ひで、つひ烈しく云ひ切つてしまふ。母は

泣き出しさうになる。

「ちや、お前何時が來たら、結婚してお呉れだえ？」

「何時だか分りません。」

母は、到頭涙を眼に湛へる。

「何時だか分らないつて！　妾だつて、お父さんだつて、何時死ぬかも分らないと云ふ年なのだからね、死ぬまでに、どうしても初孫の顔を見たいと、妾もお父さんも口癖のやうに云つて居るのだからね。」

龍太郎は、不快になつて默つてしまふ。心の裡で、親のために結婚させようとする、母の舊い考へ方を非難して居る。が、それを口に出すことは、あまりに馬鹿々々しいやうに思ふ。

「今年がいやなら、來年だとか、その位なことは、約束して呉れてもいいではないか。此の寫眞だつて、お前手に取つて見て呉れてもいいではないか。此のお嬢さんなんか、駒井さんのお嬢さんよりも器量は、勝つて居るやうに思ふがね。」

さう云ひながら、母は一葉の寫眞を、龍太郎の眼の前に差し出す。龍太郎は惡いと思ひながら、

プイと立つて、部屋の隅に置いてある机の前へ行つて坐つてしまふ。

「まあ！」

母は、呆れて聲を出す。

「お前、何うしてさうおなりだえ。お前結婚する氣はないのかえ。」

「出來ません。お母さんが、何と仰有つても駄目です。」

「今年が、嫌なら來年だとか、その位な約束も出來ないのかえ。」

「出來ません。事に依ると、僕は一生猶身で通すつもりです。」

龍太郎は、到頭母に對して、最後の通牒を送つてしまふ。母は、眼に涙を一杯湛へながら默つてしまふ。

十日ばかり滯在して、毎日のやうに、しつこく龍太郎を說いた母も、到頭諦めて、老いた胸に絕望の傷を負ひながら、故郷へ歸つてしまふ。母を送り歸した龍太郎は、毎日のやうに、その冷たい身體を、冷めたい役所へ運ぶ。そして、冷めたい法律の條文に依つて、冷たい仕事を繰り返して行く。彼の生活は、自ら好んで、自分の青春を氷の裡へ閉して居るのだつた。自ら、好んで孤獨地獄

へ陥込んで行くのだつた。

それに比べては、靜子と俊輔の生活は、天國だつた。半年經ち、一年經つ裡には、龍太郎のことも、自然に忘れて來た。もう、龍太郎のことを考へ出しても、心が痛むやうなことがなかつた。彼等の心の痣は、日に日に色が薄れて、おしまひには、消えてしまひさうになつた。

その上に、二人の生活に、新しい福音が來た。それは結婚してから、丁度一年半になつた頃、靜子に姙娠の徵候が現はれたことだつた。

姙娠と云ふこと、それは結婚した青年の男女に取つて、欣ばしい福音には違ない。が、結婚して一月目か二月目に姙娠することは、それは餘りに不意打である。まだ二人限りの自由な、ノビノビした生活を、充分樂しまない裡に、妻ははしなくも子供と云ふ新しい愛情の絆に足手を奪はれてしまふ。むろん、子供を入れての夫婦生活が、どんなに樂しいかは分つて居る。が、夫婦二人限りの自由な生活も、一生に再びとは得がたいものである。子供が出來ると、夕方の散歩などは、容易には出來なくなる。が、それかと云つて、結婚して、三年も四年もの間、子供が出來ないと、夫婦の間が妙に、不安になり、いらいらして來る。だから、理想を云へば、結婚して二年か、三年の間、

自由な二人限りの生活を味つた後に、姙娠することである。

さう云ふ意味でも、靜子の姙娠は、幸福な時斯だつた。

「靜子は、まだ子供は出來ないものかしら。」

東片町の兩身が、少しあせり氣味になつて來た頃を、見計つたやうに、靜子は姙娠した。靜子が姙娠したと云ふ知らせが、駒井氏夫妻を、どんなに喜ばせたか分らない。靜子の家の空氣までが、一變する。俊輔も靜子も、活氣づいて、ソワソワする。

「姙娠の心得」「姙娠から出產まで」そんな本を買つて來て、靜子は俊輔に笑はれる。東片町の母は小石川へ來る度に、まだ六月も七月も未來の、出產の心得を、繰返し繰返し、幾度も云つて聞かせる。

靜子と俊輔とは、食卓で、生れて來る子供の名前を幾度相談し合つたか分らない。

「何か新しい名前を付けるのだねえ。古い月並な名前は決して付けないことにする。」

「いいわ、妾も何かかう變つた奇拔な名前を付けてやりたいわ。」

「もしかすると、東片町のお父樣が、俺が付けると云ひ出すか知れないぜ。お父樣に付けさせると

舊い名前を付けられてしまふぜ。」

「いいわ、妾が、お父様に前から斷つてしまふわ。」

「だつて、まだ男だか女だか分らないのだからねえ。」

「いいぢやないの！　男ならかう、女ならかうと、定めて置くといいわ。」

「男なら、俺は洋と云ふ字が付けたいのだがね。洋！　いいだらう。新しい感じがするだらう。洋太郎。」

さう云つて、俊輔は洋太郎と云ふ音が、あまりに龍太郎に似て居るので、直ぐ云ひ直した。「洋太郎は、少し變だ。洋三、洋三も變だな。長男だから、洋一、洋一郎、それとも洋と云ふ一字にしていろしとでも讀ませるかな。」

「貴方の俊と云ふ字を下さつたら、どう。俊一とか俊雄なんていいぢあないの。」

「それも、無難は無難だね。が、俺は、洋と云ふ字が氣に入つて居るんだがね。」

「洋子と云ふのはいいわね。女なら、洋子にしませうね。」

「女の洋子はいいね。が、女なら考へて居る名前があるんだよ。此間、役所の女給仕に來た娘の名前が、都と云ふ名前なんだらう。都と云ふ名前は變つて居ていいぢやないか。」

「だつて妾達の娘も、女給仕に出なければならないほど不仕合せだつたら困まるわ。」

「はゝゝゝゝゝ。それもさうだね。」

「おほゝゝゝゝゝ。」

二人の心は、此上もなく樂しかつた。が、兩親がかうした、タワイもない會話に耽つて居る間も靜子の腹に宿つて居る男女不明の新しき生命は、時々刻々生長して行つて居るのだつた。靜子が母となる日が、時々刻々近づいて來るのだつた。

その四　（生みの欣び）

六月七月と月は、重つた。

七月目のある朝、丁度十月の半で、狹い庭には、二株の萩が咲き亂れて居た。靜子は朝の支度をして、食卓を運んで居ると、ピクリと腹の中に動く者があつた。

「あら！　動いたわ！」

靜子は思はず頓狂な聲を出した。くすぐつたいやうな嬉しさが、胸にこみ上げた。

「何が動いたのだ！」

顏を洗つて、新聞を讀んで居た俊輔は、駭いて顏を上げた。

「お腹の子が。あら、あら、又動くのよ。」

さう云つて、靜子は小さい動物をでも、追ひかけるやうな手附で、自分の横腹の所を抑へた。

「そんなに動くのかい。どら。」

俊輔はさう云つて、立ち上り、靜子の横腹へ手をやつたが、ピクリともしなかつた。

「何だい！　ちつとも動かないぢやないか。お前の神經ぢやないか。」

「いいえ！　今まで、動いて居たのよ。何だか小さいお手で、妾の横腹をグイグイ突いて居たやうな樣子よ。」

「早く生んで呉れ生んで呉と云ふ催促だね。」

「まあ、こんなに早く動くものかしら。」

靜子は、食卓の上に、食器を並べながら首を傾しげる。

「よく動く子は、女の子かい男の子かい。」

「女の子だと云ひますわ。」

さう云ひながらも、靜子はお腹の子が動き出しはしないかと、首を傾しげて待つて居る。が、初て生命の表象を見せた肉塊は、又元のやうに靜まり返つて、ピクリともしない。

が、子に對する感情が、靜子の胸の中に一杯に充ちて來る。目には見えなくとも、お腹の中の子に對して、母としての愛と責任とを十分に感じる。

彼女は、その日から前よりも、一層身體を大切にする。自分一人の身體でなく、新しい生命の母胎であると云ふ責任を痛切に感じる。

俊輔が、ある暮れ方歸つて來ると、靜子は居間で、何かしら赤い着物を縫つて居た。俊輔が、急に玄關へ上ると、靜子は駭いてそれを隱したらしい。

「何を隱したのだい。」

「いいもの。」

靜子は、こぼれるやうな微笑を含みながら、答へる。

「いいものぢや分らないね。何！　見せて御覽！」
「恥しいから、いやですわ。」
「何が恥しいことがあるものか。見せて御覽よ！」
「當てて御覽なさい！」
「當てる？　さうだね。赤ちゃんのお着物ぢやない。」
「それに似たもの。」
「ぢや、羽織かい？」
「羽織なんか、生れたての時は着せないのよ。」
「ぢや、何だい。」
「お蒲團。」
さう云ひながら、靜子は、縫ひかけて居た蒲團を出して見せる。見る目もあざやかな可愛い蒲團の友禪模様が電燈の光の下に、燦として美しい。
「メリンスかい。」

俊輔は、觸つて見ながら、さう云ふ。
「まあ。これをメリンスなんて云ふ人はないわ。縮緬よ。」
「贅澤だね。まだ高等官になつたばかりの小役人の子供に縮緬の蒲團は、贅澤すぎるよ。」
「でも、いいぢやないの。妾の古い長襦袢を直してやつたのよ。もう華美で着られないのですものの。」
生れない子に對しても、母は既に母である。少しでも子供のために、盡したい心は、靜子の胸の中に、ちやんと植ゑ付けられて居る。
「蒲團よりも、着物が先きぢやないか。」
「お着物の方は、もうとつくに縫つたのよ。四月目だつたかしら。あんまり早いので、誰にも內證で縫つたのよ。しげにも知らせなかつたのよ。」
俊輔は、思はず微笑せずには居られなかつた。
「早いね！　四月目に着物を縫ふなんて、手廻しがよすぎるよ。そんなに、早く手廻しをして、流產でもしたら何うするのだ。」

靜子は、美しい眉を一寸ひそませる。

「まあ！　そんなこと、仰有つちやいや。でも、妾一旦宿つたものは、どんなことがあつても、生んでやるのが、母親の責任だと思ひますわ。もし、自分の不謹慎から流産などしたら、それこそ取返しの付かない罪だと思ひますわ。だから、妾あらゆる注意をして居ますのよ。」

靜子は、いぢらしい決心を見せて云つた。俊輔は、自分が一寸でも冷かしたのが、恥しくなつた。

「が、あんまり心配してもいけないよ。なるべく、心持を自然にして置くんだよ。出産と云ふことは、病氣ぢやないんだから、普通の生理作用なのだから、順調にさへ進んで行けば、それでいいのだから、初産だからと云つて、あまり一生懸命になると、いけないのだらう。」

俊輔は、しみじみと妻に云ふ。かうして、年若い夫婦は、慰め勵ましながら、出産の日を待つた八月目になつたとき、靜子は知己の産科醫に診て貰つた。胎兒にも母胎にも、何等の異常がないことを確めて安心した。

その年は暮れて、新しい年が來た。丁度結婚してから三年目の正月だつた。その十日の夕方から靜子は出産の床に就いた。最初産科婦人科の病院へ入院して、出産をすると云ふ話もあつたが、か

かつた産婆が、安産であることを保證して呉れたので、それにも及ぶまいと云ふので、自分の家で産むことになつた。

ただ、手傳ひに來て呉れる筈の東片町の母が、靜子の陣痛を催したので、使ひをやると、折惡しく風邪氣味で昨日から寢て居たのであつた。

それでも、靜子の産床には、産婆と二人の看護婦とが付き切りに付いて居た。が、陣痛が烈しくなつて來れば來るほど、靜子はある心細さを感ぜずには居られなかつた。

午後の五時頃から催しかけた陣痛は、十時頃から愈々烈しくなつた。産婆が、熱湯を搾つたタオルで、腹部を溫めるに從つて、産みの苦しみは益々烈しくなつて行く。

小さい苦悶の聲が、靜子の喰ひしばつた唇から洩れ始めた。愼ましい靜子は、渾身の力で、苦しみの叫びを擧げまいとした。が、烈しい生理的な苦しみに、堪へることは出來なかつた。

「あツ！　あツ！　あツ！」

身を切るやうな聲が、斷れ斷れに靜子の口を洩れた。俊輔は、最初なるべく産室から遠ざかつて居たいと思つた。日本の習慣では、男子はなるべく産室に近寄らないことをよしとしてあつた。俊

輔もさうした習慣に從ひたいと思つて居た。が、靜子の苦悶の聲が高くなればなるほど、彼は二階の居間にぢつとして居ることは出來なかつた。彼は、幾度も梯子段に足を踏みかけた。が、その度に妻の出產のために、大騒ぎをする自分が、恥しいやうに思はれて、踏み止つた。產婆は最初俊輔に云つた。

「お產の苦しみ丈は、傍からは死ぬやうに苦しんで居ても、決して心配は入りませんからね。奥さんも、お初てだから、どんな御樣子だか分りませんが、決して御心配は入りませんから、どうか、安心して私にお委せ下さいまし。」

俊輔は、產婆にさう云はれて居る丈に、產室に顏を出すことが恥しかつた。

が、十二時を廻ると、靜子の苦悶の聲は、一層烈しくなつた。

「あツ！　あツ！　あツ！」

身悶えする物音までが、二階に居る俊輔に、手に取るやうに聞えて來た。彼は、もう義理にも外聞にも、ぢつとして居ることが出來なかつた。彼は、二階の梯子を、なるべく音をさせないやうに馳け降りた。

彼は、躊躇しながらも產室の襖を開けた。其處に、彼の最愛の靜子は、髮を振り亂し、脂汗を垂らしながら、今生みの苦しみを苦しんで居るのだつた。

彼は、枕元に近づかずには居られなかつた。

「靜子！　靜子！　しつかりするのだぞ！」

俊輔は、靜子の顏の上に、自分の顏を、突き出しながら叫んだ。

靜子は、流るるやうに汗ばんだ顏を振り向けて、その血走しる眼で、ぢつと俊輔の顏を見た。その刹那に、彼女は苦痛を忍びながら、ニッと笑つて見せた。俊輔は、傍に人が居なかつたら、そのいぢらしい額に、接吻したに違ひない。

「いいかい。確するのだぞ。俺が傍に居る方がよければ居てもいいのだよ。孰ちらだい！　居る方がいい？」

靜子は、默つて肯づいた。その時に、靜子に烈しい陣痛が來た。彼女は、無意識に枕元に居る夫の手を取つた。そして、それを力にして、その苦しみと戰つた。彼女の手は、力一杯夫の手を握り締めた。夫婦がこのときほど一心同體であつたことはない。俊輔は、靜子がこれほど恐ろしい力を

持つ　居るとは思つて居なかつた。

陣痛は、續けさまに來た。その度に、靜子は夫の手に取り縋つて良を悶えた。俊輔は、このときほど、靜子をいちらしく可愛いと思つたことはない。彼は、妻の手を力一杯握り返しながら叫んだ

「しつかりして呉れ！　安心して、俺が傍に居るから安心して！」

陣痛と陣痛との間に、靜子は夫の顏を振り仰ぎながら見た。そして、夫の慈愛に充ちた顏から慰めを得て、新しい苦痛に堪へて行くのであつた。

二時を打つた頃から、陣痛の襲つて來る間隔が、だんだん迫つて來た靜子は、突如「あッ」と云ふ苦しい叫び聲を擧げたかと思ふと、産床の中から、身をのけ反るやうに、一尺ばかりも押し出したかと思ふ刹那、靜子の呻きよりも、もつと强い泣き聲が、閉め切つた室の中を壓倒して居た。それは靜子の産床の裾の所に、うごめいて居る小さき者が、初て揚げた生命の凱歌であつた。

産婆は、素早くそれを抱き上げた。

「お欣びなさい。お坊つちやんですよ。」

それを聞いたとき、俊輔は自分の胸に、湯のやうなものが、一杯に溢れるのを感じた。

死人のやうに蒼白になつて、喘いで居た靜子の顏にも、産婆の聲が耳に入つたと見え、目を閉しながら、微かな微笑が、その頰の邊に漾うて居た。

「本當にお可愛い坊つちやんだこと。」

さう云ひながら産婆は、そのむくむく動いて居る肉塊を眞新しい綿の中に包んだ。

俊輔は、膝をすり寄せて、自分の子供を見た。それは、顏中を口にして、泣き喚いて居た。が、その握りしめて居る拳や、むつくりとした膝の附根などを見て居ると、云ひ知れぬ熱い涙が、頰を傳つて流れた。

彼は、妻を振り返つた。そして、額の汗を手で拭つた。

「靜子、よく生んだよ。立派な男の子だぜ！」

看護婦や産婆が居るのにも拘はらず、口に出して賞めずには居られなかつた。

靜子は、眼を細く刮いて、嬉しげにニツコリ、夫の顏を見て笑つた。

もう、生みの苦しみは去つて、女性としては最大の歡喜なる生みの欣びを感じて居るのだつた。

その五（奇蹟）

子供の名は、俊輔の希望通り洋一と呼ばれるやうになつた。

産後の肥立は順調だつた。二十日目位から、靜子は床を拂つて、普通に働いた。純白な靜子の乳房は、あり餘るほどの乳を持つて居た。

子供は、大きくなるに從つて、目鼻立が、ハツキリして來た。色の抜けるやうに白いところは、母親に似て居た。眉毛の太い所は、父に似て居た。

東片町の母は、風邪が癒ると、毎日のやうに靜子の家に來た。朝九時頃に來て、夕飯の支度をしてから、東片町へ歸るのが、日課のやうになつて居た。

父の駒井氏も一週間に一度位は、屹度表町の家を訪ねた。そして、まだ目も碌々見えない初孫が欠伸をしたり、泣いたり、伸びをしたりするのを見て欣んだ。

靜子も俊輔も、洋一が生れてからは、世の中が、急に明るくなり、世の中が急に廣くなつたやうに感じた。

洋一の顏をいつまで見て居ても退屈しなかつた。洋一のことは、何時まで話をして居ても退屈しなかつた。

「これから、茲の家は子供第一の云ふ格言でやつて行かうぢやないか。」

ある晩、俊輔は夕食を濟ませると、母に抱かれてスヤスヤと眠つて居る洋一のむつちりした頰をつつきながら云つた。

「貴君、そんなことをなさつちや起きますよ。靜子は一寸夫を制してから、「いいわ、坊や第一、いいわ、是非さうして下さいね。」

「むろん、何處の家だつて、子供を可愛がらない家はない。が、無自覺に可愛がるのは、いくら可愛がつたつてそれは猫可愛がりと云ふものだ。俺達は、もつとしつかりした自覺で以て、子供を愛しなければならない。」

「妾には、難しくつて分らないわ。どうすればいいの。」

靜子は素直に訊いた。

「さうだね。堅苦しく云つて見ると、われわれが人類の進歩と向上とを計るのには、何うしても子

供を大切にしなければならないと云ふことになるのだ。子供を愛し子供を尊敬する。子供を愛して子供を大切にして、子供を我々よりも一段偉いものにする。其處に人類の進歩があり向上があるのだ。人間が自分の子供を、自分より、偉いものに育てて行くと、人間はおしまひには、神様のやうに完全なものになれるのだ。どうだい、さう云ふ理屈ぢやないか。」

「本當ですわ。」

理解のいい靜子には、夫の云ふことが、ハツキリと分つた。

「猶逸のある思想家が、子供を尊敬しない民族は亡ぶと云つたが、全くさうだね。が、日本には子供を自分の犠牲にする親の方が多くていけない。本當は、親が子供の犠牲になつて、子供を立派なものにしなければいけないのだ。」

靜子は默つて聽いて居る。

「が、中には子供を愛する心算で居ながら、本當は子供を、自分の犠牲にして居る親もあるよ。俺が、一高に居たときに、級に清川と云ふ男が居たがね。この男は、生れ付き文藝が好きで、文科が志望だのに、親父が何うしても、それを許さないのだ。自分が、政治家なものだから、息子も法科を卒業させて、自分の後繼にさせようと云ふ肚なのだ。そのために、清川は學課を休んで小說を讀んだり芝居を見たりして居たために、到頭落第して、中途で學校を廢してしまつたが、これなどは親が子供を愛する心算で居て、その實は子供を自分の犠牲にして居るのだ。親が、子供の素質を十分認めてやらないで、勝手に醫者にしようとか辯護士にしようとか、軍人にしようとか云ふのは、甚だ怪しからないことなのだ。子供は子供のための子供で、親のための子供ではない。」

「まあ！　大變氣焰が上りますことね。」

靜子は、ニツコリ笑ひながら云つた。

「なに、氣焰ぢやない。僕の持論なのだ。お前にいつか聽いて貰ひたいと思つて居たのだ。婦人解放と云ふ言葉があるねえ。あれと同じやうに、我々は子供解放と云ふことを考へなければいけないと思ふのだ。婦人を男子の壓制から、解放するやうに、子供を兩親の壓制――むろん愛の壓制から解放しなければならないと云ふことなのだ。親が、自分の舊い理想に當てはめて、壓制的に子供をあの型に入れようとする。それがいけないと云ふのだ。子供は、もつと子供自身の要求に依つて、育て上げられなければいけない。もつと、子供の素質を認めて、子供自身が充分その素質を伸し切

ることが出來るやうに、教育しなければいけないと云ふのだ。」

俊輔は、興奮しながら話した。

「まあ！　お父様の理想の育て方が實現されるのは、何時の事でせうね。」

「なに、そんなことを云つて居たとて、直ぐ大きくなるよ。が、どんなに小さい時からでも、俺達の態度は、ちやんと定めて置く必要があるのだ。子供第一！　子供崇拜！　子供解放！　分つて。」

「分りましたわ。ほんたうに、いいお父様ですこと。」

靜子は、洋一に頬ずりしながらニツコリ笑つた。

生れて二月位經つた時に、洋一は初て發熱した。靜子が駭いて用意の檢溫器を當てて見ると、三十八度五分だつた。彼女は、直ぐ俥を命じて、豫てから聽いて居た本郷三丁目の小兒科專門の醫師へ馳せ付けた。醫師は、愼重に診察した後、首を心持傾しげながら、

「少し腸を壞して居るのです。決して御心配はありません。二三日するとよくなります。」

さう云つて、白い散藥を呉れた。が、何となく物惰い顔をして居る子供の顔を見て居ると、何か大病の前兆ででもあるやうに思はれて、醫師の言葉が、お座なりの安請合のやうにさへ思はれた。

その夜、靜子は洋一が、スヤスヤと眠つた後も、何うしても眠られなかつた。幾度も、手を小さい額の上に載せた。

「ほんたうに、大丈夫かしら。お醫者様は、白い散藥しか下さらないのですよ。」

靜子は、醫者の輕い手當が不平さうに、夫に訴へる。

「馬鹿な奴だな。病氣のときは、御醫者様に委せて置くのだよ。それより外にいい方法はないのだ。」

「でも、こんなに熱があるのに、冷さなくつてもいいのでせうか。」

「それは素人の心配なのだ。お醫者が二三日したら、快くなると云つたのなら、安心して居ればいいぢやないか。」

俊輔は遉に迷はない。二三日すると、醫者の云つた通り、ケロリとよくなつてしまふ。

それからも、洋一は二月に一度三月に一度は、熱を出したり、お腹を壞したりする。靜子はどんな輕微な熱が出ても、直ぐお醫者の許へ連れて行く。何日かは、檢溫器を當てて見ると、わづかに三十七度五分しかなかつた。お醫者は遉に笑つた。

「三十七度五分しかありませんよ。赤ちやんは、三十七度二三分までは、平熱と思つてもいいのです。」

靜子は、遺に恥しくなつた。が、此のお醫者は熱が低いからと云つて、決して診斷を忽せにする人ではなかつた。洋一の小さい膝頭に小さい槌を當ててから、瞼の裏を返して、舌を抑へて咽喉を見てから、聽診器を取つた。呼吸器を診る。それから、お腹に手をやつて、腸の樣子を探つて、診る。そして、初て診斷を下す。

「少しお腹を壞して居るのかと思ひます。が、この位なことは、度々あるのです。赤ちやんは、いつもいい通じがあると云ふ譯には行かないのです。」

靜子は、お醫者の丁寧な診察に、スツカリ安心して歸つて來る。その次ぎまた少し發熱があつたとき、靜子は醫者に連れて行くことを躊躇する。

「こんなに早く連れて行くと、又お醫者樣に笑はれはしないかしら、もう少し、捨てて置いてから行かうかしら。」

さう云つて、俊輔に相談する。

「何が笑はれるものか。お醫者へ早く連れて行き過ぎると云ふことはありやしない。何でもなくてお醫者樣が笑へば、お前も欣んで笑へばいいぢやないか。」

「ぢや連れて行きますわ。」

靜子は、氣輕に云つて直ぐお醫者へ連れて行く。お醫者は、笑ひながらも、丁寧に診察して異れそして心配する必要のないことを確めて與れる。

さうした兩親の神經過敏と云つてもいい態度は、洋一の身體を重い病氣から衞つた。彼は時折の輕微な發熱の外は病氣らしい病氣に罹らなかつた。健全にすくすくと生ひ立つて行つた。

身體の發達も言語の發達も良好であつた。お誕生を過ぎる頃には、危い足取ではあるが座敷中を歩き廻つた。「うまうま」とか「母」とか「父」など云ふ言葉を覺えた。

洋一の日々の成長は、兩親に取つては、奇蹟の連續であつた。それは不思議な創造であつた。靜子は夫が歸つて來ると、何よりも先きに洋一のその日の手柄を報告するのであつた。

「ねえ、貴君。洋ちやんは、本當にお悧巧ですよ。妾つくづく感心してしまつたのよ。」

「何がさ！」

俊輔も洋服を和服に着換へながら、相好を崩して訊く。

「今日ね、西洋草花を賣りに來たものですからね。二鉢ばかり買つたのですよ。御覽なさい、あのシクラメンを買つたのですよ。そしてお金を拂はうと思つて、しげに鏡臺の上に置いてある財布を持つておいでと云ふとね。洋一がちやんと先廻りして、鏡臺の所へ行つて居るぢやありませんか。」

「それで財布を持つて來たのかい。」

「いいえ、それまでは氣が付きませんわ。」

「ぢや、何にもならないぢやないか。財布を持つて來たのなら感心してもいいが、鏡臺の前へ行つた丈ぢや。そんなことで、感心するのを親馬鹿と云ふのだよ。」

俊輔は、笑ひながら云ふ。

「まあ——貴君親馬鹿なんて、だつて鏡臺と云ふ言葉丈でも聞き分けたかと思ふと妾感心だと思ひますの。」

「なあに、偶然に鏡臺の前へ行つたのだよ。」

「まあねえ。ひどいお父樣ですこと、そんなことを仰有つちや、悧巧な子供なんかありやしませんよ。ねえ、坊や。」

と、靜子は洋一に御乳を喰べさせながら云ふ。

「なにあるよ。どの子供だつて、兩親には悧巧に見えるのだよ。」

「本當にさうかも知れないわ。」

靜子も到頭笑ひ出してしまふ。

が、俊輔が夕食を濟して、仰向けに寢ながら、新聞を見始めると、靜子が

「しげ、旦那樣に枕を出してお上げなさい。」と云ふ。すると、今まで母の膝に腰を掛けて居た洋一が、つと立ち上り、向ふの押入れの襖の所へ走しつて行つて、それに手を掛ける。

「まあ！　御覽なさい！　貴君。あれでも親馬鹿ですか。」

靜子は勝利者のやうに叫ぶ。俊輔も起き直つて、それを見て心から駭く。

「うむ！　偉いぞ。こいつは駭いた。お父樣があやまるぞ。」

「それ御覽なさい！　妾は親馬鹿丈ではないでせう。本當に悧巧なのですから。」

靜子は勝ち誇つたやうに云ふ。

「うむ！　たしかに馬鹿ぢやないねえ。」

「まあ！　馬鹿ぢやないなんて。わづか一年半位で、こんなに悧巧な子はないと慰ふのですわ。半込の伯母さんところの、健さんなんか二誕生過ぎて居るのに、ちつとも分らないのですからね。」

「そら、子供自慢が始まつたねえ。まだ早いよ。」

「本當に何處の親でも、そんな同じやうなことを思つて居るのですわねえ。」

二人は、さう云つて、口の先では、反省するものの心の底では、自分達の子を世界で、一番可愛くて悧巧な子だと思ふ。然し、それは仕方がない。凡ての兩親は銘々の子をさう思ふのであるから。

洋一が二誕生を迎へる頃には、靜子は既に洋一丈の母ではなかつた。彼女は、二番目の子を宿して居た。

結婚後五年目に、彼女は女の子を生んだ。俊輔の好みに依つて、留美子と呼ばれた。留美子は母に似て、美しい子だつた。天性の美貌が、既にその搖籃の裡に輝いて居るやうな子だつた。

一姫二太郎と云ふ。が、然しそれは最初に女子を生んだ夫婦の負け惜しみ若しくは、慰めであつて、誰でも理想は一太郎二姫である。男子を生んで、相續の點で嫡男を得て安心した後女子を生む

それほど、好ましい順序はない。靜子は正に、さうであつた。夫婦の間は日に益し調和して、水も洩らさなかつた。可愛い二つの楔は堅きが上にも堅かれと二人の間を結び付けた。家庭には不斷の春が漲ちた。二人の結婚に浴びせかけた龍太郎の呪詛などは如何なる風に吹き飛ばされてしまつた事だらう。

その六（凶兆）

その間にも、俊輔の官界に於ける昇進は目覺しいものだつた。彼は、留美子が生れる少し前に東京府の事務官に轉任して居た。それは、大學を出て間もない彼に取つては、異數の拔擢であるために、新聞紙上には非難さへあつた。國政會顧問駒井氏の女婿であるために、こんな昇進を見るのだと。むろん、俊輔の昇進には、國政會總務たる内務大臣の援引がない譯ではなかつた。が、然し一方から云へば、俊輔の秀でた政治的才幹は、この異數な拔擢に、充分價して居ると云つてもよかつた。殊に、彼は種々の社會問題に研究を積んで居たので、社會事業を重視する東京府の事務官としては、彼ほどの適任がないと云つてもいい位だつた。

事務官になると共に、靜子の家は芝公園の中にある東京府の官舍に移つた。それは、二間の洋館と四間の日本館とから出來て居る立派な邸宅だつた。表町の四間の借家に比べると、狹い井戸から廣い泉水へ放たれたやうな伸々した心持になつた。しげは二十になつて居たが、忠實によく働いた官舍に移ると共に、女中をもう一人殖した。十六になる男子を書生として使つた。さうして靜子はもう立派な一個の家庭の主婦だつた。

事務官となつてからの俊輔の評判は、一層よかつた。俊輔の考案したいろ〳〵な社會的施設が、時代の要求に投じたために、若手の事務官としての彼の名聲は、府知事をも凌ぐばかりであつた。

そして、春の海のやうに、豐な幸運に充ちた日が、俊輔一家の前に永久に續いて居るやうに思はれた。

が、晴れ渡つて雲もないやうな空は、やがて暴風を生み雷霆を產む空である。

俊輔が、事務官に轉任してから二年目、留美子も二つになつて、その可愛い片言の饒舌が、一家の空氣に、不斷の歡喜を湛へて居るときだつた。靜子は、ふと夫の俊輔が、今までの夫でないことに氣が付いた。

むろん、俊輔が夜遲く歸り始めたと云ふのではない。靜子に情なく當り始めたと云ふのでもない。何時ものやうに、靜子には優しい夫であり、子供には慈愛に溢れた父であつた。が、靜子は夫の何處かに暗い翳が付き纏ひ始めて居るのを感じた。

夫婦の間は、光線と種板のやうに、夫の心をどんなに隱しても、妻に感ぜずには居ない。俊輔は平素のやうに快活である。が靜子は、その快活さに、妙な暗い翳が付いて居ることを感ずる。昔のやうに元氣である。が、その元氣が、何處か附元氣であるやうな感じがする。

夫にさうした戀な樣子が見え始めてからも、靜子は一月ばかりは何も云はなかつた。が、ある晩食事を濟して横になつて居た夫が、つい溜息らしいものを、洩したので、靜子は何うしても默つて居ることが出來なかつた。

「貴君、何か御心配があるのぢやありませんか。」

妻からさう訊かれると、俊輔は可なり不快な顏をした。靜子は、夫がこんなに不快な顏をするのを見たことがなかつた。彼女は、訊かなければいゝと思つた。

俊輔は、重々しい口を開いた。

「さうかねえ。そんなに見えるかねえ。」

「見えますわ。妾此間中から氣になつて仕方がないのです。何か御心配があるのぢやありませんか。」

夫の顏に、鉛のやうな暗い色が漂うた。

「いや心配なんかありやしない。」

さう、云ひ切ると、くるりと向ふへ寢返りを打つたまま長い間、口を利かなかつた。

が、靜子にも夫の心配の原因が分る日が來た。それは十一月のある日だつた。十時頃夫を送り出した靜子は、居間で縫物をした居た。けたたましい號外屋の鈴が突如靜な公園の空氣を搖がせた。平素は、號外などは氣にしない靜子が、その日の號外の鈴を聞くと、妙に胸騷ぎがした。

「しげや、號外を買つて來ておくれ。」

洋一と留美子とを玄關の前の芝生で遊ばせて居たしげにさう云ひ付けた。

しげは、洋一と留美子とを殘したまま、公園內の道路の方へ行つたが、やがて新聞の一頁の半分位の大きさの號外を、右の手に持ちながら歸つて來た。

靜子が、その號外をしげの手から受取り、標題を一瞥したとき、彼女の胸は、ハツと潰れるやうな打擊を受けた。

府市に跨る大疑獄——記事掲載差止本日解除さる」と大きな活字で刷つてあつた。東京府と云ふ字を見ると、靜子の手は、ぶるぶる顫へた。

それは、東京府市の官公吏及び東京市の市會議員に關する收賄の嫌疑であつた。そして、收賄した官公吏と市會議員の人名が、ズラリと並べてあつた。靜子は血走しる眼で、それを貫くやうに見た。夫の名前が無かつたので、彼女は虎口を逃れたやうに、ホツとしたが、それは彼女の糠喜びであつた。最後の所に、彼女を地獄の底へ突き落すやうな言葉があつた。「尙東京府事務官篠原俊輔氏は、本日午前檢事局に召喚されたるが、氏も或は收監さるるやも知れず。」と。

靜子は、立ちながら讀んで居たが、號外を手にしたまま、足がふらふらして、疊の上にへたばつてしまつた。その時に、洋一と留美子とが、馳け込んで來て「母ちやん！　母ちやん！」と云つて彼女に縋り付かなかつたならば、彼女は失心したかも知れなかつた。

留美子を抱き上げた手が、ガタガタ顫へるのを何うすることも出來なかつた。

「母ちゃん、お顔が眞蒼だよ。」

洋一の頑是ない眼にも、蠟のやうに白い靜子の顔は、異常に映らずには居なかつた。

靜子は、留美子に乳を吸はせながら、波濤のやうに躍る胸を、ぢつと抑へやうと試みた。

彼女は思つた。夫に限つて、收賄と云つたやうな卑しい事をする譯は決してない。檢事局に呼ばれたのだつて、屹度誰かの證人として呼ばれたのだ。自分は、夫を信賴して安心して居ればいいのだと。が、さう思ふ心の裡に此頃の夫の變つた樣子が、浮んで來た。夫の何かしら、心配さうな態度が、浮んで來る。さうすると、彼女は氣が氣でなくなる。彼女は到頭、堪らなくなつて書生の小川を呼んだ。

「あのねえ。お役所へ電話をかけて下さい。そして、篠原の宅だと云つて、旦那さんを呼び出して下さい。」

靜子は一刻も早く俊輔の口から安心させて貰ひたかつた。

電話はなかなか通じないらしかつた。日頃は物靜かな靜子でさへ、いらいらしてしまつた。

「まだ通じないの、お前番號を間違へはしないねえ。本局の××番だよ。」靜子は、別室で電話を

かけて居る小川を促した。十分位して、電話は通じた。が、答は靜子をもつと、失望させた。

「あの旦那樣は、御用でお出かけで御座いますつて。」

何も知らない小川は、冷かに云つた。新聞の記事の通り檢事局へ行つて居るのだと思ふと、靜子は裂かれた胸を更にひつ掻き廻されたやうに思つた。新聞の記事の通り此のまま收監されたら、何うせう。さう思ふと、靜子は居ても立つても居られなかつた。東片町の父の許へ馳け付けて相談しようかと思つた。が、夫に訊かないで、さうした事をするのが、あまりに夫を信じないことになるのを考へると、靜子は苦しさもどかしさを堪へて、夫の歸りを待つより外はなかつた。五時になつても、夫は歸つて來なかつた。が、もう役所へ電話をかけさせる勇氣はなかつた。恐ろしい運命の宣告を待つやうに、靜子は夫の歸りを待つより外はなかつた。晝飯は、咽喉を通らなかつた。心の苦しみが增すと共に、お腹の底まで、妙に重苦るしく痛んだ。頭の中が、走馬燈か何かのやうに、くるくる廻つた。

俊輔が歸つたのは、八時を廻つて居た。玄關に俥の音がすると、靜子は蘇つたやうに、飛び出して行つた。

伸から降りた俊輔は、珍らしく酒氣を帶びて居た。結婚して以來、俊輔が酒を飲んだことは非常に稀だつた。酒氣を帶びて居る夫の姿を見ると、靜子は心が暗くなつた。夫の顏を正視することが出來なかつた。

俊輔も、妻の顏を見るのを避けるやうに、二階の居間へ上つた。が、靜子は夫の跡を追はずには居られなかつた。

二階へ上つて見ると、俊輔は椅子に腰をかけたまま、卓子の上へ顏を伏せて居た。靜子は、夫に向つて腰を降したが、暫くは何とも云ふことが出來なかつた。

五分間。不快な沈默が續いた。

「洋一や留美子は寢たかい？」

俊輔は、顏を伏せながら訊いた。

「洋一は、父ちやまが、お歸りになつてから、御飯を戴くと云つて、聞きませんでしたけれども、やつと賺して御飯を喰べさすと、直ぐ寢てしまひました。」

さう答へて居る靜子の言葉は、何となくぎこちなかつた。そして、最後の言葉を云つた時、靜子

は急に悲しくなつて、わあつ！と泣き出してしまつた。

「何が悲しいのだ！　何が！」

俊輔は、駭いて顏を上げながら叫んだ。

「妾、號外を讀んだのです。そして、お歸りをどんなに待つたか知れませんのに。こんなに遲く、しかもお酒を召し上つて、お歸りになるのですもの。」

さう云ひながら、靜子はすすり泣きを續けた。俊輔は額に手を置きながら、暫くは默つて居た。その額に、恐ろしい苦悶が刻まれた。

「靜子ゆるして呉れ。俺が惡かつた。」

「惡いと仰有つて、何が惡いと仰有るのです。まさか貴君が、貴君が！」

靜子は、氣が狂ひさうに叫んだ。

「信じて呉れ俺を、一文だつて、筋道の立たない金を取る俺ちやない。その點は、俺を信じて呉れ。」

が、さう云つて居る俊輔の言葉には、何となく力がなかつた。

「信じますとも、信じますとも。」

靜子は興奮して叫んだ。

「今に分るから、凡てが分るから、新聞記事などを信じないで、俺を信じて呉れ！」

俊輔は、さう云ひながら、再び顔を伏せた。靜子は夫の言葉を聽いて安心した。が、夫の元氣のない態度が何うしても不安だつた。

その夜、俊輔は早くから、床に就いた。翌朝起きて見ると、彼は昨夕とは別人のやうに快活だつた。彼は出掛けるとき、妻に云つた。

「何しろ、問題が問題だから、急には片付きはしないからねえ。その中に、いろいろな噂が立つだらうと思ふのだ。が、飽くまでも、俺を信じて居て呉れ。俺が、そんなにうまい金儲けをしたのなら、靜さんなんかにも、もつといい着物でも買つてやつて居る筈ぢやないか。はゝゝゝゝ。」

夫が、快活に笑ひながら出て行くのを見ると、靜子は今まで頭の中に宿つて居た暗雲が、一時に吹き拂はれたやうな、晴々とした氣持になつた。

が、その日の夕方彼女が、玄關に佇んで、夫を待つて居ると、其處へ夕刊が配達された。靜子は

オヅオヅ社會部面を擴げて見た。そこには、恐ろしい文字が、彼女を待つて居た。それは「檢事東京府廳へ出張す」と云ふ標題であつた。そして、檢事局の河井檢事が、東京府廳へ出張して、種々の帳簿を檢閲したと云ふ記事だつた。

それが、夫の身の上に、どんな關係があるのかと思ふと、靜子はまた黑い雲のやうな心配が心の裡に、一面に立ち籠めて來るのだつた。

夫は、その日は五時を廻ると直ぐ歸つて來た。酒氣は帶びて居なかつた。が、血色は可なり惡かつた。

夫婦と洋一と留美子とは、一緒に食卓に着いた。が、平素ものやうな談笑は、少しも湧かなかつた。お通夜の時のやうな冷めたい空氣が、食卓の上を閉して居た。頑是のない留美子までが、何の原因もないのに、メソメソ泣き止まなかつた。

俊輔は、苦り切つて箸を運んだ。靜子も默つて、夫や子供の御飯を裝ひながら、その間に自分でも箸を動かしたが、御飯が砂を嚙むやうに味がなかつた。

が、五つになる洋一丈は、父や母の氣持とは、全く懸け放れて、自由に喋べつた。

「ねえ、お母さん。今日山内のお池にねえ、鮑が、澤山浮んで居ましたよ。坊や、一疋捕まへて歸らうかと思つたのよ。あの鮑、捕まへて來てもいゝ。」

靜子は默つて返事をしなかつた。

「いいの。捕へて來ても。」洋一は執拗に訊いた。

「いいえ。いけません。外樣のものは何一つだつて、取つて來てはいけません。」

靜子の言葉は、何時になく嚴しく響いた。俊輔は、その言葉を聽くと、一寸眉を動かした。靜子は、夫が默つた居るのが、何となく氣になつた。今までは、何事も打ち開けて居た夫が、今度の事件以來、秘密主義を執るのが、不滿で仕方がなかつた。

もつと、事件の內容を精しく話して呉れ。夫がどんな點で關係して居るかを話して呉れれば、どんなに安心するか分らないと思つた。靜子は、自分から訊いても、夫にとつていろいろなことを話して貰らひたいと思つた。

「今日夕刊で讀みましたが、檢事局からお役所の方へ行つたと云ふのは、本當で御座いますか。」

夫の顏に、不快な表情が、歷々と浮んだ。が、一生懸命な靜子は、それに氣にしなかつた。

「本當で御座いますか。」

「本當だ！」

俊輔は吐き出すやうに云つた。俊輔が、靜子に對して、こんな荒々しい口調を用ひたのは、今夜が初めてであつた。

「檢事局の河井檢事と云つて、あの河井さんぢや御座いませんの。」

靜子は、そのとき自分の頭に、河井龍太郎が裁判官になつて居る事が、ちらりと浮んだので、それを何氣なく口に出してしまつた。

俊輔の顏が、土のやうに蒼くなつた。彼は茶碗と箸とを音をさせながら、卓の上に置いた。

「馬鹿！　そんなことが、お前に何の用があるのだ！」

俊輔は、結婚して以來、初て靜子を叱り付けた。そして、燃ゆるやうな凄い眼を、靜子に投げ付けた。

が、夫の燃ゆるやうな眼よりも、東京府廳へ出張した檢事が、河井龍太郎であることを確めた

靜子の身體には、恐ろしさのために、冷めたい身顫ひが、續けさまに起つた。彼女は、龍太郎の呪ひの言葉を思ひ出すと、目が眩みさうになつた。

慈悲心鳥後篇

良人と罪

その一（告白）

東京府市に跨る大疑獄は、一抹の黒雲が、段々廣がつて、遂には晴れた蒼空を掩うてしまふやうに、際限もなく廣がつた。昨日は市參事員の某氏が、收監された。今日は市の土木課長の某氏が收監されるだらうと云つたやうな噂が、毎日のやうに新聞の三面を賑はした。

廣がつて行く黒雨の中でも、その最も大きな塊が、靜子の家を閉して居た。それは暗鬱な、人の心を腐らせてしまふやうな黒雲だつた。靜子はその黒雲の裡に、目に見えぬ稲妻がきらめき、耳に聞えぬ雷が、轟いて居るやうな怖しさを感じた。

俊輔は、毎日のやうに府廳に出勤した。が、健康そのものであつたやうな、若々しい頰の色は、何となく褪せ、別人のやうに寡言になつてしまつた。洋一や留美子に對してさへ、以前のやうな快活なお父様ではなかつた。

晩餐の卓にも、以前のやうな華やかさはなかつた。洋一や留美子が、どんなに可愛い口を利いたり、どんなに可愛い行動をしても、俊輔の顏には、もう以前のやうな快活な哄笑は、浮んで來なかつた。

さうした日が、一週間近く續いた後だつた。俊輔はある晩、歸つて來て食事を濟せると、身體がだるいから直ぐ床を取つて呉れと云ひ出した。

「お氣分が惡いのですか。」と、靜子が訊くと俊輔は、その男らしい眉をひそめながら、

「なに、氣分が惡いと云ふほどではないが、今朝から手や足がだるくつて、仕様がないんだ。」と云つた。

「ぢや、お醫者を呼びませうか。」

「なにそれには及ばない。」

さう云つたまゝ、俊輔は靜子が自分で、どつた寢床に横はつたが、寢苦しさうに、床の中で身體を動かして居た。

靜子は、枕元に動かないで、永い間坐つて居た。

三十分間もしてから、俊輔は思ひ出したやうに云つた。

「家に檢溫器があつたかね。いつか洋一が、壞したまえになつて居やしないかい。」

「いいえ直ぐ買つて來ました。持つて參りませうか。」

「うむ！　何うも少し熱がありさうだ。」

靜子は、自分の居間へ行つて、簞笥の抽斗しに入れて置いた檢溫器を持つて歸つて來た。

俊輔は、それを受取つて、自分の脇の下へ入れた。しばらくの間、夫婦の心の裡に、不安な期待があつた。

「洋一は寢たかい？」

俊輔は、やや熱にうるんだ眸で、靜子の顏を見上げ乍ら云つた。

「ええ、もうとつくに。」

「さうか、靜子、おれはお前に一寸話しがあるのだがね……」

さう云ひながら、俊輔は檢溫器を取出して見た。その水銀柱は、八度五分を指して居た。

「うむ！　少しあるな。」

さう云つた俊輔の言葉は何となく心細く聞えた。靜子は、夫の手から檢溫器を受取つて、自分でもそのほのかな水銀の線を透し　見た。

「恁麼に熱があるのなら、直ぐお醫者を呼びませうか。」

「まあいい！　明日の朝まで、待つて見よう。もう遲いから。」

靜子は、夫に八度五分の熱があると云ふのも氣がかりだつたが、それよりも一寸話があると云ふ方が、もつと氣がかりだつた。

「貴方、お話があると云ふのは、何で御座いますか。」

靜子は、異常に緊張しながら訊いた。俊輔の顏が、急に蒼ざめたことが、電燈の灯影の裡でも分つた。心の裡に、苦悶があることが、その二つの眸の裡にも現はれた。

二三分、胸苦しい沈默が、二人の間に續いた。俊輔はやつと決心したやうに、その重い口を開いた。

「靜子！　靜子！　俺はお前に話さなければならないことがあるのだ。」

彼は、其處で一旦言葉を切つて、靜子の顏をぢつと見詰めた。熱を持つた眼が、爛々と輝やいた。

「俺は、お前に告白しなければならないことがあるのだ。俺はお前に信じて呉れと云つたね。一文だつて筋道の違つた金を取つたことはないと云つたね、だが……」

「だが……」と、云つて言葉を切られると、靜子は一時に、背中に冷水を浴びるやうな惡寒を感じた。

「ねえ！　靜子！」

俊輔は非を喰つたやうな苦い顏をしながら、しばらくの間考へた。

「ねえ！　靜子！　俺は邪しい金などは、一文だつて取つて居ないのだ。だが、止むを得ない義理でね……」

さう云つて、俊輔は苦しさうな息を吐いた。靜子は、もう夫が話し終けるのを待つては居られな

かつた。

「何うしたと仰つしやるのです。何うしたと仰つしやるのです。」

彼女は狂喜のやうに叫んだ。

俊輔は喘ぐやうに云つた。

「止むを得ない義理でね、俺は……俺は……靜子！　許して呉れ、俺は……俺は……」

靜子の眼から、涙がはら〳〵と滾れた。

「ぢや、貴君も今度の疑獄に、御關係があるのですか。本當ですか、本當にあるのですか。」

靜子は、狂亂して叫んだ。

俊輔の顏は土のやうに蒼ざめた。だが、言葉丈は、落着いて居た。

「だが、俺は破廉恥のことをしたと思つて呉れては困るよ。俺は一文だつて邪しい金を取つたのではないぞ。だが。俺は近藤さんに賴まれてね。××會社から出た一萬圓の小切手を知事の川上さんに、渡さうとしたことがあるのだ。」

俊輔は、さう云つたまま眼を閉ぢた。

「まあそれが！　そんなことはなんでもないぢやありませんか。」

靜子は、子供のやうに安心して云つた。

俊輔は、苦笑ひをした。

「それがなんでもない事ぢやないんだ。そのために、俺は今まで築き上げた自分の位置を滅茶苦茶にしてしまつたのだ！　いや、滅茶苦茶にする丈ならいいが、時と場合に依ると、監獄へ行かなければならないのだ。」

「えい！　監獄！」靜子の顏の色が、サツと蒼白に變じた。彼女の唇が、ブルブル顫へた。

「まあそんなことで、監獄へ行く。お金の手渡しをした位で監獄へ行かなければいけないのですか。」

「いけない。それが、もう立派な犯罪なのだ。贈賄罪と云つてね。もうその手傳ひをした丈でも立派な罪なのだ。」

靜子は、わーッと泣き崩れた。

「まあ！　貴君は、どうしてそんなことをして下さるのです。貴君が、そんなことをなさつて、洋

一や美子や妾を何うなさるのです。貴君が監獄へ行らつしやる！　ああ苦しい、苦しい。妾は胸が、胸が！」

さう云ひながら、靜子は兩手で胸を抱きながら、悶え苦しんだ。お腹の底が、かきむしられるやうに苦しかつた。

俊輔は、愛する靜子の苦しみを見るに堪へないやうにぢつと眼を閉ぢて居た。が、彼の心の裡にも、一疋の蝮が居て、その心を散々に喰ひさいて居ることが、額に寄つて居る一條の皺に依つて、ありありと分つた。

十分位、夫婦の間に、默々たる苦しみが續いて後に、夫はやつと口を開いた。

「靜子！　お前の苦しいのは察しる。が、俺の方がお前より、何倍苦しいか察してくれ！」

俊輔の聲は、腸を吐くやうであつた。

靜子は、よよと又一しきり泣いた。

「でも、貴君は、何うしてそんなことをして下さつたのです。何うして、そんな恐ろしいことをして下さつたのです。」

「近藤さんに賴まれたからなのだ。近藤さんは、國政會の代議士だらう。お前のお父さんの乾兒とまで云ふ人だらう。つひ、何氣なく賴まれたので、斷り切ることが出來なかつたのだ。こんなことになると知つたら、死んだつて賴まれるのぢやなかつたのだが、自分で邪しい金を受取るのではないし、また自分で邪して金を贈るのでもないし、ただ仲介をする丈だと思つたので、つひ引き受けてしまつたのだ。どうぞ、俺をゆるしてくれ！」

俊輔は、――あの男性的に强かつた靜子の夫は、鬪ひに負けた鷄のやうに、頭を下げて、靜子の許しを求めた。それを見ると、靜子の眼からは、涙がはらはらと止め度なく流れた。殊に、夫がさうした事を賴まれる氣になつたのも、自分の父に對する義理も、交じつて居たのかと思ふと、靜子は夫を責めたのを後悔ずには居られなかつた。彼女は迸る涙を拭ひ拭ひ云つた。

「許して呉れなんて、妾こそ何うぞ、許し　下さい。貴方のなさつたことを決して、お恨みには思ひません。よく分りました。本當によく分りました。妾は、もう決して何とも思ひません。決して何とも思ひません。でも、貴方が仲介をなさつたと云ふことが、もう知れて居るのですか。」

俊輔は、かすかに閉ぢた眼を刮いた。

「いや、今までは知れて居なかつたのだ。だが、今日近藤さんが、檢事局へ召喚されたまま歸宅を許されずに收監されたのだ。近藤さんが收監されて見ると、俺のやつたことが分るのも、ただ時間の問題丈だと云ふ氣がするのだ。」

「まあ！」

靜子の聲は、絶望に似た聲だつた。

「俺が收監されたら、お前は何うする！」

俊輔は、ぢいーつと靜子の顏を見詰めた。

「洋一と留美子とを育てながらお歸りを待つて居ます。」

さう答へてしまふと、靜子は急に、胸が迫つて來て、われにも非ず、わあつと泣き伏さずには居られなかつた。

「だが、嫌疑丈ならいいが、俺が本當の罪人になつて、監獄へ行くことになつたら何うする！　監獄へ行くことになつても、お前は俺の歸るのを待つて居て呉れるか。」

靜子は、何かしら答へようと思つたが、胸が苦しくなるばかりで、言葉は一つも、口に上つて來なかつた。

「俺が監獄へ行つても、社會的の位置を失つても、一生浮ぶ瀬のないやうな身の上になつても、お前の俺に對する愛は變らないか。」

靜子は、聲高くよゝと泣きながら、

「まあ！　そんなことを仰しやつては、妾は却つてお恨みに思ひます。貴君にどんなことがあらうとも、妾の愛が變るなんて、そんなことを仰しやる丈でも、妾はお恨みに思ひます。」

靜子の眞心が、俊輔にどれほど嬉しかつたであらう。

俊輔は、滿足らしく肯きながら、

「お前はそれを誓つて呉れるか？」

「誓ひますとも、誓ひますとも。」

靜子は、身を顫はしながら云つて、夫の胸に涙に濡れしめつた顏を托しながら、何時までも何時までも、泣き續けて居た。

夫が、苦しさうに、幾度も寢返りを打つた後、やつと眠りに入つたのを見て、靜子は次ぎの間に

寢かせ付けてあつた洋一と留美子との眞中には入つて、横になつた。

が、夫の告が何と云ふ怖しい激動を、彼女の胸に與へたことだらう。警察へ拘引されたり、監獄へ行つたりする人々のことを、靜子は今まで自分とは全く人種の違つた人達のことだと思つて居た。彼女は、監獄とか拘引とか云ふ言葉を耳にした丈でも、あの氣味のわるさを感ぜずには居られなかつた。それだのに、自分の夫が何時拘引され、あの醜い恐しい恥しい柿色の着物を着て、監獄へ繋がれるかも知れないと思ふと、靜子がその夜一睡も出來ないのも、無理ではなかつた。心が掻きむしられるやうに痛み、涙が絶え間なく流れて冷たく頰を傳はつた。

何時まで待つても、眠は來なかつた。床に就いたのは十二時を廻つて居たが、二時になつても三時になつても睡眠は萠さなかつた。意識は冴えに冴え、感情は濤ぶり、しかも心の底は抉ぐられるやうに傷んだ。次ぎの間に寢て居る夫も、熱のために、寢苦しさうであつた。

父母の心の苦痛をも知らずに、スヤスヤと母の左右に安らかないびきを立てて眠つて居る洋一と留美子との寢顏を見ることさへ、靜子に取つては一つの苦しみだつた。父親が、罪人として獄屋へ繋がれることが、子供達にどんな怖しい影響を及ぼすであらうなどと云ふことを考へると、靜子は

ぢつと横になつて居るのに堪へられないやうな心持がするのであつた。

父が入獄して居る間に、洋一が五つも六つもになつて、「お父ちやんは何處に居る？」と、訊いたとき何と答へたらいいだらう。いな、さう訊かれることさへ腸を割かれるやうな苦しみに違ひない。そんなことを考へて居ると、靜子は、自分の身體がこのまま、奈落の底へ陷ちた方が、まだいいやうな心持がした。

それでも、夫の病狀が氣になるので、靜子は夜中二三度、夫の寢床に近づいた。そして、そつと夫の額に手を當てて、熱を計つた。夫の心がどんなに惱んで居るかは、その苦しさうな寢顏にさへ現はれて居るやうに思つた。

丁度、三度目に、それは明方近かつただらう、靜子がそつと夫の額に手を當てたとき、俊輔はふと目を覺した。

夫を思ふ妻の心と、妻を愛する夫の心とが、その薄暗の中でも、互の心にピツタリと感ぜられた

「靜子！」

俊輔の聲には、無量の思ひが含まれて居た。

「はい！」

靜子の答にも、同じやうな思ひが、含まれて居た。

「許して呉れる！」

俊輔は、暗の中で、かすかに云つて、そして靜子が出して居た手をしつかりと握りしめた。

靜子は何とも返事することが、出來なかつた。涙がグッとこみ上げて來て、口を閉してしまつたからである。

曉の光が、雨戸の隙間から、ほのかに這入つて來る頃になつて、靜子は遂に、とろとろとまどろんだ。が、夢に彼女を待つて居るものは、平和でなくて、恐しい惡夢だつた。

彼女は、磽确たる山道を、一生懸命に走つて居た。何か恐しい物に追はれて居るので、一生懸命に逃げなければならないと云つた氣持だつた。

走つて居る裡に、何だか自分の兩手が重いやうなので、氣が付いて見ると、右の手には洋一が縋り付いて居た。三越で、此間買つたばかりの洋服を着て居たが、何故だか靴を穿いて居ない。素足

に少し血がにぢんで居る。可哀さうだと思つたが、手當をしてやつて居ると、捕まりさうなので、手當をしてやる暇がない。靜子は、そんなことを考へながら走つて居る。左の手を見ると、縋り付いて居るのは留美子だ。此間中から、剃つてやらうと思つた眉が、そのままになつて居る。着物は不斷着のメリンスを着て居る。眞赤な牡丹のついたメリンス友禪である。外へ連れ出すのなら、どうして洋一のやうに洋服を着せなかつたかと思ふ。和服なら、此間かつた錦紗縮緬を着せて來ればよかつたと思ふ。そんなことを思ひながら、靜子は走つて居る。ふと氣が付くと、自分があまり早く走るので、留美子も洋一も、足が地に付かないで、宙に飛ぶやうになつて、附いて來て居る。

走つて居るものは、靜子達ばかりではない。男も居れば女も居る。夫が居ないことはない。さう思つて靜子は周圍を見廻した。が、どんな顏も、一度見たことがあるやうで、而も思ひ出せなかつた。夫は、直ぐ傍に居るやうな氣がするが、何うしても姿が見えない。靜子は心細くなつて泣き出しさうな氣になつた。

「何うでせう。篠原は？」

靜子は、ふと誰かゞ自分の夫の名を呼んで居るのを聽いた。駭いて振返つて見ると、自分の一間

位右を、背廣を着た、若い官吏らしい男が、二人並んで走つて居る。

「もう！　殺らゝて居る頃ですよ。あの男も可なり罪が深いですからね。」

髯を生やして居る男がさう答へた。

靜子は、それを聽いてハツと胸が潰れるやうに思つた。彼女は、夫の安否を氣遣はれて、走りながら、後を振返つて見た。すると、あの物凄い光景が、彼女の目に這入つて來た。それは、一生懸命に走つて居る彼女達の後から、一群の怪物が、手に手に青龍刀のやうな刀を持ちながら、追ひかけて來て居る。そして、誰かに向ひ付くと直ぐ一打ちにパサリと打ち倒してしまふ。そして、死骸を、彼等が曳いて居る車の上に、載せて居る。

「地獄なのだ！　茲は。そして夫もあのやうにして、殺されたのだ。」と思ふと、恐しい悲しみで、胸が一杯になり、兩方の足が竦んでしまつた。逃げて行く人達は、直ぐ彼女を通り過ぎてしまふ。そして、一團の怪物が直ぐ彼女に迫つた。彼女は、兩手に洋一と留美子とを抱へたまゝ岩ばかりの地上に蹲まつた。怪物は、恐しい蹄の音をさせながら、觀念の眼を閉ぢて居る靜子に近づいた。一疋が靜子の前に止まつた。眼を閉ぢて居ても、青龍刀のやうな刀を振り上げて居るのを感じた。そ

の刹那、彼女はふと目を刮いた。そして、何氣なく、その怪物の顏を見た。見ると、その怪物の顏は、角こそ生えて居るが、正しく河井龍太郎の顏である。

「河井さん！」

彼女は駭いて大聲を出した。そして、自分の聲で目が醒めた。留美子が、目を覺して乳を求めて泣いて居たのである。

眼が醒めたものの、彼女の烈しい動悸は容易に靜まらなかつた。夢で見た河井龍太郎の顏が、何時までも、眼先にちらついた。

その二（襲ひ來る者）

起きて見ると、靜子の心の苦しみとは、全く何の關係もない天地は、十一月半の快く晴れた朝だつた。空は、日の光を含んで、ほのじろく一杯に晴れて居た。微風が、そよそよと吹いて居た增上寺の森では、頻りに百舌鳥が鳴きしきつて居た。

洋一と留美子とは、朝起きて御飯を濟ませると。日の暖かくさして居る緣側で、嬉々として跳ね

廻つて居たが、病臥して居る父の神經を援しはしないかと思つたので、靜子は、

「洋ちやんと、留美ちやんは、山内へ行つて遊んで來ない？」と、云つて女中を附けて出してやつた。

俊輔の熱も殆ど、冷めて居た。檢溫器を入れて見ると、一七度を二三分超えて居るのに過ぎなかつた。

「お醫者を呼びませうか。」

靜子は。洋一と留美子に喰べさせるオートミールを、その朝は夫にも、勸めながら訊いた。夫の顏は、一夜の中に、目立つて憔悴したやうに見えた。まばらに生えて居る髭までが、物淋しさうだつた。

「さうだね。熱も。殆ど取れたやうだが、兎に角診て貰はうかね。」

俊輔は、物憂げに云つた。

靜子は、直ぐかかり付の醫者に電話をかけた。十時頃に來ると云ふ返事だつた。

夫の病床を、南向きの明るい八疊の間に移した。其處からは、朗かに晴れた秋の空が見え、その中に紺碧にそそり立つて居る增上寺の杉林の上を、何のこだはりもないやうに悠々と飛び廻つて居る一羽の　の姿も見えた。

俊輔は、時々輕微な頭痛を訴へた。が、その外は床の中へ、新聞や雜誌を、持つて來させて讀んで居た。

醫者が來る筈の、十時が段々近づいた。靜子は、お醫者の來るのが。心待ちに待たれた。十時少し前だつたらう。門前に、りりんと云ふけたたましい俥の音がして、玄關に取付けてある呼鈴の音がした。

靜子は、夫の病床を離れて、女中部屋へ行き、

「お醫者がいらつしたから。」

と云つた。靜子の聲を聽いた女中は、忙しく、玄關へ馳けて行つた。

が、お醫者を案内して來る代りに、女中は一葉の名刺を手にしながら、歸つて來た。靜子は、怪しみながら、その名刺を見た。

靜子は、この名刺を一瞥したとき、身體の血が氷るやうな氣がした。が、彼女は病床に居る夫に此の名刺を手渡すことに堪へなかつた。彼女は、その名刺を手にしながら、男々しくも、玄關の方へ歩んで行つた。そして、かすかに顫へようとする足を踏みしめて玄關へ現はれた。

その刹那に、彼女はあまりの、恐しさに聲を揚げて、卒倒するところであつた。いかんとなれば彼女の面前に、角こそ生えて居ず青龍刀こそ、持つて居ないが、今曉夢に見たばかりの河井龍太郎が、屹然として立つて居たからである。

彼女の全身は、ブルブル顫へた。夢で見た怪物に對する恐怖の十倍もの怖しさが、彼女の全身を包んだ。彼女が、倒れてしまはなかつたのは、今こそ夫の一大事であると覺悟した妻としての勇氣の爲である。彼女は、顏色を蒼白に變へながらも、それでも絶えて久しき龍太郎の顏を見た。昔から蒼味を帶びて居た顏は、透き通るやうに蒼白くなつて、一種凄壯な色を帶びて居た。眸は、鋼鐵のやうに澄み、鼻は削つたやうに、高くなつて居た。靜子は一目見たときに、恐怖と威嚴と嫌惡とを同時に感じた。

瀟洒なモーニングを着て居る龍太郎は、あれほど思ひ詰めて居た靜子の顏を、宛も見知らぬ他人

の如く冷然と見た丈で、屹立したまま、輕く頭を下げた丈で、一言も口を開かなかつた。龍太郎の傍に立つて居る名刺の主らしい警部が口を開いた。

「あの、僕が芝警察署の進藤警部です。只今、檢事局から河井檢事が、お宅の家宅搜索にいらつしやいましたから、直ぐお通し下さい！」

家宅搜索！　そんな言葉丈で、靜子はカッとなつてしまつた。蒼くなつて居た顏が興奮のために眞紅になつた。

彼女は、それでも出來る丈は、防いで見ようと思つた。

「實は只今主人は病氣で、寢て居るので御座いますが。」

警部は、靜子の無智をあはれむやうな口調で云つた。

「そんなことは、家宅搜索と云ふことと何の關係もありません。直ぐお通しにならないと、却つてお爲に惡いです。」

靜子は、この上云ひ爭ふ術を知らなかつた。彼女は、敵に城を明け渡すやうな悲痛な氣持で云つた。

「それでは、何うぞお通り下さい。」

龍太郎を先登に、もう一人背廣を着た書記らしい男が續いて、三人は、ドヤドヤと洋館へ通つた

靜子は、口惜し涙がこみ上げて來るのを。ぢつと嚙みしめた。

「御主人の書齋は孰ちらです。」

警部は、居所の羊のやうに、皆を案内して居る靜子に訊いた。

「此方で御座います。」

さう云つて、靜子は夫の書齋へと、三人を案内した。

龍太郎は、冷然たる態度で、俊輔の書齋へ這入つて行つた。そして、書齋の内部を、一通り見廻した。書齋は狹い西洋室であつた。壁に寄せて、大きい書棚が二つ置いてあり、中央に桃花心木の卓が置いてあり、それに向つて皮張りの椅子があつた。

室内を見廻した眼が、その正面壁にかけてある靜子の父の駒井氏の小さい肖像に向つたときは、遉に一寸眸を外したが直ぐ冷靜の態度に歸つた。

「奥さま、御迷惑でも立ち合つて居て下さい！」

警部は、苦しんで居る靜子を更に苦しませるために云つた。

何と云ふ恥ぢ、何と云ふ侮辱であらうと、靜子の胸は煮えくり返るやうだつた。殊に、彼女は龍太郎を恨まずには居られなかつた。假令、自分が現在の夫を選んだためどんなに自分達を呪つて居たにしろ、自分達の窮境に付け込んで、かうまで自分達を苦しめなくても、いいではないかと思つた。昔は、自分の父の家にも、出入して多少の世話を受けて居ながら、かうまで恐しい恥をかかせるとは、何と云ふ無慈悲な冷酷な男であらうかと思つた。さう考へて來ると、靜子は龍太郎に對し烈しい嫌惡を感ぜずには居られなかつた。

靜子が、龍太郎を恨んで居るのを知るや知らずや、龍太郎は、科學者が標本を取扱ふやうに冷然と落着き返つて居るのだつた。彼は、警部に命じて、卓の抽斗しを明けさせた。そして、其處にある書類らしいものを悉く机の上へ取り出して、そしてその頁を、いちはやく眼を通した。そして最後に俊輔の日記丈を、傍の書記らしい男に手渡した。

それを見ると、靜子はカッとなつてしまつた。

「それを、何う遊ばすのです。」

靜子の聲は、低いけれども、針のやうに鋭かつた。

「當分の裡、お預りするのです。」

龍太郎は、靜子の方を振向いても見ないで、冷然と答へた。

「まあ！　お預りなさるつて、それにはどんな家庭の秘密が書いてあるかも分りません。そんなものを、見られると云ふことは、妾達一家の恥です。そんなことまで、なさる權利がお在りになるのでせうか。」

靜子は、もう必死になつて居た。牡虎を射殺された牝虎が、復讐のために、獵夫に飛びかかるやうに必死だつた。彼女は、自分自身を忘れて居た。ただ、一身に夫を思つて云た。

「大變お氣の毒です。だが、私にはその權利があるのです。」

龍太郎は、振返つてその冷い眼鏡越に靜子を一瞥しながら、靜かな落着いた聲で云つた。

靜子は負けては居なかつた。

「犯罪人に對しては、そんな權利があるかも知れませんが、まだ罪があるともないとも分つて居ない一個の紳士に對し、しかも國家の官吏に對し、そんな……そんな。」

靜子は、平素の彼女とは別人のやうに興奮して居た。

龍太郎は、彼女の烈しい見幕を尻目にかけながら、冷やかに微笑した。

「大變お氣の毒に思つて居ます。が、私は私の職務をやつて居るのです。それに就いて、貴女と議論しても仕方がありません。それよりも、私が此日記をお預りするのが無理かどうか、篠原君に訊いて見て下さいませんか！」

龍太郎の口には、剃刀のやうに鋭い皮肉があつた。その皮肉は、傷ついて居る靜子の胸を、更に底深く抉つた。靜子は激昂のために、倒れさうになつたが、危く背後の扉で、身を支へた。

龍太郎は、以前よりも、もつと落着いて俊輔の手文庫を開けた。そして、其の中に這入つて居る手紙の差出人を、一々點檢した後、その二三通を別にした。靜子はそれを見て居ると、夫が龍太郎のために、散々に打ちたたかれて居るやうな心がして、ぢつと見て、ることに堪へなかつた。

書齋にある書類らしい書類に、一通り眼を通すと、何か警部に囁いた。警部は直ぐ靜子の方を見て訊いた。

「御主人が御使用になつて居る簞笥とか手簞笥と云つたやうなものは、ありませんでせうか。」

靜子は、この上自分達の城廓である家を、掻き廻はされることに堪へなかつた。が、しかし法律と云ふ偉大なる力に抗することは出來なかつた。

「ありますことはありますが。」

彼女は不承無承に答へた。

「さうですか。それでは、何うぞ其處へ御案内していただきたいのですが。」

「ですけれども、生憎主人がその部屋で寢て居るので御座いますが。」

「いや、それは別に差支はありません。」

が、靜子の方では、差支があつた。夫が病臥して居る枕元で、かうした搜索が行はれると云ふことは、夫に對して、どれほどの苦痛であるか分らないと思つた。

「あの、申兼ますが、主人を外の部屋へ移す間、しばらく待つていただくことは、出來ませんでせうか。」

警部は、龍太郎と何か囁き合つた上、靜子に云つた。

「それでは、お待ちしますが、その間に、證據を隱蔽するやうなことがありますと、又事が難しく

なつて來ますから、此點は、豫め御注意して置きますから。」

靜子は、警部の注意にさへ、心を憤らせながら、夫が寢て居る部屋へ歸つて來たが、夫の顏を一目見ると、今まで張り詰めて居た心が、ゆるんでそのまま、わつと泣き伏す外はなかつた。

その三（苦しみの中の光）

女中に口留をしてあつたので、俊輔は何も知つて居なかつた。

靜子が泣き倒れるのを見ると、彼は床の上に半身を起した。

「おい、何うしたのだ！　何うしたのだい！」

靜子は、夫にさう訊かれても、何う話し出していいか分らなかつた。

「醫者が來たのぢやないのか？」

「いいえ。」

靜子は頭を振つた。

「ぢや、誰が來たのだ！」

靜子はやつと、頭を上げた。

「檢事が來たのです。檢事が。」

俊輔の顏は、サツと赤くなつた。

「なに！　檢事が、うむ家宅搜索だな。うむ！」

俊輔は、心の裡に驚きを、一生懸命に堪へながら、靜子を宥めるやうに云つた。

「何も驚くことはない。何も心配することはない。見付けられて、惡いやうな品は一つだつてないから、十分搜索させるがいい。」

「あの、此の部屋の箪笥を檢べたいと云ふのですが。」

「仕方がない。檢べさせてやらう。俺は、その間外へ移つて居よう。」

そして、俊輔は立ち上つた。その時、俊輔は再び靜子に訊いた。

「一體何と云ふ檢事が來た？」

靜子は、河井が來たと云ふことを、何うかして、俊輔に知らせたくなかつた。

「ええ、あの！」

靜子の聲は口籠つた。俊輔の眼が險しく動いた。

「一體誰だい！　おい誰だい！」

「あのう。あのう。」

河井と云ふ言葉が、何うしても、靜子の口から出て來なかつた。

「おい誰だと云ふのに！」

「河井さんです。」

靜子は、やつとのことで、思ひ切つて云つた。

輔輔の顏が、紫色に變つた。

「なに、河井が來た！　河井が、俺の家へ來た。あの河井が、畜生！　河井が！」

俊輔の唇は、怒のために顫へた。

「假令！　自分の番に當つたにしろ、同僚に代つて貰ふ位な事は出來るのだ。俺の弱身に付け込んで復讐しようとする。何處に居る！　彼奴は！」

俊輔は、寢間衣のままで、立ち上つた。靜子は、駭いて取り縋つた。俊輔は、それを力强く振り

解いた。そして、足音荒々しく洋館の方へ歩いた。靜子は、夫の大事とばかり、その後から急いだ。

河井は、洋館の應接室に、警部や書記と一緒に卓を圍みながら、紙卷莨をくゆらして居た。

俊輔は、物をも云はず、其處へ飛び込んで行つた。

俊輔の形相が、あまりに凄じいので、其處に坐つて居た三人とも、思はず立ち上つた。

「河井君！　久し振だね。」

俊輔は、怒りに燃ゆる胸を、ぢつと抑へながら云つたが、聲は顫しく烈へて居た。

「うむ。」

河井は、冷やかに答へて、紙卷莨の灰を、銀の灰皿の上へ落した。

「君は、僕の家に何の用があつて來たのだい！」

「奥さんが、君に取次がなかつたかい。僕は檢事正の命令を受けて、家宅捜索に來たのだ。」

俊輔の眼は、光つた。が、彼は再び自分を制して、落着いた聲を出した。

「うむ！　さうか、だが僕の家の家宅捜索は、君でなければいけないのか。」

「そんなことはないだらう。だが、命令だからね。」

警部も書記も、二人の險しい問答を默つて聽いて居た。

「うむ。命令か。だが、檢事正は、君と僕との關係を知つて命令したのか、君と僕とが曾て親友であり、今は君が僕を仇敵視して居ることを知つて命令したのか。」

「そんなことまでは知らない。檢事正の心は、僕には分らない。」

「檢事正が、二人の關係を知らなければ、君が云つて聽かせるのが本當ぢやないか。君が、僕に復讐をしたければ、いつだつて受けてやる。だが、國家の公職を利用して復讐を計るやうな、そんな卑しいことをやるのはよせ。」

龍太郎は、冷然と嘯いた。

「僕には、人情はないよ。僕には、熱もなければ涙もないのだ。僕は、君も知つて居る通りの事件で、人情は無くしてしまつたのだ。僕は今法律を運用して居る器械だよ。ハ……(笑)器械には心はないのだ。昔の親友だつて、今は仇だつて、同じやうに働きかけるのだ。奥さん！、どうぞ、その算筍の方へ御案内下さい！」

俊輔は、怒のために前後の思慮を失つた。彼は、室外へ歩み去らうとする龍太郎の肩へ手をかけた。

「おい待て！　河井！　貴様はよくも……」

さう云ひながら、彼は強い力で、河井を引きもどした。華奢な河井は、二三歩よろよろと、よろめいた。警部は怒つて俊輔の手を取つた。

「何をするのです。そんな亂暴なことをすると、直ぐ捕縛しますよ。」

俊輔は、警部に取られた手を引き拂つて、再び河井に飛びかからうとした。

龍太郎は、冷然として俊輔の顏を見た。

「君！　さう血迷つちや困るぢやないか。僕に一指でも觸れて見たまへ。立派な犯罪だよ。僕の身體は、國家が守つて居るからな。」

龍太郎は、警部へ俊輔を委したまま、書記を伴つて日本間の方へ歩み去つた。

靜子は、先刻から、應接間の扉のところへ、身を寄せながら、泣き入つて居た。

靜子と俊輔とが、怒と恥とのために、恐ろしい苦痛を味つて居る間に、龍太郎は悠々として、日

本間の方に在る幾つもの箪笥を點檢した。そして、二三枚の手紙を押收すると、書記と警部とを伴つて、歸り仕度にかかつた。

靜子は、憎惡と憤怒とで、胸を爛らせながらも、龍太郎を玄關まで送つて行つた。警部と書記とが龍太郎を離れた瞬間を見計らつて、龍太郎は靜子に言葉をかけた。

「靜子さん！」

靜子はあまりの口惜しさに返事をしなかつた。

「靜子さん！　僕は好き好んでお宅へ伺つたのぢやないのです。ただ、僕としては、――人生に凡この望みを無くした僕としては、ただ器械のやうに働く外には、生きて行く興味がないのです。」

龍太郎は、口早にさう云ひ捨てたまま玄關へ出た。丁度その時であつた。芝公園へ遊びにやつてあつた洋一と留美子とが、女中に手を引かれながら歸つて來た。

この可憐な子供達は、その父母を地獄の鬼として、苦しめ拔いた龍太郎を、父の友達だと思つたのだらう。玄關に立ちながら、靴を穿いて居る龍太郎を見ると、つかつかと進んで來て、丁寧に頭を下げて、可愛らしいお辭儀をした。

鋼鐵の如く冷たい龍太郎の心も、この無邪氣な子供の心には敵しなかつたのだらう。彼が、靴を穿き終へて、俥に乘らうとして靜子の方へ會釋したとき、彼の冷めたく澄んだ眼が、妙にうるんで居たやうに、靜子には感ぜられた。

靜子は、玄關に立つて、去りゆく龍太郎の俥をしばらくの間、見詰めて見た。最初の裡は、烈しい憎惡の外、何もなかつた。が、俥が遠ざかるに從つて、龍太郎の脊せこけた肩が、妙に淋しく感ぜられた。あの人だつて、人間らしい心がある以上、自分達をこんなに苦しめて、それを面白がつて居る譯はない。男としての意地から、止むを得ず。ああしたことをやつて居るのだ。自分達に地獄の苦しみを與へて居ると同時に、あの人も心の裡では、同じやうな苦しみを味つて居る。彼女はふと誰からかつひ此間龍太郎が、まだ獨身であることを聽いたことを思ひ出した。三十を過ぎて、結婚もせず、あんな冷めたい仕事をして居るかと思ふと、靜子は龍太郎が憎めない氣がした。そして、夫の苦しみも龍太郎の苦しみも、みんな自分一人から崩して居るやうに考へられて、靜子は自分の身のはかなさと云つたものが、しみじみと感ぜられた。

「お母さま、銀杏の葉が、こんなに澤山ありますよ。」

洋一が、可なりハツキリした言葉で、ぼんやりして居る母に話しかけた。見ると、玄關の前で、洋一と留美子とが、銀杏落葉を、せつせと拾つて居る。

「おお！　自分にはこんな可愛い子供があつたのだ！」

さう思ふと、靜子の悲しみと憤に荒された心の底にも、ほのぼのとした光明が、再び萠して來るのだつた。

その四（良人の病）

靜子が、玄關口から、洋館の應接室に、引き返すと、俊輔はまだ其處の椅子に、凝然と坐つて居た。顏は充血して赤くなり、熱に潤んだ瞳孔を大きく見開いて居た。

彼女は、溺れる者のやうな足どりで、吸はれるものの如く、夫の膝に身を投げかけた。龍太郎のことも、夫の犯したと云ふ罪のことも、今日の不快な憤どほろしい出來事も、一切が、彼女の頭から消えて行つて、幼兒のやうにわつと泣き崩れた。

俊輔は、呪はしい惡夢から覺めたやうに、醒の裡に、物柔かな色を湛へながら、そつと靜子を抱

き上げた。

「面目ない！」

彼は呟くやうに云つた。

「残念だ。實に残念だ！　人もあらうに河井に、この家を僕と靜さん、の住居を荒されるなんて。」

俊輔は、椅子に身を擦り付けるやうに悶えた。

「何が權利だ！　僕の身體は國家が守つて居るからなど、彼奴は云ひやがつた。それが、彼奴の復讐だと云ふのか。河井の卑劣な行爲を國家も法律も、守つてゐると云ふのか……。お前も、さぞ口惜しいだらうね、俺が。こんな口惜しい目に逢ふのは、自業自得としても、お前には全く濟まないな。お前の心は察しるよ。俺が、犯罪人になるのだつて、お前には残念だらう。その上に、河井からこんな侮辱を受けるなんて。」

俊輔の悲痛な言葉は、何時までも續いた。

靜子は夫の胸に顔を埋めて、泣きじやくつてゐた。先刻河井に對して、興奮した靜子は何處にもなかつた。憤も恨も影を消して、愛丈が残つて居た。夫と洋一と留美子に對する愛が、點火された當初は、小さい灯であつたのが、次第々々に光を増して、皎々と心の闇を照し始めて居た。熱く燃ゆる光を、心の裡に抱いて居るやうな感じだつた。

「愛するお前に、こんな思ひをさせやうとは、夢にも思はなかつた。すまない！　許してくれ。すまない！」

大粒の涙が、俊輔の頰を、ほろほろと流れ落ちて居た。

靜子は、呟しげに面をあげた。彼女の眸にも、涙が一杯浮かんでゐた。

「まあ！　またそんなことを仰しやる！　どんなになつたつて、妾何とも思つて居ませんわ。貴君のためになら、どんな苦勞でも欣んでしまふわ。ただ貴君が、妾を愛して居てさへ下されば……」

再び、がつくりと、靜子は首を夫の胸に落した。病と興奮とに衰へた俊輔には、その柔かなやわらかしした重味さ、が全身に感ぜられて、その重味から靜子の優しい愛が、泌み込んで來るやうに感じた。

すすめ！　すゝめ！　今日もまた

暗い道をただ一人、林の奥の竹藪の
さびしいお家へ歸るのか。

銀杏の落葉を拾ひながら歌ふのか、庭から洋一の危かしい調子の唱歌が聞えて來た。
激昂してゐる俊輔も、自分の愛兒の聲には、耳を澄ますに居られなかつた。

いいえ、皆さん彼處には
父さん母さん待つて居て
たのしいお家があるのです。
そんなら皆さん。チュウ〳〵。

「あんな唱歌、誰が教へたんだね。」
「存じませんわ、しげやで御座いますかしら……。それとも公園で、他家の子から習つたかも知れま

せんわ。」
俊輔は微笑んだ。が、心の裡では雀でさへがたのしんで居る一家の團樂が、今まさに壞されやうとして居ることを考へると、心が搔きむしられるやうに傷んだ。
靜子は、洋一達の姿を見ようとして、窓際に寄つた。俊輔は、卓の上の容器から金口を取らうとして、手を伸したが、ふつと暗い顏をしてその手を引いた。彼は先刻河井達の一行の誰かゞ、その煙草を無遠慮に吸つて居たのを思ひ出したからである。
「河井は、何を持つて行つた。」
「手文庫の手紙を二三本……」
「それだけか。」
「はい。」
靜子は、急に驚きながら云つた。
「あらー　妾、どうかして居ましたわ。……貴君御病氣ぢやありませんか。お寢みにならなければいけません。」

「なあに、病氣なんか。」

俊輔は、氣丈に答へたが、それが療我慢であることは、その顏に現はれて居るいたいたしい憔悴に依つて、分つて居た。

夫の額に、手を當てたとき、靜子は駭いて叫んだ。

「まあ！　火のやうぢや御座いませんか。……ほんとうに、御免遊ばせ、御病氣のことを、スツカリ忘れてしまふなんて。さあ！　參りませう。」

靜子は、右の腕をさし延べた。俊輔は、笑ひながら、それでも妻の手に支へられず、八疊の病床に歸つた。

間もなく醫者が來た。

「御宅へ上る途中、一寸立ち寄つた患者が手間取れて、遲くなりましたものですから。」

こんな挨拶をしてゐた。

靜子は、醫者を夫の病室に案內すると、心配げに病床の枕許に坐つてゐた。

「風邪でも引いたんだらうと思ひます。二三日頭痛がして。」

俊輔の言葉を輕く開いて、醫者は丁寧に診察し始めた。

醫者と共に體溫器を、覗き込んで、靜子は云つた。

「熱が大變高いもので御座いますから。」

それは、三十八度七分まで昇つて居た。

「大變神經が昂奮して居りますやうで。」

醫者は、診察を了ると靜かに口を切つた。

「さうですか。」

俊輔は吐き出すやうに云つた。響ひ、それが自分の病を診る醫者であらうとも、他人が自分の家に入り込んで居ることが、ひどく不愉快だつたのだ。

「此處、私が押へますと、お痛みになりませんか。」

醫者は、右の脇腹を抑へながら、訊いた。さう訊かれると、俊輔は其處に二三日前から、かすかな疼痛を感じて居たのを思ひ出した。が、彼のイライラして居る氣持では、醫者の言葉を肯定するのが、癪だつた。

「別に何ともありません。」

彼は全く反對のことを答へてしまつた。醫者は俊輔の言葉に滿足しないで、稍執念く抑へる手を强めて、俊輔の顏色を窺つてゐた。俊輔は苦り切つてゐた。

靜子は醫師を應接室に導いた。

「いかがで御座いませう。」

醫者は首を傾けた。

「さあ、御主人は風邪だと仰いますが……何かお心當りはありませんか。」

「いいえ。別に。尤も昨晩は少し遲く歸つて參りましたけれど。」

靜子は仕方なしに答へた。

「大變昂奮していらつしやいますね。何か昂奮なさるやうな事があつたのですか。……この頃、暴飲暴食なさるやうなことはありませんか。」

靜子は、俊輔が二三度泥醉して歸つたことを思ひ出した。だが、言葉を濁した。

「いいえ。格別。」

「さうですか。どうも風邪の熱にしては、少し可笑しいやうに思ひます。それに、腸の工合が、どうも可笑しいのです。盲腸炎ぢやないかと思ふのですが。二日位、唯の風邪のやうに熱が出て、頭痛がしてゐて、急に痛み出すことがありますからね。盲腸炎だと注意なさらなければいけませんね。絶對の安靜が、必要です。右の脇腹がいたいと仰れば、直ぐ氷でお冷しになつたがいいでせう。それから、流動物以外は一切召し上つてはいけません。お藥は後で、取りに寄越して下さい。容態が少しでも變れば、直ぐ參りますから。」

醫者は、親切に云つた。玄關口でも、

「決して昂奮されないやうに。……」

と、繰り返して歸つて行つた。

盲腸炎、醫者がさう斷言した言葉には、明かな確信が有るやうに、靜子には覺えた。

靜子が、病室に歸つて見ると、何時の間にか、留美子と洋一とが、可愛い頭を並べてゐた。

落葉を拾ひ蒐めるときは、銀杏落葉の外、凡てを忘れ、唱歌を歌ふときは、父の病も忘れてゐる幼心である。しかし病床と、父の平常に變つて、やつれた姿に接すると、又その不安で一杯に

なる幼心であつた。子供達も、醫者の顏を見覺えてゐる。醫者の姿が、父の病氣を一層痛切に感じさせた。

「醫者は何と云つた！」

俊輔は、光のない眼で、靜子を見ながら、訊いた。

「別に何でも御座いません。……あまり、御心配遊ばしたからですわ。絕對に安靜にしてゐるやうにとの御注意でした。」

靜子は沈着に、夫に答へた。

子供達も、それを聽いてホツとした。

「先刻三人で來た人、パ、さんのお友達？」

洋一は龍太郎のことを訊いてゐるのだつた。靜子は、ハツと思つて口をつぐんだ。

「ねえ。パ、さんのお見舞ひに來たのでせうね。さうでせう。」

洋一は執念く訊いた。

「え、、さうですよ。パ、さんは、直ぐよくなりますからね。彼方へ行つて、しげやと遊んでいらつしやい！」

靜子は夫の顏に、刻みつけられたやうな苦悶を察して、子供を部屋から出した。

俊輔が、急に思ひ出して云つた。

「河井達は、手紙の外何も持つて行かなかつたかい？」

「はい。」

「ぢや、俺の日記はあるか。」

「い、、御座いますと思ひます。」

靜子の聲は顫へた。

「書齋の卓の抽斗にある筈だから、持つて來てくれ。」

「どう遊ばすんです。」

「槐くんだ！」

「でも。」

靜子が、もぢもぢしてゐるのを見ると、俊輔の顏は、サツと蒼ざめた。

「お前薇してゐるな。持つて行つたんだらう。」

「すみません。」

靜子は面を俯せた。俊輔は、荒い苦しげな呼吸をした。靜子は醫者の言葉を欺いて傳へ、日記を持ち去られたことを薇さうとして、俊輔に僞を云ふのが悲しかつた。さうして、いたはらなければならぬやうになつた夫の境遇が悲しかつた。

俊輔は、暫くして云つた。

「さうか。日記を持つて行つたか。いよいよ俺の順番だな。靜子、お前も覺悟してゐてくれ。」

夫の聲は、刻むやうに悲痛だつた。

「妾は、どんなになつたつて、自分のことなぞ、考へて居りません。……だけど、貴君御病氣ぢや御座いませんか。お身體が、何よりも大切で御座いますわ。いくら、御考へ遊ばしたつて、仕方が御座いません。あなたのお身體さへ御丈夫なら。……」

靜子は何物にも崩れない心で云つてゐるのだつたが、涙を制し切れなくつて、夫の顏が見分け難くなつた。

その五（身の病心の病）

果せるかな、醫者の言葉通だつた。

秋半ばらしく、夜に入つて、冷氣が立つ時分だつた。俊輔は、針にさされるやうな、腹痛を訴へた。

靜子は、醫者に電話で病狀を告げ、書生を氷屋に走らせた。昨夜の惡夢が、生々しく思ひ出されて、不安な豫覺が、力を得て來るのだつた。

「矢張り盲腸炎です。氷で冷せる丈、患部を冷さなければなりません。注射をして置きましたから一時痛みは靜まりますが、經過すると又痛み出します。十分手當はしますが、冷して下さい。切開手術をするにしても、一旦治癒してからでないと危險です。なあに、御心配なさらなくとも、盲腸炎は十中八九癒るとしたものです。絶對に動いてはいけません。御主人のは非常に無理をなさつたらしい所があるので心配です。晝も申した通、昂奮していらつしやるのが、非常に惡い結果を及ぼしてゐます。」

電話で、直ぐ馳け付けて來た醫者の言葉を聽くと、靜子の胸には、河井龍太郎に對する怨恨と憎惡とが、湧き返つた。鬼の姿が、陰慘だからと云つて、それに苦しめられる人間が鬼に同化することはない。靜子は倍加された憤りを懷いた。

靜子は、夫の痛みに障るのを怖れて、自分で靜かに病室の雨戸を繰つた。增上寺の杉林が黝んでゐた。戸外の暗闇には自分達の幸福を破壞しやうとする魔が滿ち充ちて、家を圍みながら、怪しい禍の踊を踊つてゐるやうにさへ感じた。

痛の一時去つた夫の休みは、安らかに見えた。鐵瓶の湯のたぎる音と、新しい炭が、火になる音を聞きながら、夫の枕邊の火鉢に、靜子はぢつと身を憩はせてゐた。故もなく、自分の少女時代のことまでが、印象的に心に蘇つて來た。俊輔のこと、龍太郎のこと、俊輔の結婚のこと、結婚生活のことなどが、思ひ浮んで來た。

隣室に寢付かせた留美子と洋一との寢息が、聞えるほど、靜かな夜更だつた。夫の病氣さへ全快したら、今日の凡ては昨夜の夢と同じで、新しい麗日が、輝き渡るやうに思はれた。日を翳らせる者は、龍太郎だとも思つた。

俊輔が、ぱつちり目を刮いた。眩しさうに電燈を仰いでから、靜子に目を注いだ。俯伏して、火鉢に倚つてゐるのを、暫時凝視してゐた。

「靜子、起きてゐてくれるのかい。」

「えゝ。」

靜子は心の苦悶も、病氣の苦痛も消え、安らかな夫の眸の色を讀んだ。

「もう何時だね。」

「十二時を打つたばかりで御座います……お痛みはとれまして？」

「ああ何だか、夢からさめたやうないい心持だ。」

「明日になつたら、きつとスツかりよくなりますわ。」

「洋一や留美子は寢たかい。」

「はい。」

「さうか。俺は心配ないから、お前もお休み。子供が冰しがつてゐるよ。」

夫妻とも暫く無言だつた。深い靜寂に耳を傾けてゐた俊輔が、口を開いた。

「日記を押收されるなんて、俺も馬鹿だね。尤も家宅捜索をやられるかも知れないと思つたが、日記なんかを隱すのが、何だかあさましいやうな氣がしてね。……」

「もうそんなことを。お考へにならない方が、よう御座いますわ。」

「しかし考へると、檢擧が開始された以上、唯時の問題だつたのだ。それを泰然と待つと云ふ覺悟が出來ないでゐたのは淺慕だつたのだ。かう、事が定まると、却つて氣が樂になつたやうな氣がする。が、お前と子供達のことを考へると……」

俊輔はさう云ひさして、酢を飲んだやうに苦い顏をした。

「醫者も御心痛なさるのが、一番惡いと云つてゐました。もうかうなつたら、親子四人で、凡ての運命を快く受けようでは御座いませんか。どうぞ、氣を安らかにお休みなさいませ。」

「うむ。」

俊輔は、滿足らしく肯いた。が、まだ日記のことが氣にかかるやうに云つた。

「日記にはね。——詳しいことは何も書いてないよ。何月何日川上知事に、某用件のことを話す位だがね。だけど、それで十分なのだ。どうせ近藤さんの方から分つて居るのだから。」

夫の顏は、又緊張して來た。

「ただ、あの日記を河井に讀まれるのは堪がたい恥辱だよ。」

俊輔は、一段と聲を落したが、深い意味を含めて續けた。

「河井の惡魔心は、俺の日記を見付けて、どんなに喜んだか分らない。俺を有罪にするには有力な證據だ。だが河井は、河井はそのために、復讐心を滿足させたと思ふかい。」

「妾には分りませんわ、河井さんのお考が、根から間違つてゐるやうには思ひますが。」

「そりや勿論だ。……だが、あの日誌を見て、河井は自分の發つた矢が、飛び返つて自分を刺したやうに苦しんでゐると思ふのだ。」

俊輔は、寂びしい微笑を浮べながら云つた。靜子は、夫の顏を凝視してゐた。俊輔は、强い光を瞳に宿して妻を視入つた。

「靜子！　お前は俺を、永久の勝利者にしてくれるだらうね。」

靜子は夫の言葉を解して、大きく肯いた。

「本當の愛は、如何なる力も、破壞することは出來ない。まして、河井の復讐位が、俺達の愛を何

うしようと云ふのだ。あの日記を見て、俺がどんなにお前を愛してゐるか、またお前が俺をどんなに愛してゐてくれるかを知つて、河井がどう思つてゐるかと思ふと、俺は河井が可哀いさうになるよ。河井は、俺に復讐する心算で、あの日記を奪つて行きながら、却つて自分で苦しんでゐるやうなものだ。しかも、第一頁から不快に思ひながら、しかも職責上、おしまひまで讀まずには居られないのだ。……法廷に出る時だつて、俺達の愛の記錄を、證據物件として、携へるのだと思ふと、俺はあの男がむしろ可哀相になるよ。ハヽヽヽ。」

俊輔は、河井を憫れむやうに笑つた。むろん、その笑ひに何の力も籠つてゐなかつたけれど。

靜子は、夫に近寄つて、檢溫器を手渡し、氷嚢を調べて見た。屢々、取り代へないと、直ぐだぶだぶと、氷の解けた音がして、生溫くなるのだつた。

その夜、靜子は一睡もしなかつた。とろとろとすると、昨夜の氣味惡い凶夢に似たものが、襲ひかかつて來さうだつた。

翌日も、紺碧に晴れた秋日和であることが、病室の電氣の光を奪ふやうに、這入つて來る曉の光で感ぜられた。二晩つづけて、寢足りない靜子の心を、息づかせるやうに、朝の空氣は澄んでゐた。

が、街の騷音が遠近から、聞え初める頃から、俊輔は再び激しい痛苦に呻吟し始めた。朝八時頃醫者が見舞つてくれた。再びモルヒネ注射をして歸つて行つた。

歸るとき醫者は云つた。

「盲腸炎の結果ばかりとは云へない、大變御衰弱です。十分御注意なさらなければ、盲腸を冷しながら、一方心臟の手當をしなければならなくなるかも知れません。」

あの健康な夫が、病勢以上の衰弱と思ふと、靜子は夫いとしさで、胸が一杯だつた。夫が盲腸にまで、河井の呪詛がからみ付いてゐるのかも知れぬと思ふと、何となく空怖しい氣がした。

俊輔の病氣、靜子の悲痛を外にして、大疑獄の取調べが、進捗してゐることは、新聞で知れた。三面の大半を占めてゐる記事で見ると、夫の俊輔などは、靜子にとつては生死の問題であるけれども、疑獄事件全體から云へば、その大舞臺の片隅にゐる微小な豆人形に過ぎないのだと、靜子は思つた。何等私腹を肥すつもりでない、單なる義理でやつた夫を、かうまで苦しめて、黑雲に捲き込む社會と云ふものが、一大魔物のやうな氣がした。世の中全體が、暗い奈落へ急ぐ黑雲で、俊輔や

龍太郎迄が、それに包まれて、何の抵抗も無く、押し流されて行くやうな怖ろしさを感じた。

俊輔は、病床で尙新聞を見たがつた。

靜子は、夫の病室で、火鉢を抱へたまま、物憂げな假寢の夢を結んだ。起きてゐてくれる女中が流し元で、氷を破る音に、その夢も破れがちであつた。

河井が來てから、二日目の朝の新聞だつた。一箇月前までは、夫の施設に浴せた讃辭を喜ぶの外何等直接靜子の生活に關係のない新聞と同じ新聞だつた。しかし、一週間前から夫は醜類！醜類！と呼ばれる人達の[illegible]に入つてゐた。

「府事務官篠原俊輔の官舍を、河井檢事が家宅搜索せる結果有力なる證據物件を發見し、×月頃同人が○○會社の意を受け、川上知事に壹萬圓の小切手を贈賄せんと試みたること判明せり云々」の記事があつた。

「河井檢事の家宅搜索に對し、府事務官篠原俊輔は、假病を裝ひ臥床しゐたるも、日記を押收されしは天運と云ふべし」かうも書いてあつた。

「河井檢事！　河井！　檢事！」

靜子は失心したやうに呟いてゐた。白くなつた唇が、齒がガチガチ鳴るほど顫へてゐた。

靜子は立ち上ると、足がよろめいた。流し元に來てゐた。何のために來たのか分らなかつた。氷を取りに來たのだと氣づいた。氷囊を持つてゐなかつた。夫の病室へ歸つて來た。

「あの氷囊をお代へいたしませう。」

「どうしたんだ！　新聞を見せてくれ。新聞を。」

俊輔は、凡てを察したやうに云つた。

「まだ參つて居りません。」

「お前、今讀んでゐたぢやないか。」

「はい。見て參ります。」

縫針が、うまく氷に立たないほど、靜子の手元が危かつた。氷囊を持つて病室に歸ると、女中に持たせて來たのか、夫はもう新聞を讀んでゐた。俊輔は、高度の發熱をしてゐる。身を輾轉させねば忍べないやうな、腹痛に苦しんでゐる。神經は剃刀のやうに尖つてゐる。肉體の苦悶が精神の苦悶にひびき、精神の苦悶が逆に肉體の苦痛を增させる。十中の十まで治癒する病氣だとは云へ、そ

れは普通の病人の場合である。

夫の病的な狂ほしい眼付を見ると、靜子は取り亂さうとする自分の心を引きしめた。今こそ、夫の生死の場合である。自分が、取り亂してはならないと、けなげな覺悟をした。

「河井の仕事だ！　彼奴の中傷だ！　彼奴が新聞記者に、得意になつて話してゐる樣が、目に見えるやうだ。……俺はあの日の夕刊に直ぐ出ることだと思つてゐたが。」

俊輔は、熱に浮かされたやうに、口走つてゐた。

「假病だなんて！　假病だなんて！」

靜子は、かう訴へて泣き伏したかつた。が、夫の病を氣遣ふ心は、悲しみに打ち勝つた。

「もう何も仰しやいますな。御病氣に障るぢや御座いませんか。」

「うん。俺は構はない。俺は自分の失策から起つたことだから、どんな苦しみだつて受けるがね。が、かうして新聞に赤耻を洒した上に、收監されるかと思ふと、お前や子供達がねえ。……」

靜子の感情もよろよろと搖れて、倒れさうになつた。

まだそれは惡夢のやうに思はれてならないものが、次第に現實の形を採つて來ると、靜子の

は土臺から、崩れやうとするのであつた。夫の名と同じ記中の中に、植ゑられた河井檢事と云ふ活字は、冷凄な嘲笑を浴せかけてゐるやうだ。

やつぱり、復讐されたのだ。殘酷に、復讐されたのだ。さう思ふと、龍太郎に對する恨みで、胸がカツと燃え上つた。

しかし、靜子は思ひ直した。愛する夫を看病するに、譬ひそれが、夫の敵に對してであつたにしろ、憤や恨みを心の一隅に蔽してゐるのはいけない。心を凝して、夫の肉體の苦しみと心の苦しみとを、平癒させるために、白い手を合掌したい心になつてゐた。新しい力と信仰とが生れて來た愛する者の苦しみは、愛の力で癒せるものだと云ふ信仰が。

その六（ペン軸の藥）

午前十時頃、醫者が歸つて間もなくだつた。障子の欽硝子から、疊に落ちる秋の日も、いたいたしいほど、俊輔は衰へてゐた。夫は矢張り、法律や犯罪を考へ苦しんでゐるらしかつたが、靜子は夫の病狀を氣遣ふ外の餘裕は持たなかつた。

一寸障子を開けて見てくれないか。」

「お身體に障るといけません。」

「暖い、いい天氣だから大丈夫だよ。」

靜子が、立ち上つて開けた障子から、俊輔は深く晴れた空を、なつかしさうに仰いでゐた。

洋一と留美子とを、東片町の母が、前日病氣見舞に來たとき、俊輔の病氣が恢復するまで、事件が落着するまで、預からうかと云つてくれた。が、靜子は自分を離れて、彼等が一晩でも居ることが、どんなにかないことだらうと考へた。

しかし、一つには家の陰悽な空氣から、その柔い染み易い頭に、暗い影を感じさせないやうに、二つには夫の看病に專心になりたいため、晝間は芝の山内へ出してあつた。

留美子は、しげの背中に負ぶさつて、龜を見てゐた。洋一は、公園の往來へ通る自動車の數を數へたり、圓木の上に馬乘りになつて遊んだりしてゐた。

洋一が、その日晝近く、しくしく泣きながら、父の病室へ歸つて來た。

「どうしたの、洋ちやん。」

靜子は、自分の子の泣き顏を見ると、何故だか胸が迫つて來るのだつた。

「母ちやん。お家へ吳れる鰹節の折には、お金が澤山は入つてるつて！　ほんたう？」

俊輔と靜子は、はたと悲痛な顏を見合せた。夫の顏は、サツと生色を失つて、ピクピク頰が顫へた。

「誰がそんなことを云つたのです。」

靜子の顏も殺氣を帶びて居た。

「さうだつて、みんなさう云ふんだもの。」

洋一は、シクシク泣きながら、眼をこすつた。

「誰がそんなことを云つた。」

俊輔の聲は鋭かつた。彼は半ば身を起さうとした。が、右の腹が下になつたため、患部の痛みに堪へかねてアツと低く叫びながら、再び仰向けになつた。

「銅像の所で、遊んでゐるとね、他人の大きい子が、二三人で來てね。お前、篠原さんとこの子かいと云つて訊くの。さうだと云ふと、お前のとこへ吳れる鰹節には、お金がは入つてゐるだらう。

お金が一萬圓も遺入つてゐるだらうと云ふの。そのために、お前のお父さんは、もうぢきに赤襁褓を着るんだよ。赤襁褓！　赤襁褓つて云ふの。」

俊輔と靜子とは、電火に打たれたやうに默つてしまつた。二人の心の中には、地獄の苦しみがあつた。罪もない愛兒が自分のために、こんな侮辱を受くる！　それを考へると、俊輔の腸は、ズタズタに引き裂かれるやうであつた。

母に慰められる期待で、家に歸つた洋一だつたが、子供心にも兩親の怖しい苦しみが、それとなく通じたと見え、またしくしくと泣き始めた。

靜子は顚へながら云つた。

「何ですよ。洋ちやん、そんなことで男が泣くなんて。そんなことがあるもんですか。嘘だと思ふなら、鰯節の折を見せて上げませうか。」

「ええ。だけど、みんな洋ちやんのこと、赤襁褓の子だつて云ふの！」

「まあ！」

靜子は、ぐつと涙を嚙み殺した。俊輔も天井を見ながら、無念の涙を呑んだ。

「洋一！　留美子はどうした。」

俊輔は、怒に顚へてゐた。

「しげやと、お池のとこで遊んでゐるの。」

「靜子！　直ぐ連れて歸れ！」

「洋ちやん、行つて來ようか。」

洋一は、けなげにも迎ひに行かうとした。

「洋ちやんは、もうどこへも行くな。女中をやれ。」

洋一は、父の意を女中に傳へるため、スゴスゴと部屋を出て行つた。

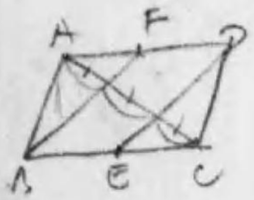
洋一の後姿を見送つて、靜子はわーつと泣き崩れた。俊輔の頰にも怖しい苦悶の色が浮んだ。

「靜子？　お前は、赤襁褓の妻にはなりたくなからう。」

靜子は、つつぶしたまま、身を搖すぶつてゐた。

「お前は俺と結婚したのを後悔してゐるんだらう。」

「そ、そんな、そんなこと。……」



靜子は涙に口籠つてゐた。

「俺が監獄に這入つても、或は俺が病氣で死んでも、俺をあくまでも愛して呉れるか。河井に對して、最後まで勝利者にして呉れるか。」

「誓ひます。誓ひます。」

靜子は、屹と身を起した。

夫の激烈な盲腸の痛苦は、この間にも斷續してゐるのだつた。

その日の午後と云ふのに、女中が靜子に取次いだ紙片は、俊輔に對する檢事局からの召喚狀だつた。靜子は、最初それを夫に見せまいかと思つた。が、女の力で、國家の鐵のやうな力に抗することは出來なかつた。靜子は顫へる足、顫へる手で、それを夫の病床に持つて行つた。

「明朝だな。よし出頭してやる。」

俊輔は、病床に半ば身を起すやうにして云つた。

「まあ！　こんなにお惡いのに！」

「何、出頭するとも。冷い法律の上の戰ひでは、破れても、暖い愛の戰に打ち勝つたことを河井に

知らせてやるのだ！」

俊輔の熱のある顏は、火のやうにほてつてゐた。

「どうぞ、お願ひですから、ね、そんなことを仰しやらないで下さいまし。お身體さへ、お丈夫になつたら、どうにでもなりますもの。」

靜子は、おろおろ聲で哀願するやうに云つた。

「今晩醫者へ行て、診斷書を貰つて、明日書生に手續をさせれば、召喚を延期して呉れるでせう。まさか、こんな病人に來いとは云はないでせう。」

靜子は、こんな身體で、尙ほ起き上ることが、出來ると信じて居るらしい夫が、いぢらしかつた。言葉少に、病める夫と悲しめる妻とは、夕暮を迎へた。流動物も、俊輔の咽喉を通らなかつた。風が、少し出たのか落葉の音が、淋しかつた。

靜子にも、流石にやつれが見えた。書生の小川は、夜學校に行つてしまつたし、女中では用が足りさうに思へなかつた。また、こんな秘密な用件を話すのもイヤだつた。靜子は、自分で、醫者の所へ行かうと思つた。

醫者へ行かうと云ふ言葉を聞くと、俊輔は靜に眼を開けた。

「お前、醫者へ行くのかい？」

「はい！」

「診斷書を添へて、手續きをすれば、猶豫をして呉れると思つてゐるのかい。」

「ええ、さうじや御座いませんの」

「さうぢやない！　そんな手續をして見ろ、どんなことになると思ふ。」

「ええ！」

靜子は、ある不安な期待で、身體が顫へた。

「そんなことをすれば、又河井の奴に蹂み躙られるのだ！」

「ええ！」

「彼奴は屹度臨床訊問に來るだらう。」

「ええ。そんなことがあるのですか。」

「あるだらうと思ふんだ。彼奴のことだから、どんなことだつて、やりかねない。河井が、再びこ

の家に來て、お前や洋一の前で、病人の俺を、法律の力で、被告として訊問するんだ。お前は、それが忍べるかい。」

「はい。だつて、そんなお身體で、出頭出來るでせうか。」

「俺は、途中で倒れても、お前との家庭を河井のために、蹂み荒されたくはない。」

夫の顏には悲痛な色が動いた。

子供部屋では、洋一と留美子とが面白さうに笑つてゐるのが聞えた。午前のことがあつた以來、外出を禁ぜられてゐる幼い二人だつた。

「俺の病氣は、癒らないやうな氣がする。もつとも、病氣が癒つたつて、もう社會的には廢人同樣になつてしまふのだが、監獄へ繫がれるのと、病氣で死ぬのと、現在の俺にはどちらがいいのか分らない。」

靜子の心に、不安が黑い凶鳥のやうに、羽ばたきして、大きな翼を擴げた。醫者に事情を打ちあけて診斷書を書いて貰つて、東片町の父を尋ねて相談する外はないと思つた。

しかし、夫の瞳をぢつと見てゐると、夫を殘して一分でも外へ出て行くのが、悲しかつた。

「行くのかい！」

「はい！　直ぐ歸つて參ります。」

靜子は立ち上つた。そして、子供部居に居る洋一を呼んだ。

「洋ちやん。父さんが寂しがつていらつしやるから、留美ちやんと、父さんのお部屋で母さんが歸るまで遊んでいらつしやい。」

さうした靜子の心遣ひが、病床に居る俊輔には、涙が滾れるほどうれしかつた。

往診から歸る醫者を待つて、診斷書を書いて貰ひ、明朝島木博士と共に、來て貰ふことにして、醫者の家を出たのが、八時近かつた。それから東片町へ廻らうかと思つたが、家が氣にかかつて、どうしてもその氣になれなかつた。

「唯今！」

病室に入ると、洋一も留美子も姿がなくて俊輔は安らかに眠つてゐた。

そつと、額に手を當てようとしたが、眼を覺してはと思つて、靜に襖を閉ぢた。

子供部屋に行くと、洋一は木馬に乘つてゐた。留美子は、おしげの膝に眠つてゐた。

「父さん。直ぐ寢ちまつたから、つまらないの。」

洋一は、不平らしく云つた。

「さあ、洋ちやんも、もうお休みですよ。」

靜子はさう云ひながら、留美子をしげから抱き取つた。

二人の子供を、寢かせ付けながら、靜子もつひまどろんだ。

——上野の山のやうでもあるし、小金井の堤のやうでもある。兎に角、春の暖い日で、櫻が咲き亂れてゐた。雜沓してゐなければならぬ筈だのに、夫と二人の子の四人の外には、吹雪する櫻の花の外何もない。靜子は嬉しくて仕方がない。

「どうして、お花見に來ないのでせう。世間の人つて馬鹿ね、こんなによく咲いた花を外にするほど、忙しいことがあるのかしら。」

靜子が云ふと、夫は、

「見に來る奴が馬鹿さ。」

夫も上機嫌である。ふと氣付くと、留美子を負ぶつて、洋一の手を引いてゐる。夫が、洋一丈で

も、かまつてくれればいいと思ふ。靜子の歩きかねてゐるのを平氣で、夫はステッキを振り廻してゐる。そして、さつさと先に立つて歩く。そのうちに、だんだん後れて夫の姿を見失つた。櫻の幹から、飛び出して、わつと嚇かしさうなものだが、幾何歩いても夫は現はれない。……

突然夢が破れた。靜子は、靜まり返つてゐる隣室が不安になつた。

靜子は、闇の中を這ふやうに、夫の病床へ近づいた。額に手を當てたとき、靜子はアッと身體が硬直してしまつた。掛蒲團を外して患部を見た。其處に當てられた氷よりも、肌の方が冷たかつた。

靜子はべつたり、坐つたまま、泣き聲を殺して、咽喉に詰まつてゐる大きな塊を飲み下さうとするやうな自制の努力をした。

次ぎの間へ行つて、洋一を搖り起した。洋一は、どんよりとした眼を漸く開けた。

「父さんは何時お休になつたの。」

寢ぼけてゐる洋一には母の問ひが直ぐには分らなかつた。

「うん、何かお書きになつてから。……」

「寢る前に、何かなさらない。」

「ペン軸の中から、お藥をお出しになつて、それを飲んでから、留美ちやんと洋ちやんとにキスをして下さつたよ。」

「藥！」

冷めたい戰慄が、靜子の身體中を走しつた。

「うん。ペン軸のペンを入れるところに、這入つてゐたお藥！」

靜子は、わなわな身體が顫へた。彼女は狂氣のやうに、夫の病床に近づくと、暗くしてあつた電燈を明るくし、狂氣のやうに、夫の枕の下を探ぐつた。彼女の手に紙片がさはり、それが遺書であることが、まさしく分つた。手が顫へ目が眩めき、その遺書が容易にはよめなかつた。

靜子！　許してくれ、俺は、この事件の當初に一度覺悟した。河井からの侮辱を受ける前に決行するところだつた。今となつては、自分で自分を殺さなくても、今度の病で生命を奪はれることは自分自身で明らかに感じてゐる。さう思つて、あきらめてくれ。明日のことを思ふと、一刻も

生きてゐるのが苦痛だ。つまらないことから、一生を棒に振り、お前達を犠牲にした俺をあはれんで呉れ。しかし信じてくれ、俺はお前に告白した、小切手の仲介以外には何等邪しい行爲はしてゐない。俺の失策はお前からも亦、社會からも許さるべきものかも知れない。しかし、國法は曲げられない。更に愛するお前や洋一や留美子を愛しながら、一生を不幸にし、尙後暗い翳影を持たせる罪を誰が許して呉れるだらう。俺は、河井と激論してお前を幸福にする自信があると云ひながら、お前を世間に顏出しも出來ない人間にした。その俺が、どうして河井の前に立つことが出來よう。俺は、さうした侮辱を感ずることに堪へない。二三日永らへて此の上堪へがない侮辱を與へるよりも、俺は男らしく生命を絶つ。靜子！　俺はお前を不幸にした。しかし、俺の一生で、お前に對する愛丈が、本當に貴い物だつた。その外は、地位も名譽も醜い幽靈だつた。俺は、その幽靈を追ふ結果、つひああしたことをしてしまつたのだ。が、その動機丈は、出來る丈立身出世して、お前を輝かしてやりたいと思ふ一心であつたことを察してくれ。そして、その功名に急であつた事から、かうした羽目に陷つたことを許してくれ。

自分で、牢獄に這入る恥辱は忍んでもいい。お前や洋一や留美子を、國家の罪人の妻子だとは云

はせたくない。俺が死ねば國家は、俺の罪を許してくれるだらう。この病で、助かるか助からぬか分らない命だ。俺が、罪人として極印を打たれぬ中、自ら殺す方が、お前達を、日影者にしない最善の方法のやうに俺は思つたのだ。その方法が、誤つてゐたとしても、俺の心丈は察してくれ。

愛する洋一と留美子とに、枕邊を守られて、死んで行く俺に、何の恨みもない。可愛い洋一よ。彼は、無邪氣に、父を殺すモルヒネのは入つて居るペン軸を、書齋から探して來てくれた。そして、それを手柄として父に誇つた。俺は洋一の輝く未來を信ずることが出來る。洋一と留美子、この二人はおれがお前への贈り物だ。俺の濁つた生命、淨い連續だ。俺は、お前を信じてゐる。お前が、やさしい心の底に、母としてどんなに强い意志を藏してゐるかを知つて居る。今までにした貯蓄は、もしお前が、心して使へば、二人を教育するに足りるだらう。むろん、それにはお前の奮鬪を要すること勿論だが。おれは、お前を信ずる。お前が父と母との愛を、合せて子供達を育てて呉れることを。そして、父が非命に斃れた補ひをしてくれることを。

もう一つお前にお願ひがある。俺が、かかる恥づべき原因で、自殺をしたことを、二人の子供に

知らせないで呉れ、世間で、何と云はうと子供丈には、病死だと思はせてくれ。二人をお前に托す。俺は洋一と留美子の中に生きてゐる。どうぞ、今までの恨や憤や悲しみを捨て、愛し慈しむ母の心丈になつて、子供を育ててくれ。死んでゆく俺に恨みはない。お前も出來るなら、河井を許してやれ。

おれは、お前に感謝と、謝罪とを以て、別れを告げる。東片町の父上母上には　お前から許しを乞うてくれ。死に際して改めて云ふことはこれ丈だ。俺はお前に對する愛と、お前からの愛を子供達に注いだ愛とのことを考へながら、安らかに永久に眠に入る。

静子どの　　俊輔

子故の力

その一（遺書を守りて）

遺書を讀み終つた静子は、顫える手で、それを内懐に隠した。坐つてゐる疊も、頭を掩ふてゐる天井も、凡てが揺れた、船暈か何かのやうに周圍が揺れた。止めどもなく揺れた。

筋肉の力の悉く抜け落ちたやうな足を踏みしめながら、電話室へは入つたが、暫時物が云へなかつた。醫者の番號が、先に出かかつたのを、東片町の家に、一番に急を告げた。

再び夫の病室に歸つて來ると、急に取返しの付かないことが出來たやうに、冷い俊輔に身を投げかけて、泣き崩れながら、夫の名を呼び立てた。

枕元に、その持主の生命が終つてゐるのも知らずに、白黄金の懐中時計は秒針の歩をつづけてほのかに時を刻んでゐた。それを見ると、まだ十一時二十分だつた。女中達も、静子の氣勞で主人の大事を知つたらしいが、ただ色を變へて、オドオドしてゐる丈だつた。

後から電話をかけた醫者の方が、先きへ來て呉れた。父がまだ來て呉れてゐないため、父に頼む筈の仕事を、一人でやらなければならなくなつた。

醫者は、俊輔を一目見て、遂に驚いたらしかつた。丁寧に死體を檢案した。モルヒネ中毒の徴候を見て、醫者は自分が注射の量を誤つたのではないかと、一時は思つたらしかつた。

「とても、助からないで御座いませうか。」
醫者が、凡てを感知したのを覗つて、靜子は口を開いた。
「殘念ながら手遲れです。飲んで直ぐでしたら、魔睡が襲ふのを防止するのですが、今では、何とも仕方がありません。」
醫者は、靜かに云つた。
「少しお願ひしたいことが御座いますが、應接室の方へいらしつて下さいませんか。」
靜子は、激情を殺して、しとやかに云つた。女中を呼んで夫の遺骸を見守らせた。
洋館の應接室は、電燈を點じても、人氣がなかつたため、少し冷々としてゐた。
「奥さん！　御主人は、自殺なすつたので、死因は盲腸炎でないことは、御存じでせうね。」
「はい。」
靜子の聲は、死刑の宣告を受けた囚人の答のやうに、顫へてゐた。
「多分、遺書か何かお在りになつた事だらうと思ひますが、モルヒネをお飲みになつたのです。私が、注射の量を間違へたものと、誤解なさらないで下さい。第一時間を考へて下さると分ります。

先刻、貴女が私の病院へお越し下さつた留守の間に、服藥なさつたのに違ありません。」
靜子は、今何事も包む譯には行かなかつた。
「はい！　何事も存じて居ります。」
靜子は、危く咽び泣かうとした。
醫者も、道に愁然とした。
「事情を承つてゐますから、一入御同情いたします。」
何かを云ひ出さうとする前の、苦しい緊張の一二分が過ぎた。
「あの、失禮のことを伺ふやうで御座いますが、主人は自殺しなかつたとしましたら、生命は助かつたので御座いませうか。」
醫者は、少し色を變へながら云つた。
「それは確とは申し上げられません。二三日が、危險だつたのは事實です。盲腸炎は、そんなに恐ろしいものではありませんが、心臟が非常に衰弱してゐた上に、御心痛がありましたからね……」
「お恥しい話ですが、主人は御存じの通明日召喚されて居ります。もし召喚に應じなければ、臨床

訊問を受けたかも知れません。さうした精神的の激動を受けても、助かりましたでせうか。今自殺しても、しなくつても同じだつたやうに、妾には思はれますのです。」

さう云ひながら、靜子はかすかに、すすり泣いた。彼女の心の中に、懷中してゐる遺書の中の「かかる恥づべき原因で自殺したことを、二人の子供に知らせないで呉れ」と、云ふ文句が、烙き付いたやうに殘つてゐた。二人の子供丈にではない。どうかして、世間一般にも知らせたくなかつた。

醫者にも、靜子の意志が通じたのであらう。彼の職業的良心は、彼を嚴肅にした。

「奥さま、貴女は何を仰つしやるのです。醫者に不正な診斷書を書かせようとなさるのですか。私の邪推であつたら、どうぞ御免下さい。が、私には奥さまの仰つしやる言葉が、そのやうに取れるのです。」

靜子は、やや激昂して云つた。

「そ、そ、そんな譯では御座いません。數日後に病死するもので御座いましたら、唯二日だけ早めたもので御座いましたらと、存じたので御座います。こんな事件の最中に、主人が自殺いたしましたら、世間で何と申しますかしら。事實以上の大罪を抱いて、死んだと云はれても致方ありません子供に死因を知らせて呉れるなどの事で御座いますが、世間が主人の自殺を、何と思ふかは別問題にいたしましても、父親が罪を怖れて自殺したなどと云ふことが、子供の心に及ぼす影響を考へますと、空恐しいやうな氣がするので御座います。」

靜子は、一生懸命に云つてゐるのだつたが、自然に聲が顫え、心が搔き曇つて來るのだつた。

「御心情は察します。これが單純な自殺だつたら、こんな事件の最中でありませんでしたら、自殺を病死だと發表しても醫者を信ずるかも知れません。しかし、御主人の場合は、その筋の注意を一身に、蒐めていらつしやるのですからね。もし、檢事局あたりで、怪しいと思はれて、警察醫の臨檢があれば、そんなウソは、淺墓な行ひになるのですからね。」

靜子は、尙執拗であつた。

「でも、妾の外は、女中も書生も誰一人存じません。子供が可哀相です、子供のことを思ひますと……」

靜子は、もう凡ての力が拔け、ヒステリカルに泣いてゐた、

「奥さま、貴女は先刻、私の處へ診斷書を頼みにいらしつたときに、御主人がふとした義理のために、ふとした人情のために、ああした疑獄に關はつたと仰しやつたではありませんか。」

靜子は、ハツと冷たい物で、胸を打たれたやうな氣がした。

「すみませんでした。自分勝手なことを申上げまして。」

うなだれたまま靜子は云つた。

其處へ實父の駒井氏が、はいつて來た。

靜子は、ガツクリ氣が挫けて、テエブルに泣き伏して、父に俊輔の死の模樣をおろおろと語つた

「馬鹿！　罪から隱れるために、又隱さなければならぬやうな罪を、重ぬる奴があるものか。」

父は、死者の代りに、靜子を叱り付けた。が、その双眼には、涙がキラキラと光つてゐた。

それまで默つて聞いてゐた醫者は、話の途絶えるのを待つて云つた。

「あの、貴君が駒井先生ですか。貴君に丈、一寸お話したいことがあるのですが。」

靜子は、其場を避けるため、冷めたい夫の居る日本間へ取つて返した。

その二（人間的良心）

醫者は、靜子が部屋を去つたのを目送すると、改まつた容子で、駒井氏に正面に顏を向けた。深い感動を受けた表情が漂つてゐた。

「深く御同情致します。奥樣が、仰しやる通、私の診斷書が御家に不幸中の幸福を、齎すものならば、私とてあくまで、醫師の良心を楯に取らうとは申しません。失禮で御座いますが、その筋で死因に疑を懷いたりしますと、却つて御家にも一層惡い結果になりはしまいかと心配しますので。」

醫者の筋道のよく通つた言葉に、駒井氏も首肯しない譯には行かなかつた。しかし、駒井氏は、靜子を叱つたときも、稍女として、愼みを失つたと思はれる態度が、醫者に對して恥しかつたけれども、夫の遺言狀を讀んだ靜子が、夫の言葉を護り、自殺に依つて、夫の蒙る非難と、子供に與へる陰翳を、出來る限り、薄いものにしようとする一條の心願を、哀れに思はずには居られなかつた。

「貴君の仰しやることは、重々御尤もです。けれども死者の希望でもあり、[illegible]子の[illegible]

しですから、もし出來ることなら、何とかいい方法はないでせうか。何か便宜な手段はないでせうか。自殺は犯罪でないのですから、それをかくすと云ふことも、あまり罪惡とは思へないのですが……と申して、私は無理强ひにお願ひするのぢやありませんから。」

駒井氏は、老政治家らしい落着いた口調で、靜かに云つた。

「實は、私も出來る丈の事はしたいと思つてゐるのです。」醫者は、感激しながら、言葉をつづけた

「が、それには何うしても、その筋の方に、內密に諒解を得て置く必要があると思ふのです。實は貴君のお顏を見た時に、思ひ浮んだので御座いますが、貴君は國政會の幹部の方でいらつしやいますから、さうした御便宜もあるだらうと思ひますが。」

「うむ。」

駒井氏の顏は、一寸曇つたが、直ぐ決心したやうに、瞳を輝やかせながら云つた。

「そりや、警視總監も檢事總長も、みんなよく知つて居ますけれど、私としてあまり大袈裟なことはしたくないのです。ただ本人が死んでゐると云ふことに、同情して貰ふやうに運動して見てもいいと思ふのです。」

「いや、さう大袈裟なことは入りません、ただ、今度の事件に直接關係のある官憲、例へば本件の係りの檢事にでも、お知り合ひの人は無いでせうか。」

「係りの檢事！」

駒井氏の顏は、サツと別樣の緊張を示した。河井龍太郎のことが、電光のやうに頭に浮んだ。が、河井が靜子の家に、家宅搜索に來た事は、新聞で知つてゐた。そして、それに對して烈しい憎惡を感ぜずにはゐられなかつた。河井龍太郎と云ふ字が、頭の中に浮んだ丈でも、駒井氏の顏は、不快な表情に掩はれてしまつた。

「あるにはあるが。」

駒井氏は、吐き出すやうに呟いた。

「はあ、さうですか、あればそんな結構なことはありません。係りの檢事さへが、死因に疑を持たなければ、それでいいのですから。どうぞ、一つその方に宜しくお話しなつて下さい。そして、事が圓滿に行くやうでしたら、どうか私に電話を下さい。規則は破つても、醫師法の規定に背むいても、奧さんや二人のお子さん達を幸福にして、あげることが出來ると思へば、私の良心は少しも

邪しくありません。それでは、私はこれで、失禮いたします。」

醫者は、職業的良心に背く苦痛を、本當の人間的良心に殉ずる快さで、紛らしながら、落着いた足取で歸つて行つた。

駒井氏は、此の醫者を玄關まで見送り、芝公園の夜更の闇に消えてゆく、醫師の俥を、ある感激で、長い間見送つてゐた。

醫者は、執ちらかと云へば、多くの心の苦痛なしに去つたけれども、後に殘つた駒井氏の心には可なり多きな苦悶が蹲くまつてゐた。

駒井氏にして見ると、今の場合何人に、救ひを求めるよりも、河井に懇を乞ふのは、苦痛だつた

駒井氏も、靜子が俊輔に嫁してからは、夫人とも又靜子とも、河井に就いて一言も語らなかつた。

河井の事に、觸れることは、暗々裡に避けてゐた。靜子の方でも、さうであつた。だから、靜子は

夫のかりそめな失錯に乘じて、河井の採つた冷酷卑劣な復讐的行爲に就いても、何事も父に話して

はゐなかつた。さうした事を、人に話すことさへ、韮を嚙むやうに、不快に思はれたからだ。

駒井氏は、むろん河井の生涯に就いては、靜子夫婦ほど氣にもかけてゐなかつた。が、何となく

此方が頬を打つた相手が、默つて引込んで居るやうな、無氣味さと、一方濟まないと云つた心持と

を同時に、感じてゐた。が、府市の疑獄に就いて、河井が靜子の家に臨檢したことは、新聞で知つ

てゐた。それ　靜子や俊輔が、感じたほど、河井の卑劣な仕返しだとは思はなかつたが、然しそれ

を仕方のない役目だとは思はなかつた。外に、人もあらうに舊知の家に、檢事として臨む河井の非

人情を、可なり烈しく憤らずにはゐられなかつた。

その河井に、ある懇を乞ふことに、駒井氏が、可なり大きい苦痛を感ずるのは當然だつた。

駒井氏が、日本間に引返すと、靜子は夫の亡骸に縋つて泣き崩れてゐた。先刻醫者に應對してゐ

た、男々しい健氣な彼女は消えてしまつた、ただ大きい悲愁に、身も心ものたうたせてゐる、父の

は入つて來たのを見るや、

「お父様ー」

かう云つたぎり、靜子は父の膝に抱きついて、十一二の少女のやうに、泣きじやくつた。しかし、

一寸父の顏を見上げた靜子の眼色は、切なげに、醫者と父との話の結果を訊ねてゐるのだつた。が、

それは飽にゐる書生や女中にも、秘すべき大事である以上、明らさまに、答へることは出來なかつ

た。

駒井氏が、河井の力を借りやうか、借りるまいかの躊躇は、靜子の姿を、一目見たとき、忽ちに消えてしまつた。娘を救ふためには、どんなことでもしてやるぞと云つたやうな、父らしい激情が潮のやうに、老いた政治家の胸に、たぎり滿ちた。

「安心おし！　大丈夫だよ。」

力强い聲が、父の口からやさしく出た。

父の言葉を首肯いて見せた靜子の額には、憂愁に塞されながらも、微かな欣びが、刻まれてゐた。

その三（靜子！　靜子！）

その翌日は、冷たい秋雨だつた。

靜子は、夫の枕邊に端坐しながら、明け方前から降り出した、魂の歩むやうな淋しい雨の音を聞いてゐた。張りつめてゐながら、空虛に近い心だつた。

駒井氏は、河井に何うして會はうか、會つて何と話さうかと、種々の場合を考へてゐた。河井を東片町の家に、呼び寄せようか、料理屋ででも、待ち合はせようかと考へた。しかし、河井は篠原に對すると、ひとしく自分にも、怨恨を懷いてゐるかも知れない。從つて、自分の招きに應じて、オイソレと指定の場所に來ないかも知れない。その間に、大切な時が過ぎる。こんな場合に、區々なる體面に拘泥すべきではない。河井の門を自分で叩かう。俊輔を自殺せしめる一因をなしたものは、龍太郎であるかも知れないが、龍太郎も今では生きながら、屍に化してゐるのだらう。龍太郎に、俊輔の死を告げて、兩人の學生時代のお互ひの友情や、自己に對する情誼を、冷結した龍太郎の心に蘇らせることは、龍太郎に人間らしい心を蘇らせることにもなるだらう。駒井氏はかう考へると、靜子には秘密に、龍太郎を訪問することを決心した。

最初の電車が、軌り始めてから間のない頃、駒井氏を乘せた自働車は、未だ覺め切らない街を、蕭條と降る白い雨に、濡しながら、上野櫻木町の河井龍太郎の家に向つて、走つてゐた。

龍太郎の家は、音樂學校の直ぐ裏手の街にある閑寂な二階建だつた。庭なども、綺麗に掃き淨められて、きちんとしてゐたが、温味が微塵も漂つてゐないことは、直ぐ感じられた。

取次ぎに出た少女に案内されて、駒井氏は階下の客間らしい八疊に通された。龍太郎はまだ眠つてゐたのだつた。

十分位してから、龍太郎は客間へ姿を現した。龍太郎が、靜子に對する戀心を、父である駒井氏の家に燃ゆるやうに語つた、あの日以來の會合であつた。靜子と俊輔との結婚に對しても、龍太郎は靜子の意志と云ふよりも、彼女は弱い女の常として、父の選擇に從つたものだと信じたかつた。靜子を俊輔に奪はれてからも、彼は病室に飾られてあるあの謎の花環を、遠い昔の美しい夢の破片として、思ひ浮べることがあつた。かの靜子が、自分が彼女を、火のやうに戀してゐるのを知りながら、病氣でしかも彼女を得たい一心からの病氣で、一年卒業が、遲れたために、彼女自身の發意で、自分を捨てて、俊輔に轉じたのだとは思ひたくなかつた。其處には、駒井氏の俊輔びゐきが、働いてゐた。さう龍太郎は感じた。そして、自分を捨てた罪を、靜子から駒井氏に、轉嫁することは、暗い絶望の淵に沈んでゐる龍太郎には、せめてもの慰藉だつたのだ。

「失禮致しました。朝寢坊なもので御座いますから。」

龍太郎の言葉は、從つて水の如き、冷さを含んでゐた。

「いや、俺の方こそ朝早くからお邪魔した。」

「御無沙汰致して居ります。お變り御座いませんか。」

龍太郎も、流石に世間並の挨拶は忘れなかつた。

「うん。少しは顏を見せて呉れてもいいと思つてゐた。その後、何うしてるね。」

二人は、冷たい挨拶を交しながら、お互に穿鑿的な眼を注いだ。そして、二人が等しく感じたものは、驚愕だつた。相見ない數年が、相手の上に齎した、餘りに甚だしい變化を認めた驚愕だつた。龍太郎が、駒井氏の上に見出した老の影は、まだよかつた。しかし、駒井氏の駭きは、それに數倍するものだつた。靜子を失ふことが、龍太郎に取つて、どれほどの打擊であつたかが、駒井氏に初て分つた。あの學生時代の龍太郎、やや神經質ではあつたが、純一な高貴な感情を表してゐた美しい龍太郎と、若々しさも血の色も、失せてしまつた、瞳は呪詛に血走しつた、冷凄な、四十以上にも見えるやうな此の男とが、何人であらうとは、視覺丈では容易に信ずることが出來なかつた。

龍太郎の態度は、匕首を懷に呑んだ、隙あらば斬り付けようとする仇敵のそれだつた。駒井氏は眼を背けずには居られなかつた。暫時、不穩な沈默が、續いた。龍太郎は、イライラして來た。駒

井氏の早朝の訪問が、俊輔の犯罪に關係した用件だと、推測せずにはゐられなかつた。自分よりも俊輔を撰んだ駒井氏、恩怨を差し引いて、怨が殘つてゐる駒井氏が、今更自分に何を求めようとするのか。自分の仇敵たる俊輔のために、何の便宜を計れと望むのか、龍太郎は、駒井氏がノメノメと訪ねて來ることさへ、片腹いたいと思つた。毒を含んだ言葉が、今にも龍太郎の口から、洩れさうになつた。駒井氏にも、龍太郎の氣持は分つた。この男に哀訴せねばならぬのかと思ふと、駒井氏は屈辱と憤怒とを同時に、感ぜずにはゐられなかつた。

「實はね。今日來たのは、外ぢやない。」

駒井氏の言葉は、重々しかつた。

「君に幼い頃からの、篠原との友情を思ひ出して貰ひたいんだ。私の家へ、君が出入してゐた頃のお互同志の友情を思ひ出して貰ひたいんだ……その上で、お願ひしたいことがあるんだ。」

鎖の付いた足を、引きずるやうに、駒井氏は云ひ澱んだ。

「しかし、先生。現在の私は現在の私です。先生が、現在の私にお頼みになる以上、現在の私が承る外はありません。」

龍太郎は、冷然として受け流した。

老いた政治家は、相手の冷たい言葉に胸を刺されて、しばらくの間沈默した。が、夫の死に崩折れてゐる可愛い娘を想ひ起した。父の死も、それと同時に襲ひかかつた暗い運命をも知らずに、嬉嬉として戯れてゐる筈の二人の孫の姿を思ひ浮べた。そして、傷けられた胸に、更に勇氣を皷しながら云つた。

「君を篠原の友人として、……いや篠原を友人と思つてゐないのなら、俺の知己として、いや俺を知己と思つてゐないのなら、たゞ同縣人の誼として、一寸君の力を借りたいと思ふのだが。」

遂に、龍太郎の顏も、曇つたが、彼は自分の冷たい心を、引きしめながら云つた。

「大抵、先生の仰しやることは分つてゐます。誤解なさつては困ります。先生は私の檢事としての職を利用しようとなさるのでせう。が、申上げて置きます。私が、御愛婿の事件に關係してゐるのは、私の意志と云ふものは微塵も加はつてゐないのです。運運の惡戯です。いや、運運な惡戯などと云ふ嘆聲を洩すのも、いやなほど、私は自分の感情を殺すやうに境遇から敎へられたのです。そして、現在では職責から感情を殺すやうに、敎へられてゐるのです。」

駒井氏も、遉に屹となつた。唇が顫えるため、その鼻下の白い髭が、かすかに動いた。

「君は誤解して呉れては困るよ。君に法を曲げて、篠原の罪を輕くして呉れと、頼みに來ておるのぢやない。」

龍太郎も屈しなかつた。

「無論です。私も、法を曲げてまで、篠原君の罪を重くしようとは思つてゐません。」

駒井氏の顔からは、忿怒が逝つた。

「君は、俺の云ふことを靜に聽くことが、出來んのか。」

「靜に聽いてゐますとも、これ以上冷靜にきくことは出來ません。」

「うむ、さうか。よし。それなら、冷靜に聽き給へ。君は、篠原を被告として、自分の前に立たせようと思つてゐるかも知れないが、篠原はもう國家の法律の力も、及ばない所へ行つてしまつて居るぞ。罪を重くすることも、輕くすることも、出來ない所へ行つて居るぞ。」

駒井氏の聲は、顫えてゐた。駒井氏の言葉の意味が龍太郎に通ずると、遉に彼の冷靜も掻き擾されずにはゐなかつた。

「え、何と仰つしやるのです。何と仰つしやるのです。」

「盲腸炎で重態であつた所へ、いろいろの激動を受けたものだから、心臟破裂を起して死んだのだ。」

さう云ひ終つた老人の顔には、一杯の悲愁が漂つた。

「死……死……死……」

龍太郎は、獨り言のやうに呟いた。血の氣を失つた唇は、ビクビクと神經的に顫動した。

「そ、そ、さうですか。」

龍太郎は、瞳を卓上に、据ゑたまま、化石したやうに默つてしまつた。彼の心中には、激情の波が搖れ返つた。それを何う制し何う統一していいか分らなかつた。實際を云ふと、龍太郎は昨夜中眠られなかつた。俊輔の家から、押收して來た日記を讀み返し、又讀み返してゐた。それは、彼に烈しい打擊だつた。靜子が、いかに夫を熱愛してゐたか。又二人の家庭が、どんなに幸福であつたか。彼の讀み取つたものはそれ丈だつた。俊輔が、靜子に語つた言葉は見事に適中した。しかも龍太郎は、その日記から烈しい嫉妬を感じながらも、職務上最後まで、目を通さずにはゐられなかつ

た。ただ、今日の日を想像して、なやましい嫉妬を紛ぎらせてゐた。彼が檢事として、俊輔が被告として、相對する今日の日を、想像してゐたのだ。最も、文明的だと彼が思つた復讐の場面を、様様に想ひ浮べて、曉方まで一睡もしなかつたのだ。然るに今その復讐の目的たる俊輔は、死んでゐる。龍太郎は、靜かに瞳を、駒井氏の老顔に移した。自分の瞳も、不覺にも涙に曇つて來るのを、何うすることも出來なかつた。

「さうですか。篠原君は死んだのですか。」

龍太郎は、悵然として敵の死を悼んだ。が、直ぐ自棄の皮肉が、その後から續かずには居なかつた。

「尤も、篠原の友人の河井も、六七年前に大學の講堂の廊下で死んでしまつたのですが。」

その聲は低くかつたが、綿々たる恨みが、籠つてゐた。

「君は、恨みを死んだ者の上や、その不幸の妻子にまでは殘すまいね。」

駒井氏の言葉で、龍太郎はハッと我に返つた。俊輔の死を聽いて、對座してゐる駒井氏のことも忘れてゐたのだつた。我に返ると同時に、駒井氏が早朝から、俊輔の死を報らせに來たこと、又顧

みたいことのあると云つた意味が、朧ろげながら分つた。

龍太郎は、俊輔の病氣だつたことを知つてゐた。俊輔の家の應接室で、烈しく自分に喰つてかかつたとき、その昔ながらに見事な體格に拘はらず、病弱の印が、身體全體にアリアリと出てゐた。が、駒井氏から、病死したと云はれたとき、「ああ自殺したな！」と、直ぐ感じた。俊輔は倒れた。靜子は龍太郎の生命である。その生命を奪つた仇敵が倒れた。龍太郎の心の惡魔は、凱歌を擧げずにはゐなかつた。

しかし、駒井氏の老い衰へた姿が、心を刺した。銀杏落葉を拾つてゐた、俊輔の子供達の姿が心の裡に浮んだ。俊輔との、少年時代からの、美しい友情の數々の場面が、蘇つて來た。二人揃つて駒井家に出入した頃の懷しい日々が、思ひ返された。さうしたものは、復讐の快感を限りなく、淋しいものにし、味氣ないものにした。永い惡夢から、醒めたやうな氣がした。その上に手を下さないまでも、自分が家宅捜索をしたことが、俊輔の死因の主なる原因であると思ふことが、龍太郎の心を散々に嚙み裂いた。

彼の氷のやうな心も、春風に撫でられたやうに、ほのかに溶け始めた。

「篠原君が、死なれた以上、篠原君に對する私の感情も、これで打ち切りです。靜子さんや、(彼はこの言葉をどんな懐しい氣で云つたか) お子さん達に對しては、同情こそ持つて居れ、恨はありません。それどころか、大変お氣の毒に思ひます。」

龍太郎の心は和いだことが、駒井氏に直ぐ通じた。

「さうか。それで安心した。」

「私も、いい氣持で、舊友を調べて居た譯ではなかつたのです。ただ、私の心が、……嫉妬は地獄の苦しみに等しければなりと云ふ言葉を御存じですか、私も地獄の苦しみに會つて、地獄のやうな心になつてゐたのです。靜子さんにも、どうぞ私を惡く思はないやうにお傳へ下さい!」

靜子と云ふ言葉を、口に出す毎に、それが呪文でもあるやうに、龍太郎の心は、和んで行つた。

「實は、それに就いて、お頼みがあるのだが、場合が場合だから、今篠原が、病死したと云つても自殺ぢやないかと云ふ疑を、掛けられさうなのだが、それで屍體を檢案されたりすると、恥の上の恥なのだが。」

駒井氏の顏は、曇り、言葉は顫えた。

龍太郎も、直ぐには返事をしなかつた。彼にも、恐ろしい靜な沈思が必要だつた。

「いや、醫師の診斷書がある以上、その筋で死因を疑ふことはありますまい。凡てが分明してゐる今日、犯跡を陰蔭するための自殺と云ふ疑もないのですから、その點は、御安心なさつても、いいでせう。國法も屍者の骸を、鞭打つことは、しないでせうし、私もこれで、舊友を檢べると云ふ不快な職責から免れたことを、幸福に思ひます。」

龍太郎の、それとなき言葉の裡に、温情が漂ふた。

駒井氏は、老顏を明るくしながら欣んだ。

「それで俺も安心した。……君の親切は忘れない。靜子も欣ぶだらうと思ふ。これを、緣に東片町の家へも、時々來て貰ひたい。」

「いづれそのうちお伺ひします。」

さう答へながらも、龍太郎は幾年振かに人間らしい温い心持がした。

駒井氏を見送つた龍太郎は、細い雨脚を眺めながら、茫然と玄關口に佇んでゐた。

自分が、俊輔を取調べる檢事でなかつたら、俊輔は死ななかつたかも知れない。偶然に與へられ

た報復の機會を、自分はどんなに欣んだだらう。しかし、完全に之れを仕了はせた今、龍太郎の心に殘るものは、矢張り空虛と寂寥だつた。

「靜子！　靜子！」

彼は心の裡で、さう叫びながら、美しい青春時代の幻を思ひ浮べた。植物園で會つた彼女、西片町の通りで會つた彼女、駒井家の客間で見た彼女、それが美しい繪卷のやうに、頭の中を通り過ぎた。が、過去の幻が浮んだとき、龍太郎の眼から、冷たい涙が滾れた。

「靜子！　靜子！」

再びかう叫んだとき、ふと、先日芝公園の篠原の官舍で取次ぎに出た靜子の姿が浮んで來た。

それは、六七年ぶりの再會であつた。子供二人の母になつてゐたとは云へ、靜子の姿は、彼女を戀し、今も戀する龍太郎の眸には、神の如く美しかつた。

「靜子！　靜子！」

三度、口の中で呟いたとき、密雲の中から、一縷の光が貫き出たやうな、明るい頼もしい心が、龍太郎の胸に生れ始めてゐた。

その四（頼む木蔭）

龍太郎の家からの途中に、醫者の宅に寄つて、病死の診斷書を得て、駒井氏が歸つて見ると、靜子は、父の死と云ふ事實を、事實として、意識しないながらも、不安に襲はれてゐる洋一と、留美子を慰めながら、集つて來る人々と、健氣に應對してゐた。父の差出した診斷書を見ると、靜子は淋しさうに、微笑んだ。

その日の夕頃、三重縣の田舍から、急を聞いて俊輔の母と伯父とが、上京した。

駒井氏と伯父とが、相談した上、自宅で告別式をすませ、東京で假葬した上、伯父が是非にと云ふので、俊輔の鄕里で本葬をすることにした。

告別式の日も、雨だつた。靜子は、自分の父や、俊輔の母や伯父等と一緒に、俊輔の柩の横に坐つて、來客に接してゐた。たとひ、疑獄事件の嫌疑者ではあつたけれども、まだ休職になつてゐなかつたため、東京府事務官の資格で、葬ることの出來ることが、靜子のせめてもの慰めだつた。

白無垢を着て、悲しみに閉ざされてゐる靜子の姿は、又なく凄艶だつた。喪服を着けて、燒香し

て臭れる人々の中には、あの華やかな結婚披露の日以來、會はないやうな知名の人が多かつた。かうした知名の人々は、靜子の幸福の誕生式に、列つて臭れたと同時に、今またその幸福の葬式にも列つて臭れるのだと思ふと、靜子は限なく淋しい氣がした。かうした知名の人々の顏は、はしなくも靜子に、結婚式の當夜を想ひ起させた。そして結婚當時の樂しい記憶が、さまざまに頭の中に浮んで來て、それが新しい哀愁の種となつた。

「ナンヂノケツコンヲノロフ。」密月旅行の旅出の車中で、龍太郎の電報を讀んだときの、不吉な恐怖が、思ひ出された。汝の結婚を呪ふ！　靜子は、わなわなと身震ひした。實際、今から考へると龍太郎に呪はれ了つた結婚だつた。新聞の死亡廣告を見て、遠方に居る亡夫の友人、同期に卒業した學友からなどの弔電が、瀕々として來た。靜子は、さうした弔電の中に、

「ナンヂノシヲヨロコブ。」と云ふ龍太郎の弔電、否祝電が、ありはしないかと思ふと、「電報と！」云ふ聲がする度に、身體が震えた。「電報！」と云ふ聲がするたびに、龍太郎の高らかな嘲笑が、聞えるやうで、靜子は身體が、冷たくなるやうに思つた。

告別式の混雜を避けさせるために、洋一と留美子とは、一時から三時までの間、女中を附けて山

內へ遊びにやつて置いたのだが、子供達は、來る自働車も來る自働車も自分の家に前に停るのを見ると、

「おお！　又お家へ來たよ。」とか。

「今度のも、きつとお家へ來るのよ。」などと、騷ぎ廻つて、女中の手を引つぱりながら、自分の家へ歸つて來た。そして母と、並んで父の棺側に坐りたがつた。そして、いつもの三十分毎位に、お菓子をねだる留美子が、おとなしく兩手を膝に置いて、時々疲れたやうに、母に靠れてかかるのを感ずるたびに、靜子は新しい涙が、胸の底から溢れて來るのを感じた。そして、たとひ山は裂け海はあせる世が來ても、留美子と洋一とを、育て上げずには、置かないと云ふ誓ひを、自分の心に誓つた。

告別式の翌々日、靜子は父と洋一と留美子を連れて、俊輔の鄕里に、夫の骨を埋めに行つた駒井氏が、その地選出の代議士であり、鄕黨の間には人望家だつたので、葬儀は田舍としては、可なり盛大だつたが、駒井氏や靜子を、都會の貴人とし、貴婦人とし、遠くから仰ぐやうな、土地の人人の態度は、靜子を息苦しくした。又、俊輔一家の悲嘆を見るにつけても、俊輔の死は自分との呪

はれた結婚のためだと、責められるやうな氣がした。只蕭條とした秋の自然は、靜子の心を、一層淋しくすると同時に、洗ひ淨め透み通らせた。

洋一と留美子とを、靜子が東京で、養育することを、俊輔一家の人々は、欣んで承諾した。

駒井家への墓參をすませ、その地の親戚を二三訪れて、靜子等は慌しく東京に歸つた。

芝公園の家では、書生など留守居の人が、寂しく待つてゐた。そこも、もう直ぐ引き移らねばならぬ棲處なので、迎へる人も迎へられる人も、氣拔けしたやうな挨拶を交した。靜子は、他人の家の敷居を跨ぐやうな氣がした。どの部屋からも、溫い空氣が消え去つて、涼えびえした空氣が、漲つて居るやうに思つた。洋一や留美子に、泣き顏を見せまいとするのが、靜子の精一杯の努力だつた。

愛する夫の遺兒の、洋一と留美子とを立派に育て上げる。自分一人で、父親の愛も合せ注いでやつて、父なし兒の寂しさを、味はせずに大きくする。かうした希望や計畫に、靜子の傷いた虛しい心は、新しい曉の光を望まうとするのであつた。

それは、戀を憧れる處女の華やかな夢ではないが、純な力强い、母としての女性の愛であつた。

夫を失つて、今更ながら、夫の愛が分つた。夫に縋り切つてゐた自分であつたことが明になつて來た。優しい妻であり、慈しむ母であつたが、これからは强い戰ふ母として、生きねばならない自分であることが、分つた來た。

俊輔に對する愛を完成する。それは、愛し育くむことに外ならない。どうしても、今の靜子の力では、解決のつかない今後の生活上の問題に思ひ惱むと、靜子は二人の子供の相手をすることで凡てを紛らさうとするのであつた。

子供を連れて、芝公園に出て見ることもあつた。しかし、弱い秋の日射しさへが、靜子には强すぎるやうに思へた。夫は刑法上の罪を負ふたまま、死んでゐる。その死因さへが、世を欺いて傳へられてゐる。世間では、俊輔の生前の功蹟を忘れなかつた。また、それが收賄でなく贈賄、しかもそれの仲介にすぎないことが分ると、嘲罵を沿びせてゐた新聞までが、筆を洗つたやうに故人の才幹を惜しんでゐた。が、割合に寛大な世評にも拘はらず、人の顏を合はせるのが、何となく恥しかつた。二人の子供を連れて、山の中へでも逃れたかつた。そこで、外界との交渉を斷つて、子供を一心に育てることが、出來ればどんなに幸福でもあうかと思つた。金太郎を、育てた山姥の話しが

靜子の胸に思ひ浮んだ。

明け方前に、眠が覺める。睡眠不足の幾夜を過したのにも拘はらず、そんなことが多かつた。冷たい涙か、しと〻頬に傳はつてゐて、自分の心は爽やかに、澄んでゐる。泣いて、眼が覺めたことに、氣が付く。何故と思ふ。毎晩泊つて居て臭れる母の寢姿が目に着く。夫の死が思ひ出される。その日も、憂愁に明けるのかと思ふと新しい涙が、湧いてくる。かうした悲しい寢覺め心を抱いて靜子は潮く秋も深くなつた日々を、身も細るやうに過した。

母は、靜子の痛々しく思つた。その上、官舍を引き移らぬばならぬ日が、迫つた。母は、一日も早く東片町の實家へ引き移ることを勸めた。そこで、靜子を慰め溫めたいと思つた。

俊輔の死後、一週間ばかりして、靜子は駒井家へ歸つて來た。官舍を、引き拂ふとき、いろいろな家財を賣り拂つた。長い幸福な一生涯の使用に堪へるためにと、選んで買つた品々を賣り拂ふことが、靜子の心を、底から、搔き亂した。家具のどれも、これにも、夫との幸福な生活の記憶が、付きまとつてゐた。

さうした品々を、古道具商が、車に積んで運び去るとき、靜子は自分達の結婚生活の、幸福の遺

骸が、運び去られるやうな氣がした。

寂れてゐた東片町の家が、また賑はつて、灯が點つたやうに明るくなつてゐた。去年大學の工科を出た弟の義夫は、朝鮮總督府に奉職して居たので、俊輔の葬儀にも歸つて來なかつた。

考夫婦二人限りの生活は、娘と孫とをどんなに欣び迎へただらう。駒井氏も、孫と共に子供に歸つたやうに、一日を遊び過してしまふことが多くなつた。

靜子の心も、少しづつ落着いて來た。自分が、嫁ぐとき、流石恥しくて持つてゆかなかつた、少女時代に愛着した手道具等が、そのままあるのを見出して、家居の時代を懷しむ心が湧いた。二人の子供の面倒を見ながら、兩親からいたはれて、靜かな日々を過して、やがて不幸なその年も暮れてしまつた。

俊輔が、子供の爲にとて、貯蓄した金が、四千圓を越してゐた。が、物價が、日增しに高くなる時勢に、四千圓の金は子供を抱へた靜子には、心細い限りであつた。靜子は、夫に別れた當時何うかして、自分自身の職業を得たいと思つてゐた。彼女は跡見女學校に通つて居た頃、先生から繪をもつと、稽古してはどうかと云はれたことを覺えてゐた。女畫家、さうした空想を、頭の中に描か

ないでもなかつた。が、父母の家に來て、安穩の裡に、暮してゐると、自立して子供を育てようと云ふ決心も、忘れるともなく忘れてゐた。

三月に近い二月のある日だつた。空が、淺みどりに晴れて春らしい日さしが、庭の芝生に降り注いでゐた。その芝生でその年の春から幼稚園へ行く筈の洋一と留美子とが、遊んでゐた。靜子は緣側に腰かけながら、子供の遊ぶのを見守る傍、母の話し相手になつてゐた。

「借家が拂底で困りますねえ。」

母は世間話しのやうに云つた。

「官舍に居ると、そんな苦勞は少しもしませんでしたわ。」

「本當にね。でも、探すとなると、本當にいい借家がなくて困る。」

母は他人ごとでないやうに云ひつづけた。

「いい借家つて？　探していらつしやるの！」

「ええ。」

「誰にお賴まれなすつたの。」

母は、少し云ひ澱んだ。

「ああ、さう靜さんには云はなかつたけれども、お父様は、この家をお賣りになつたのよ。」

「ええ。」

靜子には、寢耳に水だつた。

「そして近々、引越さなけりや、ならないのだけれども。」

母は、いかにも云ひにくさうだつた。

靜子は、云ひ知らぬ不安を感じた。靜子が、俊輔と同棲してゐるとき、義夫が朝鮮へ去つた後、老夫婦には廣いと云ふので、邸宅を賣るのなら分つて居る。が、靜子が、二人の子供を連れて歸つて居る今、住み馴れた、十幾年住み馴れた、父にも母にも氣に入つてゐる、靜子には又なく懷しい家屋敷を賣ると云ふ母の言葉が、靜子の心を又なく暗くしてしまつた。靜子は、ふと亡き俊輔が、何かの折に、

「お父様は、高桑から金を借りて居るさうだぜ。あんな男から、金を借らなくても。」

と、呟くやうに言つたのを思ひ出した。後で、それとなく訊いて見ると、高桑と云ふのは有名な

高利貸だつた。

頼みにして來た父母の家が、賣られると云ふことは子供もろとも、走り込んだ頼む木蔭に、雨が洩る心地した。

その五（父無き悲しみ）

「家を賣るつて、何うして。」

平素なら、そんな不快な恐ろしい問題は、そつとして置くのだが、父母の家の盛衰、それにつながる自分達母子の運命を考へると、默つて聞き流すことは出來なかつた。

母は話し憎くさうだつた。が、母も何時かは知れることと思つたから、こんな話を始めたのだらう。靜かな、しかし力のない聲で話した。

「靜さんには、今まで何も話さなかつたのだが、家も以前のやうぢやないのよ。それに、近藤さんと大草さんに、連帶の判を捺いて上げたのがいけなかつたのだよ。それが、お二人ともあなつてしまつただらう。二三萬圓もの金を、お父様がお一人で引受けねばならぬことになつたのだよ。」

近藤と云ひ大草と云ひ、二人とも今度の疑獄事件で、失脚してしまつた代議士だつた。

「それに、去年の總選擧だつて、お父様はなかなか苦戦でね。一萬圓近くもかかつたし……」

さう云ひさして、母は默つた。

靜子は、胸を押し潰されるやうな氣がした。

「それでこの家も抵當には入つて居るのだが、抵當流れになるよりも、今賣つた方が、餘程得だらうと云ふので、到頭賣ることにほぼ話が纏つて居るのだが。」

母の顏には、寂しい影が絶えず動いた。

「そんなにお父様は、お困りなの。」

靜子は改まつて訊いた。

「困ると云つて、靜子さん達に迷惑をかけると云ふやうなことは決してないのだから、貴女が今の場合、一倍心配するだらうと思つて、默つて居やうと思つたのだが、家を賣るとなれば、どうせ知れることだから。でも、お父様だつて、お友達も澤山あることだし、この先生活に困るやうなことは決して無いから。」

母は、さう云つて慰めて呉れた。が、靜子の心に植ゑ付けられた不安は、もう抜き取る由もなかつた。

「妾、洋一を幼稚園にやるのは、もうよしませうかしら。」

と靜子は、取つて附けたやうに云つた。

「まあ、何うして。」

母は駭いて、訊き返した。

靜子は、默つて何とも答へなかつた。が、自分達の境遇が幼稚園に子供をやるほど、贅澤な、のんきなものでないことを、しみじみ悟らずには居られなかつた。

靜子は、生活と云ふ嚴肅な眞實に、今初めて面を接して、立つたと云つてもよかつた。今までの彼女の生活は、何と云つても餘裕があつた。其處には幸不幸の問題はあつたかも知れないが、生死の戰はなかつた。彼女は、娘としては父に、妻としては夫に縋つて居た。大樹にからむ紅蔦のやうに、獨立した生存ではなかつた。が、今は縋つて居た大樹は、伐り倒された。縋つてゐた大樹を伐り倒されたばかりでなく、自分自身一本の木として獨立し、いたいけな洋一や留美子を、縋り付か

せてやらねばならない。父や夫を賴るべき時は過ぎた。自分自身を賴らなければならない。自分自身に賴らなければならぬばかりでなく、他に賴らるべき時となつた。幼い何事も知らない二人の子供に、杖とも杜とも、生命とも光明とも、天とも地とも、賴られてやらねばならない時が來た。

馳け込んだ賴む木陰に屋が漏つて、父が財政上の窮境にあると聞いたとき、靜子は今までの、お嬢さまらしい樂天的な處世方針を否でも應でも捨てねばならなかつた。

夫の俊輔が死んだとき、彼女は絶望のどん底へ突き陷されたやうに思つたけれども、愛子の未來に對しては、多くの不安は感じなかつた。父が居る、父が何うにかして呉れると思つてゐた。父が子供達が大きくなるまでは、生きてゐて呉れるだらう。それなら、夫の遺した四千圓を預金にして置いて、留美子の婚資にしてもいい。夫の死んだ當座は、職業婦人にでもならうかと思つた靜子も何時の間にか、父母の懷に縋らうとする娘らしい氣持になつてゐた。處が今その父母の懷に、雨が漏り風が吹く。父が賴りにならない以上、四千圓の金が何にならう。安かるべしと思つた行手の海に、澎湃として怒濤が逆卷き始めたやうな氣がする。

父を當にせず、母子三人が生活し、子供二人を敎育し成長させて行くとして、四千圓はあまり輕

少だつた。さう考へると、靜子は行手に横はる險山を望み見る旅人のやうに、心戰く思ひがした。

が、自分一人を頼つてゐる、自分が育くまねば、他に誰人も育くむことなき、洋一と留美子のことを考へると、絶望の底から勇氣が、——人の母のみが感ずる勇氣が、勃々として湧いて來るのを覺えた。四千圓は少いかも知れない。が、夫の死に依つて、一文の遺産もなく子供丈を殘される母親が、世に幾人あるかを考へると、靜子は夫の遺した預金を有難く思はずには居られなかつた。

母から、家が賣られるかも知れないと云ふ凶い話を聞いてから、半月ばかり經つた頃だつた。三月の半、春は都も空に、ほのかな兆候を見せ始める頃だつた。靜子は、二人の子供を連れて、久し振に、上野公園へ遊びに行つた。

靜子の胸には、日曜毎に、親子四人で、遊び歩いた樂しい時代が瀕なく思ひ起された。

上野の山下で、電車を降りると、洋一は母の顏を見上げながら言つた。

「もう先、お父様と四人で來たときは、秋だつたか夏だつたかしら。」

子も幼な心に、同じことを思つてゐるのだと思ふと、靜子は、直ぐ目頭が、浸んで來るのを感じた。

「夏よ、ねえお母さん。」

留美子が、知つたか振りをして、母の顏を見上げながら云つた。着せてある眞紅なマントが、少し赤ちやんじみてゐる。夫が生きてゐるときは、今年の冬は買つてやらうと思つてゐたのが、つひドサクサ紛れに買はずに通した。と自分で思ひたい。が、實際は餘計な出費を愼しまうと云ふ心が知らず知らず動いて居たのだと思ふと、寂しい氣持がした。今着せてある錦紗の友禪がもう此子の贅澤の名殘りかも知れない。もう、こんな着物が容易に、買つてやられる身分ではない。さうと知つたら、何時までも着られるやうに、もつとじみな模樣を見立てて置くのだつたと靜子は思つた。

公園を一廻りしてから、子供達の足の向くのは動物園だつた。入口で切符を買ふのを、もどかしがりながら、二人は園内に馳け入つた。

「僕は象を一番に見るのだよ。象が、一番大きいから。」

洋一は、さう云ひながら、低くなつて居る象小屋のある廣場へ先に立つて馳け下りる。留美子が負けないやうに、その後からヨチヨチと足早に馳ける。何と云ふ生々とした二人だらう。父を失つた悲しみなどは、この生長し行く新しい生命の上に、何の惡い影響も與へて居ないのだ。親は無く

とも子は育つ。父は無くとも子は、太陽の子のやうに輝々しく生々と育つて行く。さう考へると、靜子は母らしい欣びと、親たることの有難さが、胸の中に一杯になつて來る。

暖かい三月の半とて、象小屋の前には、入園者が、三四十人も集つてゐた。その人垣に妨げられて、留美子には象が見えなかつた。

「見えないから、抱つこして頂戴よ。」

留美子は、さう云つて母に身を寄せた。こんな場所へ來る時、いつも留美子は父に抱かれ、洋一が先きに立つて、飛び歩くのが常だつた。今日は留美子は抱いて呉れる人がない爲か、父が居ないために、抱いて呉れる人はないと、子供心にも諦めたのか、山下で電車を降りてから、根よく歩きつづけてゐた。

象は、すさまじい鼻息を、嵐のやうに吹き立てながら、藁を喰つてゐた。

洋一は、一番前へ出て何時までも、象を見てゐたが、ふと氣を換へたやうに出て來ると、

「ねえ。お母さん、今度はお猿を見ませう。お猿、モンキイと云ふのでせう。僕お父さんに教はつたのよ。」

「坊やもお猿さん見たいの。」

留美子が、兄の口眞似をして云つた。

母子三人は、右の小丘に昇つた。小丘の上に猿を入れた金網の小屋が、春の暖い日を一杯に受けてゐた。

猿は、春の日の光の中に、金網から金網へ、枯枝から枯枝へ電光のやうに飛んだ。

「ねえ、お猿の赤ちやんが澤山居るわ。」

留美子は、目敏く見付けた。いかにも、生れて間もないと思はれる肌の毛のない、小さい猿の赤兒が幾疋も幾疋も、各自母たる牝猿の周圍に、ウヨウヨしてゐた。

「おう、赤ちやんが、澤山居ますわね。」

靜子も、動物を見るたのしい子供心を、いくらか心の裡に取返してゐた。

「五疋、六疋、七疋、八疋、九疋、十疋、十一疋、十二疋、十三疋、あ、彼處にも二疋居るな。丁度十五疋居る。」

洋一が數へ立てた。

「ねえ、お母さま。彼處に居るのが、お猿の母でせう。」洋一が訊いた。

「ええさうよ。」

「父は、何れかしら。」

靜子は、直ぐには答へられなかつた。子供が二言目には、父と云ふ言葉を口にするのが寂しかつた。絶えず、心の裡で父を慕つて居ればこそ、何かにつけて父と云ふことが氣にかかるのだ。

「あれでせうか。お猿の父は。」

さう、洋一に指し示されたお猿の父は、大きい枯枝の上へちよこんと坐つて、目をギロギロさせてゐた。

お猿から、獅子、獅子から河馬、河馬から白熊、白熊から羆と、目ぼしい動物をゆつくり見てしまつた時は、もう四時に近かつた。

「さあ、歸りませう。お祖母様が待つていらつしやるから。」

「ねえ、お母さま。お歸りに何處かへ寄つて御飯を喰べるのぢやないの。」

洋一は、一番おしまひの狐の檻を離れながらさう云つた。

父が生きて居た時は、上野の公園の歸りには精養軒へ行つて洋食を喰べたり、同朋町の花家へ行つて晩飯を食べた事がある。洋一はそれを思ひ出して居るのだ。それを思ひ出してゐだつて居るのだ、さう思ふと靜子は胸が閉がる樣な氣がした。が今はさうした餘分なお小使ひはない——たとひ有つた處で女子供で如何してそんな處へ立寄る事が出來やう。否精養軒で洋食を食べたりする生活は、夫の死と共に永久に失なはれた夢なのだ。さう思ふと靜子は淋しい氣がした。

「ええ今日はもう遲いから何處へも行かないの。その代り、玩具を買つて上げますから。」

靜子は、さう云つて洋一をなだめた。が、夫を失つた寂しさが、事毎に胸にしみて來るのを覺えた。

靜子が、洋一と留美子との手を引きながら、動物園の門を出たときだつた。洋一が平素のやうに一間ばかり先きへ走り進んだ時だつた。

「あぶない！　あぶない！」

と、車輪に觸れやうとする洋一を叱り飛ばしながら、矢のやうに過ぎ去る一輛の俥があつた。靜子は突き飛ばされさうになつた洋一の身を、案じながらも、チラリと俥上の人を見た。

蒼白い横顔！　それ丈で、靜子はソッと、身が竦むやうな氣がした。その白い頰に、喰ひ込むやうな金縁の眼鏡、紛ぎれもない河井龍太郎、夫の敵。

靜子は、我を忘れて、追ひすがつて罵りたいやうな、憤ほろしさを、ぢつと堪へて暫くの間は夕暮の弱い日光の中を、音もなく軋り行く俥の跡を見詰めて居た。俥は音樂學校の塀に添ふて暫く進んだ後、左へフイと曲つてしまつた。

「お母さま、何うしたの。何うしたの。」

洋一が、石のやうに立ち竦んで居る母に、不思議さうに訊いた。

「いいえ！　どうもしないの。」

父が、龍太郎が上野の櫻木町に住んでゐると何かの序に云つたのを思ひ出した。櫻木町に住んで居るのだとすれば、今の俥はその人に紛ぎれはない。

子供を連れて、久し振に働物園へ來る丈でも、子供に父のない悲しさ不自由さを、どれ丈味はしたか分らない。このいたいけな子供達から、父を奪ひ去つたのは誰だらう。むろん、私利私益の心がなくても、法律に觸れたのは、夫の罪に違はない。が、龍太郎が、あれほど冷酷に復仇的に出な

ければ、夫は決して死んではゐない。たとひ、官海に望は絶つても、實業の方面では、夫が雄飛する天地はいくらでもあつたのだ。さう思ふと、靜子は龍太郎が恨まれる。

龍太郎に對する怨恨を、胸の裡にたぎらせながら、二人の愛兒に手を曳かれて、山下に出、そこで玩具を買つてから、廣小路で電車に乘り、東片町の家へ歸つたのは、もう五時近い頃だつた。

その六（債鬼の爪）

上野の公園内を、ぐるぐる歩き廻つた上、動物園内でも、丘を登つたり下つたりしたので、靜子さへ可なり疲れて居た。まして、小さい洋一と留美子とは、見るもいたいたしい程に、疲れてゐた。

東片町の家に歸り着いたとき、靜子は蘇るやうにホッとした。それと同時に子供を連れて歩いた氣苦勞が、一時に身體中に、浸み出て來たやうな疲勞を感じた。

が、玄關を上つたとき、家の中が妙に、殺氣を帶びた靜けさをしてゐるのに氣が付いた。こんなとき、――湯屋への行き歸りにさへ、いそいそと送り迎へて呉れる母が、姿を見せないので今では

二人しか居ない召使ひの内の一人が、淋しさうに出迎へて呉れたばかりだつた。

「お母さまはお留守？」

靜子は、何故だか胸騒ぎがして、その女中に訊かずには居られなかつた。

「いいえ、奥にいらつしやいます。」

「さう。」

母が云ると云ふことで、安心すると一緒に、居ながら出迎へて呉れぬことが、妙に不安だつた。

「さあ、早くお祖母さんの處へいらつしやい。」

母に云はれて、洋一と留美子は奥の茶の間への廊下を、もつれながら走つて行つた。

「お祖母さま、只今。」

「只今歸りました。」

子供達が、元氣よく逆しるやうに挨拶するのに、母が、

「おう、お歸りかへ。」と、寂しく答へるのを聽きながら、靜子は茶の間へは入つて行つた。

母は、茶の間の長火針を前にして、しよんぼりと坐つてゐた。二人の孫が、無事に歸つたのを迎へながらも、その老いた上品な面に、微笑の影さへ浮んでゐなかつた。そればかりでなく、兩眼が濕んで悲痛な色が、額に深く刻み付けられてゐる。靜子は、水を浴びせられたやうな駭きを感ぜずには居られなかつた。

「只今。」

靜子は、さう挨拶しながら、母の心の秘密を探ぐるやうにぢつと見詰めた。

「お歸りなさい！」

母の聲は、小さく顫えてゐた。云ひ終ると共に涙がにじみ出るやうな聲だつた。

「何うかなさつたのですか。」

靜子は、深い不安を感じながら訊いた。

「いいえ。」

母は、事もなげに打ち消した。が、何かあつたことは、そのいたましい表情が、雄辯に物語つた

その時に、洋一が、――今まで祖母と母との顔を、不思議さうにぢろぢろと、見比べてゐた洋一が

ふと立ち上ると、つかつかと祖母の背後の茶簞笥の前に立つてゐた。

「お祖母さん！　此の紙何うしたの？」

靜子は、駭いて洋一を見た。洋一の白い小さい手は、茶箪笥の引出しをペタペタと封じて居る幾つもの白い紙をいぢつてゐた。

靜子も、之れを見て、駭きの言葉を出さうとした。が、母の顏を、一目見たとき、その聲は、咽喉に詰まつてしまつた。何と云ふいたましい表情が、母の顏に漲つてゐたことだらう。恥と悲しみとが白く痞せてしまつた母の顏に、一面に浮んでゐた。母は、洋一の方は見ないで、長火鉢の上に默つて老顏を伏せてしまつた。

「えい！　何？　お母さま、この紙は？」

祖母の死より強い恥と悲しみを知る由もない孫は、今度は母親を振り返つて訊いた。

引出しの上に、ペタペタと貼られてある紙、靜子も生涯の裡に、こんな紙を見るのは初めてである。が、人傳に、それが何であるかは分つてゐる。それは、恐ろしい債鬼の爪が、家の中の家財道具を搔き廻した跡である。それは厭はしい執達吏が、――債鬼の爪たる執達吏が、容赦もなく殘して行つた爪の跡である。それと氣が付くと、靜子の胸にも、あさましさと情なさが一杯になつた。

「ねえ、お母さま、何なの。何うして、こんな紙を貼るの？」

洋一は、三度訊いた。

「洋ちやん、そんなことは何うでもいいから、留美子と一緒に、彼方へ行つて、さとに着物を着換させてお貰ひなさい！」

靜子はこみ上げて來る涙を匿して、聲高に洋一に命じた。洋一は、その不思議な紙を物珍らしさうに、幾度も振り返りながら、留美子と一緒に納戸の方へ出て行つた。

孫達が見えなくなると、母はしくしくと泣き始めた。

「お母さま、何うしたのです。一體。」

靜子の聲もおろおろと顫えた。

「面目ない！」

母は、さめざめ泣いた。

「何うしたのです。こんなに突然、差押へられなければならなかつたのですか。」

母は、はふり落る涙を拭ひながら、

「お父様が、金貸を今日散々罵倒なさつたのですよ。例の御氣性だから、カツとなつて、その男を應接室から曳きずつて、お出しになつたのですよ。それで、向ふも意地になつて急にこんな仕返しをしたのです。まあ、恥しい、執達吏に、家財道具を封印されるなんて、その上、お前に、こんな處を見せるなんて、洋一から、訊かれたとき、妾は穴があれば、はいりたいと思つたよ。」

母は云ひ終つて、再びさめさめと泣いた。

「それでお父様は、何うしていらつしやるのです。」

「先刻、火のやうに怒つて、お出かけになつたのです。直ぐにでも、金策が出來るやうなお口吻であつたけれども、何しろ大抵のお友達には、一度ならず迷惑をかけてゐるのだし、その上壹萬圓近い金額だから、直ぐそれと出來るものぢやないと思ふのだよ。でも、何うかして、この嫌なもの丈は、明日にも除りたいものですね。洋一や留美子に、こんなものを見せて置くのは、死ぬよりも、辛いからね。」

それは、靜子も同じ事だつた。もし、明日も除れないやうだつたら、二人を連れて、今夜にでも牛込の親類の家へでも當分行つて居たいやうな氣がした。が、恥と悲しみに、打ち叩かれてゐる母を、一人捨てて去ることを考へると、さうした自分達本位の行動も採りかねた。

靜子と母とが、地獄の底へでも、引き込まれさうな、不快な氣持に閉されて居るとき、差押へから漸く免かれたらしい不斷着を着た洋一と留美子とが、快活に茶の間へ歸つて來た。洋一は、何か珍らしい發見でもしたやうに云つた。

「ねえ！　お母さま、お納戸の箪笥にも、みんな同じ紙が貼つてあるよ。誰が貼つたの？　お祖父さまが貼つたの！」

靜子は、頭がふらふらして、容易には言葉が出なかつた。が、ちつと氣を落ち着けて、

「さうですよ。お祖父さまが、お貼りになつたのですよ。」と洋一の云つたことを、肯定した。

實際、それは、それの本當の原因を考へると、お祖父さまなる駒井氏の貼つたものには違なかつた。

その七（救ひの手）

その夜、靜子は容易は眠られなかつた。兩側に、寢させてある留美子と洋一とが、スヤスヤと安

らかな、いびきを立て、天使のやうな眠りを、續けてゐるのを見ながら、目が悲しみに好きつて、ニヒリヘは何だ

何うしても眠むられなかつた。つひ、去年の秋までは、不幸と云ふ字は、自分の辭書には不必要だと思つたほど、幸福であつた生涯が、砂丘の家の崩れるやうに、崩れ始めて、不幸が踵を接して

やつて來る。家宅捜索、執達吏！　人傳にのみ、聞いてゐた、新聞の上でのみ讀んでゐた人の世の恥辱を、夫の上に見、父の上に見る。父が沒落してしまへば、洋一と留美子を育てて行くのは、自分の二つの腕の力を頼る外はない。それを思ふと、母らしい勇氣が、胸の中に、勃々と湧いて來るが、しかし、自分一人で立つて行くには、人生は餘りに恐しい。執達吏とか家宅捜索とか、人生の物凄い姿を、見た丈に、人生が恐しい。二人の愛兒を、抱きしめながら、渡つて行く人生が、何となく恐しい。取とめもなく考へて行けば行くほど、眠が冴えて眠られなかつた。それでも、十二時近く父が歸つて來て、奥の部屋で、母と二言三言話してゐる言葉が、平常ものやうに、快活なので靜子は何となく、心が安らかになり、昔のやうに、父が頼もしく思はれ、明日が來れば明日の太陽が、又輝々として輝くと云ふやうな、明るい氣持が、ほのかにし始めたので、とろとろと眠ることが出來た。

翌くる日は、鮮かに晴れた早春の一日だつた。家財道具に附いてゐる封印から湧く淫慘な氣が家中を閉してゐたけれども、庭には春らしい光と欣びが、一杯に陰れてゐた。芝生は青みそめ、若い櫻の梢は、ほのかな赤味を持ち、冬の間泉水に潜んでゐた錦魚は、かすかながら温み初めた水に、その尾や鰭を動かし始めてゐた。

洋一と留美子とは、早くから起きて、庭へ出て遊んでゐた。封印が簞笥に附いてゐるなどと云ふことは、もう洋一の頭にはなかつた。純に、淨く、春の若草のやうに生長して行く子供の頭には、如何なる汚らはしいものも、その跡を殘す力はない。

朝食の時、靜子は父や母と同じ食卓に就いた。母は、昨夕とは別人のやうに元氣だつた。父は靜子の顏を見ると快活に笑つた。

「はゝゝゝ、駭かして濟まなかつたのう。俺がついつい高桑の奴を小突き廻したのが、惡かつたのぢやが、安心して呉れい。昨日、スツパリと拂つてやつたから、午前中にはこんな汚はしいものは無くなる。いくら、貧乏したつて、一萬や二萬の金に、困る俺ぢやない！　はゝゝゝ。」

父は、戸外の天候のやうに晴やかだつた、靜子は、父の快活さに、痞我慢らしい所があるのが淋

しかつたが、それでも今日中に、こんな不快な氣持から逃れ得ることが出來るのが、嬉しかつた。

朝の食事が濟むと、靜子は洋一と留美子とを連れて、戸外へ出た。午前中に、金貸の高桑や、執達吏などが來るかも知れぬと思ふと、さうした情景を子供達に見せるのが嫌だつた。子供を連れて本郷の通に出て、大學の構内へは入つて、御殿の前の池の畔などで、それとなく時を費して、十二時近くなつてから、東片町の家へ歸つて來た。どうか、あの不快な封印が取り除かれて居るやうにと、心の裡に念じながら。

靜子達が、家へ歸つて來たとき、門前に一臺の自働車が、止まつてゐるのを知つた。靜子は、最初それを金貸の乘つて來たものではないかと思つた。が、高桑らしく思はれる男が、平素の着物に、前掛をかけてゐる姿を思ひ出すと、自働車に乘るなど云ふことが、可笑しく思はれたので、直ぐ安心した。父のお友達の誰かが、父の急場に馳け着けて呉れたのだ。この自働車の主こそ一家の經濟上の危難と、一家の恥辱とを救つて呉れた救ひ主に、違ない。靜子は、さう思ふとその自動車の主に、輕い感謝の心をいだきながら、子供達を促がせて、門をはいつた。

自動車の主は、應接室で父と話してゐるらしかつた。玄關を上ると、父の快活に笑ふ聲が、其處

から聞えて來た。茶の間へは入ると、母はニコヤカに靜子達を出迎へた。それも、無理はなかつた母の背後の茶簞笥から、不快な紙片は剝ぎ取られて、痕跡も殘らぬまでに拭き淨められてゐた。靜子もそれを見ると、曇つてゐた空が、一時に晴れ渡つたやうな爽快な氣持がした。

靜子と母とは、不言不語の間に、安心の微笑を交へた。

「ああ、紙は取つちやつたのだね。」

洋一まで、嬉しげに云つた。

洋一の言葉に、靜子も、靜子の母も微笑とも苦笑とも付かぬものが、唇を洩れた。

「本當に都合よく行つてね。お父様に、同情して下さる方が出來てね。若しかすると、此の家も當らないで、濟むかも知れないのだよ。」

洋一と留美子とが、緣側へ出て行くのを見ると、母は靜かに娘に云つた。

「さう。」

靜子も、俄に春が復つたやうに嬉しかつた。

「お父様の凡ての借金の整理を付て下さらうと云ふのだよ。」

一まあ、それは結構ですわね。一體何方です。」

母は、何故だか少し云ひ澱んだ。

強ひて聞くことでもないので、靜子も默つた。ただ父母の家が、賣られないで、濟むと云ふことは、現在の靜子に、どれほどの福音だか分らなかつた。

「お客樣が來ていつしやるのね。」

靜子は、暫らくしてから、何氣なく母に訊いた。その客の名を知れば、今度の救ひの主が誰であるかと云ふことが、略々分るだらうと思つたからである。が、母は何故だか云ひ澱んだ。

「ええ、一寸。」

さう云つたまま、母は默つてしまつた。

十分ばかりして、客が辭して歸る氣勢がした。父が玄關まで送つて出た。

「君も、昔を忘れないやうに、せいぜい遊びに來て呉れたまへ。」

父の聲高な挨拶が、何故ともなく靜子の胸を深く抉つた。

父は、應接間へ一旦引き返したらしいが、直ぐ茶の間へ出て來た。父の顏には、得意な微笑が滾

れるやうに出てゐた。彼は、靜子の顏を見ると、快活に云つた。

「靜！　お前にも、心配をかけて濟まないなあ。が、もうスツカリ片が附いたから、安心しておくれ。俺も今度と云ふ今度は、スツカリ浮び上つたよ　ある男が、俺に同情をして呉れてな。誰だと思ふ、あの河井が、あの河井龍太郎が……」

靜子は、地獄の底へ突き陷されたやうな、激動を感じた。顏色が、一時に蒼ざめたことが、自分に分つた。

父は、靜子の心の激動に、氣が付かぬやうに喋べり續けた。

「昨日、金策のために、同鄕の佐野常右衛門の處へ行つたのだよ。すると、佐野が云ふのには、貴君は俺の處へ來るよりも、河井龍太郎の處へ行つて御覽なさい。あれは、貴君の處へ門弟同樣に出入してゐた男でせう。それに、去年の暮に父が死んだので、貳百萬圓近い財產が、あの男の自由になつて居るのぢや。それで、近々司法官を廢して、實業方面へ打つて出ようと云つて居るさうだから、貴君が行きさへすれば、五萬や十萬の金は、まさか嫌とは云ふまい。かう、佐野が云ふのぢや俺も、お前の緣談以來、河井とは行き違つて會つてゐないが、何もお互に顏を會はせられないと云

ふ間柄でもないので、思ひ切つて訪ねて話して見たのぢや。すると、河井の奴、流石に、昔の宜しみを思ひ出して、出來る丈力になつて呉れると云ふのぢや。それで、高桑に返す九千圓の小切手を直ぐ書いて呉れたばかりでなく、俺の借金は一通り整理をして呉れると云ふのぢや。それに、今度感ずる處があつて、司法官の方をよして、實業方面に活動しようと思ふから、俺に名前を借して呉れと云ふのぢや。」

父は、窮境を救ひ上げられた欣びに燃えながら話し續けた。靜子は、父の話を聞いてゐる中に太陽が暗くなるやうな地が崩れるやうなあさましさと不愉快さを感じた。今まで、相當尊敬してゐた父が、限なく賤やしく思はれた。政治上には節操を保つてゐた父が、金のためには、かうまで賤しくなるのかと思つた。むろん、父は自分が、河井を怨んでゐるほど、河井を怨んで居ないかも知れない、が、自分が、河井を怨んでゐることを少しは察してもいい譯だ。どんなに、金に困らうとも自分の娘が、夫の敵として怨んでゐる男に、頭を下げて金を借りなくてもいいではないか。

河井の助けに依つて、封印が取り除かれるよりも、あの三倍も四倍もの封印が、ベタベタと家中に貼られる方が、どれ丈快いか分りはしない。河井の助力で、家を賣らないで濟むよりも、どん

な裏店へ住んでもいいから、河井などから、塵一つの助力も受けたくない。家財道具から、封印を取り除くのはいい。が、その代りに、父の心にも母の心にも、河井と云ふ判を押した恩義の封印がベタベタと貼られるのだと思ふと子は、身も心も裂かれるやうに口惜しかつた。

靜子の顏は、白蠟の如く白くなつてしまつた。眼丈が物凄く輝いた。

「河井さんから、そんなことをして貰はなければ、いけなかつたのですか。」

靜子の言葉には、父に對する千萬無量の叱責が籠つてゐた。

「いけないと云ふ事はないがね。お父さんも、いろいろ困つてゐたものだから。」

父は遺に、良心の不安を感ずるやうに、口籠つた。靜子は胸の裡の口惜しさが、逆しるやうに、口の中に湧いて出た。云ひたい丈云つて見たいやうな氣がした。が、家政上の危機を脱してホツと一息ついてゐる父に、苦い言葉を娘の口から、聞かせることは、餘りに痛ましいことだつた。

自分が、龍太郎を憎んでゐるほど、父が龍太郎を憎んでゐないのは、當然なことかも知れない。父の立場から云へば、龍太郎から金を借りることも、それほど邪しいことでないのかも知れない。

愈々と云ふ場合には、子は子の立場があり、父は父の立場があるのだ。玆まで行けば、父子と云へ

ども淋しく袂を分つ外はないのだ。さう思つて、靜子は穏かならぬ胸を、辛うじて撫でさすつた。

が、龍太郎の恩が、――いな龍太郎の手が――靜子には、それが厭手と云ふやうにさへ、感じられた――父母の家に、懸つてゐる以上、父母の家と雖も、敵の家である。篠原俊輔の妻たり子たるものが、永住する處ではない。靜子は、心の底深く父母の家を捨てることを決心した。

その八（悲しきいさかひ）

河井が、父に施した恩を、靜子は何うしても、純な動機からだとは思はなかつた。恩を施すことは、相手の頭上に立つことである。相手を精神的に征服してしまふことである。靜子の父に恩を施すことに依つて、靜子をも間接に壓迫しようとして居るのだ。お前の夫の俊輔は、わづかな蹉跌から、脆くも自分で自分自つを犇つて居るではないか。それだのに、この河井はお前の父の危急を、これほど寛大に、これほど立派に救つてやつたではないか。面當、――靜子は河井の心持を、さう云つた風に解釋せずに居られなかつた。

その上、夫の遺言には何と書いてあつたにしろ、夫が毒を仰ぐ刹那に、龍太郎を何う思つたかは

靜子の心にも、ハツキリと判る。今、靜子の父が、龍太郎の恩義を受け、間接に靜子や洋一や留美子までが、その恩義を受けて居ることを知つたならば、夫が地下に、どれほど殘念がるかは、靜子にはハツキリ判つてゐた。が、もし窮乏に貧して居る父に、龍太郎の助力を受くるなと云ふのは無理である。が、父が龍太郎の助力を受くることが、父の自由であるとしたならば、龍太郎の恩を直接にも間接にも、絶對に受けまいとすることは子の自由である。靜子は、さう考へた。そして、一日も早く父の家を出づる機會を待つてゐた。

お茶の水の女子高等師範附屬幼稚園へ出してあつた、洋一の願書が、聞き屆けられて、四月何日に出頭せよと云ふ通知が來た。が、その日が來ても、靜子は洋一を連れて、出掛けるやうな氣勢を見せなかつた。

「今日は、洋ちやんを連れて行くのぢやないの。」

その日の朝、母は心配して、靜子に訊いた。

「いいえ。」

靜子は、ハツキリと答へた。

「幼稚園へ入れるのぢやなかつたのかい。」

母は、不思議さうに云つた。

「ええ、もう考へましたの。幼稚園へ入れるやうな、女中を附け添はして幼稚園へ通はせるやうな身分かどうかと、考へて見ましたの。」

靜子は落着いた口調で答へた。

「お前、そんなに急に心細いことを云はなくてもいいぢやないの。お父様は、今度河井さんと一緒に、會社をお創めになるし、いろいろ御運が向いて來たやうだから、お前は洋一や留美子のことも お父様にお委せして置けばいいぢやないか。お前が、一人でくよくよと心配することはないぢやないか。」

河井と一緒になつて榮える父からは、靜子は塵一つの助力をも受けたくなかつた。が、露骨に母の前には、その事は云はれなかつた。

「それは、安心して居ますわ。でも、小さい時から、もつと堅實な生活に馴らせて置きたいと思ひますの。何しろ、父親がないのですから、いさと云ふ時は、直ぐ獨立の出來るやうに教育して置きたいと思ひますの。」

さう答へたまま、靜子は母が幾度勸めても、幼稚園へ連れて行かうとは云はなかつた。

母の言葉にあつたやうな、父が河井と共同して、事業を興さうとして居ることが、日一日と明らかになつた。父は一週間に一二度宛は、河井と顏を會はしてゐるらしかつた。晩食の時など、父はよく世間話の序に云つた。

「河井は、追に頭がいいなあ。學生時代に秀才だつた丈ある。何をしても、數字的で一點の抜目もない。頭が、水のやうに明晰だ。あの男と一緒なら、どんな事業だつて成功する。」

河井龍太郎に對する父の賞讃の言葉は、まだ新しい墓土の下に眠つてゐる、自分の夫に對する侮辱のやうに、靜子には聞きなされた。靜子は、そんなとき肉親の父の前に居ることが、針の席に坐つて居るやうに、心苦しかつた。

父が、事業の話で、河井に何處かの料理店などへ、招待され、微醉を帶びて、歸つて來る時などは、河井に對する讃美は、平素より烈しかつた。靜子は、そんなとき茶の間を、サツサと出て、自分の寢室へ逃げて來た、留美子と洋一の間に、靜に身を横たへるのであつた。そして、無念の涙が

頬を傳ふのを、しづかに拭ひ取るのであつた。

この裡、河井が靜子の家を訪ふことが、二三度續いた。司法官を廢した河井は、以前とは別人のやうな華美な生活に、身を委ねて居るらしかつた。河井の定紋の入つた自動車が、靜子の家の門にピタリと横附けにされるのであつた。父は、珍客を迎へるやうに、いそいそと河井を迎へた。母までが、河井が來るのを嬉しがつて居る容子が、靜子の眼にはあさましいやうにさへ思はれた。

靜子は、幾度父の家を出ることを考へたか分らなかつた。が、家を出ると、直ぐ母子三人の生活問題があつた。衣食住の問題があつた。子供二人を抱へては、凡てが單純な問題ではなかつた。子供二人の世話をすることさへ一人前の仕事である。職業を求めるなど云ふことは、思ひも寄らなかつた。その上、母子が身を寄せるべき、貸間一つを見付けることさへ、容易なことではなかつた。彼女は、恥辱を忍びながら、河井龍太郎の呼吸のかかる父母の家に、無念の一日一日を過す外はなかつた。

父と河井龍太郎とが計畫してゐた愛知水力電氣株式會社が創立總會を擧げると云ふ二三日前だつた。その打ち合せの爲だらう。龍太郎は、靜子の父を訪ねて來た。父は上機嫌で、龍太郎を自分の

書齋へ通した。直ぐ夕飯時だつたので、酒肴が運ばれた。

母までが、座敷へ出て歡待して居るらしかつた。靜子は、洋一と留美子を相手にして、自分の居間から、一歩も出なかつた。父が、生きてゐた時、來客がある毎に、洋一も留美子も、客の傍へ出る習慣が付いてゐるので、二人とも河井が來てゐる座敷の方へ出たがつた。が、靜子は嚴しく制した。

「お客樣は誰れ？」

洋一は、幾度も來客を氣にして訊いた。

「洋ちやんなんかの知らない恐い叔父さんですよ。」

靜子は、さう云つて、洋一達の注意を外へ向けた。が、靜子がふと用事があつて、茶の間へ行き自分の居間へ歸つて來ると、二人とも何時の間にか居なくなつてゐる。

「洋ちやん！　洋ちやん！」

靜子は、中音に呼んで見た。が、洋一の聲は何處からも答へなかつた。河井の傍へ行つたのだなと思ふと、靜子は火の塊のやうなものが、グツと胸にこみ上げて來た。子供迄が、自分を裏切るの

か、さう思ふと靜子は、全身が燒かれるやうないらいらしさを感じた。

そのとき、父の書齋から、バタバタと子供の足音がして、洋一と留美子とが、歸つて來た。

「お母さま、こんなものを伯父さまからいただいたのよ。」

洋一が、精巧な玩具の寫眞機らしいものを差し上げた。

「留美子もいただいたのよ。」

さう云ひながら、彼女もいたいけな手に、西洋人形の眼の動く仕掛になつてゐるのを、誇らしげに持つて居た。

靜子は、頭がぐらぐらするやうに思つた。

「そんなものを戴くのぢやありませんよ。」

さう叫ぶと、靜子は狂したやうに、愛兒の手から、寫眞機と人形とを取り上げると、力委せに庭石の上に、叩き付けた。慎しみ深い靜子も、龍太郎に對する極度の怒から、我を忘れてしまつたのである。

戰ふ母

その一（呪はしき光明）

母の唐突な仕打ちに合つて、留美子は、小さい身體を搖ぶりながら、わつと泣き出してしまつた土が、臘のやうに白い片頰に付いてゐる西洋人形の方を、眺める勇氣もなかつた。洋一は、最初、あつけにとられた容子だつたが、その小さな男性的性質に還ると、急に怒り泣きしながら母に打ちかかつて來た。

靜子は、寫眞器と西洋人形とが、庭石に觸れる音を聞くと、あつと我に返つた。倒れるやうに膝をつくと、緣先にベツタリと坐り込んでしまつた。

洋一の小さ拳を輕く受けながら、留美子を抱き上げて、二人を賺し宥めた。

珍しい玩具を貰つて、無心に欣び立つてゐる幼兒に、何の罪あらう。その欣びを與へたもの

が、龍太郎であればこそ、激しい怒の發作に襲はれたのだ。父の書齋で、河井の手から、土産物を受取つた子供等が、勇み立つて、

「お母様にお見せして來ようよ。留美ちやん、行かうよ。」と、云つて洋一が立上るのを、父も微笑みながら、背いたであらう情景を、思ひ浮べると、靜子は河井の自分達に對する冷い侮蔑を感じないではゐられなかつた。完全に、亡き夫と自分との物であるべき寶玉に、瑕なり汚點なりを印されたやうに、口惜しかつた。

が、その口惜しさを、罪のない愛兒達の上に洩したのは、靜子の誤ちだつた。

「ねえ、お母さんが惡かつたからね。留美ちやん堪忍してね。……お母さんがねもつともつと大きい、可愛いお人形を買つて上げますからね。洋ちやんも、玩具でなくて、本當の寫眞機を買つて上げますからね。」

「本當！　お父さんが、持つてゐたやうな、大きいのを買つて呉れる？」

洋一の機嫌は、何時の間にか直つてゐた。

「ええ、買つて上げますとも。さあ、留美ちやん、泣くぢやありませんよ。そんな顏をしてゐると

又洋ちやんに、泣蟲だと云つて、笑はれますよ。」

それでも、留美子は、眼に涙を湛へて、庭に投げられた人形を、母の膝で口惜しさうに見てゐた。

「あの小父さんには、是からだつて、何も頂くんぢやありませんよ。あの小父さんから頂くと、お母さんの子にはしませんよ。」

靜子の憤怒は、まだ充分には靜まつてゐなかつた。

「なぜいけないの？」

洋一は、兄らしく疑問を挾んだ。

「なぜだつて、いけません。大きくなつたら分ります。他人様から頂かなくつても、お母さんが何だつて、買つて上げますから。」

靜子は、河井にも父にも母にも、反抗するやうに、強く云ひ切つた。

若芽の薫る庭の樹々に、甘い春の夜が、這ひ寄つて來た。

子供の氣を直して、靜子は二人に其處を去らせた。

子供の姿が見えなくなると、壊れた河井の贈物を、靜子は汚らはしげに、拾ひ上げた。二度と供達の眼に觸れない處に捨てて、しまひたかつた。さうすれば、父は狂氣じみた擧動として責めるだらう。靜子は、子供達の目の屆かない處にそれを置いた。

暫らくすると、父は龍太郎丈を座敷に殘して、茶の間に來た。酒氣で紅潮を呈してゐる頰に、若がへつたやうな眸を輝かせて、母に云つてゐた。

「これから、河井君と柳橋の柳光亭まで、行つて來るからな。創立總會の前に、重だつたもの丈ももう一度集らうと云ふんだ。」

父は、陽氣に華やいでゐた。着換をしながらも、獨言のやうに云つた。

「これでまあ、義夫も朝鮮なんかへ行つて、つまらない氣苦勞をしないでも、俺達の會社へ歸つて來れば、幸ひ工科だし、どんな位置にでも着けると云ふ譯だ。」

弟までも！　弟までも、河井の勢力の下に、包括されるのかと思ふと、靜子は身の置き處も狹まる思ひがした。一家は、太陽の光をでも受くるやうに、河井のために、日に日に明るくなつて行く駒井の家に住んでゐる以上、否でも應でも、この呪はしい太陽の光を浴びなければならない。この

光を浴びることは、父に取つては、蘇生であり、母に取つては、安堵であり、義夫に取つては、出世であるかも知れない。が、靜子に取つては、それが恥辱であり苦痛である。その光を防ぎ戰ふことは、かよわい靜子に、不可能のことであるとすれば自分自身を、別な世界別な國に、隱して、その光を避くるより道はない。靜子は、寂しく唇を嚙みながら、身の將來を考へずには居られなかつた。

父の外出には、當然送り迎へをしなければならない。しかし、河井に誘ひ出されて行く今の場合、靜子はどうしても玄關口に立つ氣がしなかつた。

父と河井とを乘せた自動車の警笛音が、靜かな屋敷町に消えて行くのを感じながら、靜子はある不安に囚はれずにはゐられなかつた。

先には夫を斃し、今又父を擒にして、徐々に自分に迫らうとする魔から、如何すれば、自分自身を完全に、防ぎ得るかを考へると、いらだたしいやうな不安を感ぜずにはゐられなかつた。

果して、父の云ふやうに、父を社長にすることが、本當に必要なのかしら。水力電氣會社などは、政府政黨との關係が、大切であるにしろ、今では政治上に何の實權もない父が實業界に、どれ

ほど眞正に要求されてゐるのだらう。靜子は、時とすると、河井を中心に計畫されてゐる電氣會社も、その仰々しい株式募集の新聞廣告も、河井と云ふ一個人の靜子に對する執念を壓迫であり、侮辱であり、迫害の聲であり、呪詛の言葉であるやうにさへ思はれることがあつた。

その二（相乖く父子）

愛知水力電氣株式會社の創立總會は、櫻が春の誇りを壇にしてゐる盛春の一日、華々しい上野精養軒に開かれた。

靜子の父の俥は、老人の新しい希望をも載せて、花見客の往き交ふ間を縫ふて行つた。

父は、社長の椅子を占めることに確定してゐた。資本金一千萬圓の大會社の社長になると云ふ一事は、遂に靜子の心を動搖させた。父母の欣びを思ふと、靜子の不安も、ふと晴れる折もあつたが、さうした後には、直ぐ一層暗い焦慮の中に陷つて行くのが常だつた。

河井は、その資力と敏腕とを頼んで、自ら氣を負ひ、專務取締役に就任して、思ふさま快腕を振はうとしてゐるらしかつた。

總會の終つた後、靜子の父は、新橋か何處かの料亭で、河井の饗應を受けたと見え、夜遲く酒氣を帶びて、河井の自働車で送られて、東片町の家へ歸つて來た。

家でも、その日を祝ふ心か、佛壇と神棚にまでも、燈明が煌々と點じ、父の歸宅を母は、いそいそと待つてゐた。家全體が若返つたやうな中に、靜子の心丈は堅く閉ざされてゐた。それでも表面丈は母の手助けをしてゐた。

洋一や留美子も、家の氣配を感じて、何故ともなく勇み立つてゐた。

その日を祝ふため、燈明を灯された佛壇の中には、俊輔の靈だつて、鎭まつてゐる筈だ。靜子は幾度も幾度も、心の中で、夫への詫び言を繰り返した。洋一と留美子とを、そつと呼んで佛壇の前に、坐らせた。夫の靈に丈、別に禮拜する心であつた。清淨な涙が、靜子の頰に流れて、新しい快い涙が、湧いて來た。俊輔への誓ひを呟いてゐると、亡き夫が、靜かに燈明の彼方から、歩み寄つて來て、自分を皷舞するやうな思ひがした。

父は、その總會の盛況を、得意になつて話してゐた。そして、滿場一致で、自分が社長に選擧されたことを、誇らしげに話した。

春の夜は、靜子一人丈を殘して、喜びに輝いた一家を、柔らかに包んだまま、更けて行つた。

その日から、父と靜子とは、次第々々に背馳して行く生活を營んで、日々を迎へねばならなかつた。新しい事業に、醉ふてゐる父は、娘の感情には氣づかなかつた。父子の心が離れて行くとすれば、それはむろん靜子一人の責任だつた。さう思ふと、靜子は心苦しかつた。父に新しい世界が開けたことを純粹に欣びたい。そして、久しい不遇の地から、新しい活躍の天地を見出した父を、勵したい。が、その新しい天地が、河井の掌に依つて支へられてゐることを思ふと、靜子の心は、忽ちに暗くなつた。事毎に、父の口から、河井！　と云ふ言葉が出ることが、靜子の胸を殘酷に刺し貫いた。

會社の事務所は、暫らくの間、丸の内のXXビルデングの裡に置かれてゐた。父は、毎日のやうに出かけて行つた。訪問客の足が、急に繁くなつた。電話の鈴が、甦つたやうに晴やかな響を立て始めた。靜子が、取次ぎに出て見ると、圖らずも相手が、龍太郎であつたりして、アッと聲を呑んで、電話を切り父の怒を買ふことがあつた。

靜子は、母の眼を盜んで、新聞の職業紹介欄やよろづ案内を、見るとなく自さぐることが多く

なつた。

父は新設會社の發電所や、名古屋に建つ本社の設計圖などを母や靜子にまで見せて、欣ばしげに說明することがあつた。參謀本部の地圖に、電力を供給する工業會社の所在地や、電流を運ぶ高壓線や、計畫中の新電車豫定線路を、かき込んだ地圖などが、父の机上に堆積してゐた。

春雨が、夢のやうに煙つてゐた。それでも庭の土は、しつとり濕つて、散り易い櫻の花瓣を點綴してゐた。鬱陶しいまま、何時來るとなく夜氣が微かに漾つて甘い哀傷をそそつた。

靜子は父の新事業で、何となく家の空氣が、落着かないため遲れ遲れになつてゐた縫物を急いでゐた。庭の方を向いて、針を運んでゐた手許が、薄暗くなつて、電燈の方に向き直らなければならなかつた。今迄靜子の傍で、騒いでゐると思つた、洋一と留美子の姿が見えなくなつて、耳を傾けても、彼等の聲さへ聞えなかつた。

丁度、その時、輕い衣擦れの音をさせながら、母がその部屋には入つて來た。

「お父さんは、今晩も遲いだらうか。」

母は、相談をでもするやうに、靜子に訊しかけた。

「今日は、朝早く、お出かけになつたのだから、もうお歸りになると思ひますわ。」

「さうかしら。……でも、遲くなるといけないから、先に御飯をいただいては何う。」

さう云つて、母が洋一達を呼ぶと、二人は父の書齋の方から、バタバタ足音をさせながら、走つて來た。

「お祖母ちやん！　何？」

留美子は、輕く息をはづませてゐた。

「御飯ですよ。」

「御飯！」「御飯！」

二人は、子供の常として、御飯の聲を聞くと、いそいそしながら、食卓に就いた。

が、父が居ない食卓は、何となく物足りなかつた。子供達の他愛もない饒舌が、ふと途絶えたりすると、白々しい寂しさが、靜子の胸に感ぜられた。

食事の終る頃、父が歸つて來た。微醉を帶びて居ると見え、玄關口をはいると、はなやかな聲を家中に響かせた。

「えゝ！　飯は濟ませて來た。名古屋の方で、工事が着々進行したから、近日河井達と一緒に、四五日行つて來たけりばならない。」

さう云ひながら、抱へて居た折鞄を、書齋に入つた父は、平處を出て來ると、平素の溫容に似ず、險しい顏になつてゐた。

「靜子！　これを御覽なさい！」

父は、右手に持つてゐた白い折りたたんだ紙を、靜子の膝の上に投げ付けた。聲までが、怒りのために心持、顫えて居るやうに思はれた。靜子は父の思ひかけない怒りに、胸を顫はせながら、投げられた紙を擴げて見た。それは重要な會社の書類らしく、重役達が捺印した證書の上に洋一の仕事らしく、赤インキい線が、縱横にのたくつて居る。

「ま……！」

靜子は、思はず聲を上げて、洋一の方をぢつと見た。洋一も、自分の惡戲が、祖父を怒らしたことを感じたらしく、喰べさしの箸を茶碗に入れたまま、面を伏せてゐた。

「洋一だらう。こんなことをしたのは。机の引出しに入れてあるものを取出す奴があるものか。惡

戯をする紙なら、幾らでもあるぢやないか。第一お前がいけない。」

さう云つて、父は靜子の顏を見た。靜子は、父の眼の裡に冷たい光を見ると、身體が急に堅くなつたやうに思つた。

「大切なものと大切でないものとの區別位、平生から敎へなければいけない。もう幾つになると思ふ。」

これまでは、父と靜子との間に、何處一つ險しい所がなかつた。が、靜子が、父の新事業を苦々しく思つてゐることが父の心にも、映つてゐるのだらう。今日の父の言葉には、何處となくトゲトゲしい所が、感ぜられた。何と云つても、事の分らない惡戯盛りの洋一がしたことを、さうまで角立てて云はなくてもいいだらう。靜子の父に對する反抗的な氣持がムラムラと動いた。

「大變な粗相を致しまして、申譯御座いません……さあ、洋ちやん、お祖父さんにあやまるんですよ。」

靜子は、顏を顰めながら、洋一を顧みて云つた。

「お祖父さん、堪忍して下さい！」

洋一は、坐り直して、一寸お辭儀をした。わが子の素直な容子を見てゐると、靜子は胸が、熱くなつて、眸が濕んで來た。

「お祖父さんの留守の間に、お祖父さんの部屋へは入るのぢやないよ。靜子！　これから、俺の居ない間に、洋一や留美子を、俺の部屋に入れないやうにしてくれ。困つたことをして呉れたものだ！」

父は、苦々しげに汚損された書類を見てゐた。

たとひ、どんな惡戯をしても、素直に詫びる孫の姿を見れば、一言賞めてやつて呉れてもいい、賞めて呉れないまでも、怒を和げて呉れてもいいと思ふと、靜子は父の態度が恨めしかつた　物質的榮達のためには、孫の愛までも、薄くしてゐるのかと思ふと、父が別人のやうにさへ思はれた。

留美子は母の袂に縋つて、物怖ぢしたやうに、祖父を見上げてゐた。

「何も分らなくつて、したので御座いますから、もういいでは御座いませんか。」

母が、靜子をかばふやうに云つて呉れた。

「だから、これから注意して呉れと云ふんだ。會社の重要書類を粗末にするやうに思はれると……

……」

父は、さう云ひさしながら、書類を取上げると、書齋へは入つて行つた。

「大切なものは、子供の手の屈かない所へ、しまつてお置きになればいいに。」

母は、靜子を慰め顏に云つた。

「だつて、大切なものを、あんなにしたのですもの。」

靜子は、口ではさう云ひながら心は平かでなかつた。譬ひどんな書類にしろ、會社内の書類なら、二度作れないことはない。

「孫が、こんなに惡戲をしたものだから。」

さう云つてしまへば、子供の惡戲を笑ひこそすれ、誰がその會社の社長を、書類を粗末にしたとて、咎め得よう。父が、再び作ることを苦にするのは、誰に對する遠慮であらう。河井や他の重役に對する、無意識に働いて居る卑屈な心が、さうした遠慮をさせるのだと思ふと、靜子は口惜しかつた。實權や實力なしに、社長になつてゐる父が寂しかつた。その父に、養はれてゐる自分達母子が、寂しかつた。父は、河井の勢力の下に、物質的榮達を求めて、段々心を卑屈にして行く。自

分も、河井の恩惠を間接に受けることに依つて、段々心を卑屈にさせて行くのではないかと思ふと靜子は堪らないやうな氣がした。

その三（男の執念）

靜子の父は、名古屋へ行つて、一週間ほど家を空けた。會社の關係のある方面の官民を饗應するために、滯在が長引いたと云つた。田舍の人々の朴訥さや、宴席での失錯などを、面白可笑しく話した。さうした父に接してゐると、十年前の元氣だつた父の姿が、甦つたかのやうでもあり、やつぱり靜子には慈愛深い父であるやうな氣がして、河井と一緒の旅であつたと云ふ事を忘れるまで、心が明るくなつた。

父が名古屋から歸つてから、二三日過ぎた頃だつたらう。ある夜、子供達が、寢床には入つてしまつた後、母は靜子に云つた。

「靜さんに、此間から話さう話さうと思つてゐたけれども、まだ確り定まつた事でないから云はなかつたのですがね。貴女にも欣んで貰はなければならないことがあるの。」